

俺に懐いた猫女が最高の狙撃手だった。

じえのたみ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

朝田詩乃という少女が郵便局での事件で傷を負つて数年。

糺余曲折の後、幼馴染である流千晃は、朝田と同じアパートで、同じ高校に通つて暮
らしている。

自身の将来、朝田への心配、そういった悩み事で溜まつた鬱憤を晴らすように、千晃
はトレントというアバターを使いGGOで稼ぎ続ける日々を送つていた。

そんなある日、トレントは死地にて青い髪の狙撃手と出会いう。

それは正に、運命的であつた。

目 次

急造コンビ	——										
事後処理	——										
気の遠くなるような昔の話	——										
トレントのおもちゃ箱	——										
無痛の進撃	——										
誇り、あるいは執念	——										
夕闇	——										
K A — B O O M ! (前)	——										
K A — B O O M ! (中)	——										
K A — B O O M ! (後)	——										
雲泥の差	——										
二筋の光明	——										
192	179	158	143	128	114	101	84	66	51	36	1

幕間：狩りの時間（前）
幕間：狩りの時間（後）

急造コンビ

やつた。

やらかした。

やつてしまつた。

似たような意味合いの言葉が無限に脳裏を巡り続ける。

G G O で最も栄えた街、 S B C グロッケン。その地下には、危険に満ちた巨大な古代迷宮がある。

終末戦争の終結した遙か未来が舞台のこのゲーム。そこから古代と言つても、現実世界とは大きくかけ離れた S F チックな技術のオンパレードだ。そんな未知のお宝を求めて、プレイヤー達は死亡による装備消失リスクを背負つて迷宮に足を踏み入れるのだ。

その奥地ともなれば、狼と鷲を掛け合わせたかのような巨大なクリーチャーが我が物顔でところ狭しと走り回り、主無き無人戦闘機が巣をつづかれた蜂のように騒ぎ立てる。

それぞれがアタツカ一人程度ならものの数秒で光の粒子に変えることの出来る恐

ろしい敵だ。

そんな場所に、俺は一人で放り出されていた。

「落とし穴あるなら事前に教えてほしいのである」

誰に言うでもなくつぶやく。知り合いの情報通から仕入れた話を頼りに、実入りのいい最新のソロでも行ける稼ぎ場所を歩いていたところ、シユートトラップ、所謂落とし穴に吸い込まれてしまつたのだ。

最高効率のM O B狩りというのは、余裕を削ぎ落とした先にある。下層までプレイヤーを送るトラップは考えようによつては前人未到の領域に送つてくれる便利な代物だが、さつきまでいた階層ですら安全マージンは無いに等しかつた。

最下層まで叩き落とされてしまつては、はつきり言つて生存は不可能に近いだろう。

「さて、こつからどうしたもんであるかね」

溜め息をつきながら、手持ちのアイテム群を確認する。俺のビルトの関係上、残弾も投げ物も潤沢だ。過剰とすら言える。

だが、その程度でソロクリアできるほどヌルい場所ではないのだ。信条を優先して單独行動をしたのが裏目に出た。

俺はギリギリ索敵範囲外に位置する状態の良いコンテナから膝立ちになつて双眼鏡を覗き、聴覚を研ぎ澄ませ、M O B共の行動パターンを分析していた。ドローンの風切り音。クリーチャーの規則的な足音。それらが近付いては遠ざかっていく。

そして十分ほど観察を続けて、なんとなく察する。

こいつら、バス前の前座だな。

一見移動ルートは不規則だが、決して広間に繋がる通路からは離れようとしない。

他のM O Bを引っ掛けないように誘導してから戦えば、たつた一戦でバスへの挑戦権が獲得出来るわけだ。

未踏地区。最深部。バスの情報だけで一儲け出来るのは間違いない。それにあわよくば……。

「倒せる、か？」

嗚呼、欲に目が眩む。それ以前に、ゲーマーの血が騒ぐ。

とにかく突つ込むと決めた以上、鰐モドキが二体にドローンが五、六機を一人でどうにかしなければならない。

一手の間違いは死を意味する。無駄死にだけは避けねばなるまいと思案を巡らせていく。

冷静に、冷徹に。どのリソースから切り捨てていくか。

しかしそれは、全く予期していなかつたノイズに搔き消されることとなつた。十時方向。何かが高い場所から落ち、ドローンが騒ぎ立て……銃声と、忙しない足音。聞こえた瞬間脳からアバターに下された指令は、

『走れ』

ただそれだけ。俺は愛用のLMGを抱えて、今も鳴り響く銃声の下に、ずつしりとした装備の重みが許す限りの速度で駆け出した。

残弾が心許なくなつてきたのだろう。戦闘音のうち、銃声が占める割合がどんどん少なくなつていく。

あと少し。十数メートル先の曲がり角。ここさえ曲がつてしまえれば……
いた！

遮蔽物に身を隠す蒼髪の少女と、近付いてくる三機のドローンを視認した瞬間、ろくな構えもせず一機に的を絞つてトリガーを引いた。

花火のように激しいマズルフラッシュと共に吐き出されるエネルギー弾は六割ほどが見当違いの方向に散つていったが、それでも赤い濁流はちっぽけな機械を磨り潰す。

そして、入れ代わるように視界に映る二本の弾道予測線。流れ弾が掠めたドローンのヘイトが、余すところなく自分に向けられた証拠だ。

狙い通り。これでもう一人の不運なスカベンジャーは、とりあえず死ぬことはないだろう。

今度はゆっくり狙いを定める。一機は撃たせる前に破壊できるだろうが、流石に二機同時に仕留める火力を愛銃は持ち合わせてはいなかつた。だが、多少の被弾は俺にとつて何の問題もない。

極限まで絞られた予測円は点となり、初弾が眼球のような深紅の熱源センサーへと吸い込まれる。

弱点を射抜いた褒美に与えられたコンマ数秒のスタンボーナスの間に、敵はすっかり穴だらけのスクラップへと姿を変えていた。

最後のドローンに視線をやると、本体下部に備えた立派なエネルギーライフルはもうチャージを済ませているようだつた。

間違いなく引き金を引く前に、俺に熱線が照射されるだろう。予測線から銃を逸らす。

熱線が放たれる、その瞬間。無機質なレーザー粒子の加速音ではなく、原始的で焼けつく熱を持つた火薬の爆発音が通路に響いた。

機関部に風穴を開けられたドローンは、地に落ちることすらなく爆発し、ドロップアイテムと、撃破を示すパーティクルだけを残して消えていく。

状況終了。目の前の危機は凌いだ。

「なかなかやるであるな。そつちの損耗はどんな具合であるか」「……残弾が、心許ない」

ゆっくりと声のした方向に振り返り、ところどころ溶解して黒ずんだ深緑色のコンテナを見やる。

先程は装備を気にする余裕もなかつたが、蒼髪の彼女は軽く眺めても素肌の占める割合が大きく、相当な軽装であることが窺えた。胸元もへそも隠さない着こなしは正直眼のやり場に困るが、隙間一つないフルフェイスのおかげで気まずい雰囲気になるのは避けられるだろう。

それはともかく。

「腰のそれ、『G18C』？」丁度今日はエネルギー弾しか使つてないから、9mmは余り放題であるな。ほい、2マグ。お代わりが欲しかつたら都度言つて欲しいのである。ライフルの方は……そいつ、使うの338ラプアであろう？　今日は大口径弾はないのである、許してほしいのであるよ」

彼女はその華奢な体には似合わない程の銃身長を誇る『M700』スナイパーライフ

ル——狙撃銃の中でも比較的入手しやすく、性能も優秀と聞いたことがある——を背負っていた。腰のマシンピストルと合わせて考えると、GGOでは希少である狙撃手で間違いないだろう。

「ちよ、ちよつと待つて！」

投げ渡される二本のマガジンを慌てて受け取りつつも、少女は警戒心を剥き出しにしながらサンドカラーのマフラーに口元を隠し、水晶で形作られた刃のような曇りなく、鋭く、冷たい視線を送った。

「……何が目的？」

「何つてそりゃあ、ボス攻略」

そして、静寂。

彼女は受け取った弾丸を意図的に強く銃に叩き込んだが、こちらに向けていないあたり、一応話は聞いてくれるつもりでいるらしい。

「ここはM〇Bの巡回ルートだから、話は安全地帯であるのが得策である。先導するであるよ」

のつし、のつし。ゆつくりと、しかし淀み無く歩みを進める。地響きのような俺の足音に、軽い足音が続く。

先導役のいる安全な道だというのに彼女のサブアームが抜かれているのは、気付かな

いフリをした。

「さて、到着である」

ボス前、モブの感知範囲外、頼れる遮蔽の穴無しコンテナ。ここが現状一番安全なのだ。頭上にある安全な酒場が懐かしくなってきた。

「ここからは音量抑えめで頼むであるよ」

「……」

口元はマフラーに埋めたまま、しかし微かに頷いたのを確認してから、俺は今何をしようとしているのかの説明を始めた。

救助の決断こそ反射であつたが、物資の受け渡しに関しては熟慮の末の選択だつた。

ここは未踏破遺跡の最奥部。マトモに攻略するならば少なくとも四人、万全を期するなら八人は必要だろう。

それで一人でも生存する確率が、大きく見積もつて五分。ここはそういう場所だ。一人で攻略など自殺でしかない。

だが、先ほどの数秒の共闘で彼女の狙撃手としての腕前が申し分ないことは分かつた。

「一人なら自殺でも、二人なら蛮勇ぐらいにはなるだろう、ということである！ わつはつは！」

「ちよつ！ 声が大きい！」

「ここで初めて少女が、慌ただしく周囲の状況を確認し始めた。だが俺は微動だにしない。動く理由がない。

「感知されてないであるよ」

「……なんで」

「あいつら、視覚オンリーで索敵してるのである。色々試したから確かであるよ」

そこらの金属片を投げた。発煙筒を投げた。指笛を吹いた。

他にも様々な検証をしてデータとして手元に記録をしてある。

「ドローンもワニモドキも、動体と熱源には反応したが、スタングレネードの爆音と閃光には何の反応も示さなかつた。結果として、奴らは音と光には極度に鈍感なことは調査済みである」

「……じゃあなんでさつきはあんなことを？」

「いや緊張をほぐそうと思つて」

瞬間。彼女の視線が水晶から水に変わつた。

「……ふざけてる」

「なははー、不快にさせたなら謝るであるよ。それで……腕の震えは？」

「……ツ！」

彼女が極度の緊張状態に陥っているのは、一目瞭然であつた。適度な緊張は時として実力以上の結果を引き寄せるが、手が震えるような有り様では、先程のような至近距離ならまだしも、中距離以上の精密狙撃など出来るはずもない。

「……お陰様で、止まつたわ」

「よし。それで……俺の案に乗つて臨時P.Tを組んでは貰えないか？ 質問はいくつでも受け付ける。幸いにして時間だけは腐るほどあるからな」

切り替える。努めて真面目な口調で、俺は彼女に話しかけた。取引に重要なのは信用地。こいつになら自分の資産を賭けてもいいと思わせられるほどの、確固たる信用。

さつきまでの軽口は、彼女の心を開く第一手に過ぎない。交渉の本番はここからだ。いきなり口調が変わり、その落差に驚いていた彼女だが、すぐに落ち着きを取り戻し口を開いた。

「まず一つ。勝算はあるの？」

「二人ならば、可能性を探るくらいはしてもいいだろうと考えている。何せ、リターンが巨大だからな。最悪撤退も視野に入れて行動すれば……まあ運が良ければお互いに死にはせずに済むかも知れん」

「……それは、負けるつもりで戦うつてこと？」

「冗談。戦うからには勝つ。まあ心構えの話だが」

「……」一つ目。どうして私を誘ったの？」

「腕のいい狙撃手だからだ」

脳裏に過る、致命的な違和感。先程から、彼女の表情は全く変わっていない。

矢継ぎ早に紡がねばならない次の言葉で、全てが決まる。許された数瞬の猶予で迷い、迷い、迷った末に、全力で言葉を紡ぎ出す。

「スナイパーというクラスはピーキーだ。それなり以上に優秀な S筋力 T力 R素早さ と A体力 G力 Iさ、それに命中系スキルは片つ端から取らなきやならない。だから、引き換えに V筋力 I素早さ T体力 を全く上げられない。紙装甲の代名詞」

「それで？」

「シユートトラップはダンジョン内にしか存在しない。ということは、君は一人で、それなりに危険なダンジョンを歩いていたことになる。……好きなんだろ？ 死線を潜るのが」

ここで初めて、マフラーに埋まっていた顔が興味ありげに話の続きを促した。食い付いたようだ。

「俺も似たようなものだ。目の前の苦難から逃げるような真似はしたくない。……これが全てである。もう何もないのであるよー」

もう言えることは本当にはない。後は彼女の機嫌次第なのだが。

品定めをするように俺を眺めていた彼女の返事が返ってくるまでには、さした時間はかかるなかつた。

「分かつたわ、あなたの案に乗る」

「ひやつほーい！ 百人力である！」

「……私、貴方のことが分からなゐわ……」

彼女は右手では淀み無くメニユーコンソールを動かしているが、左手は大仰にこめかみを抑えていた。案外彼女も、本当はコミュ二ケーションが嫌いではないのかも知れない。

程なくして飛んできたP.T.勧誘を即座に承諾する。今この瞬間、たつた二人の初見最難関ボス討伐隊が結成された。

「それじやあ、よろしくであるよ、シノン、殿？」

「シノンで合つてるわよ。そつちは……トーレント？ つて読むのかしら？」

「そう、トーレントである。さて、作戦立案と装備の点検だけ済ませたら早速行くである」

数多ある荷物入れの中から、メモ帳代わりの情報端末とタッチペンを取り出す。戦地における会議では、意外とバカにならないのだ。

如何にして目の前のM.O.B群を最低限の損耗で処理するか。未知のボスに対しても

のような保険をかけるのか。簡単な図を書きながら討論する。

決まった後は念入りに、念入りに、装備の点検。万全以外は許されない。だからこそお互い無言で、それこそ戦闘中もかくやという集中力で行う。

そして、それら全てが済んだ時。

「じゃ、行くである」

「了解」

戦士二人の、決死の戦が始まつた。

トーレントとシノンが広場に躍り出たのは、完全に同時だつた。敵が徘徊状態から戦闘状態に切り替わる数瞬。誤差とすら言える刹那の間に、シノンの芸術的なまでのクイックショットで、ミュータントのグロテスクな頭部からポリゴンの鮮やかな紅が迸つた。

「ターゲットクリア」「目標成功」

「了解。次は我輩であるな」

次弾を薬室に装填するシノンを庇うように、トーレントが立ちはだかる。彼が構えたのは、『ヘルファイアG2』サブマシンガン。大型のハンドガンほどのサイズでありながら、千発もの装弾数とそれを十五秒で吐き出す化け物染みた連射力を誇る、MOB狩りのサブウェポンとしてはそれなりに人気の代物だ。

トーレントに向けられる大量の弾道予測線。彼はそれを完全に無視し、おぞましい牙

で自らを食い千切らんとする大鰐の口内に向けてトリガーワークを三秒ほど引く。

毒々しいまでの赤いマズルフラッシュに隠れて、あつという間に骸へと変わった。

敵の排除を確認したトーレントは、自らに対して射撃を続いている防衛ドローンに対して、害虫に殺虫剤を吹き掛けるかのような気軽さでトリガーを順に引いていく。

次々と穴だらけになつて落ちていく機械達。それらがトーレントに対して行つた必死の抵抗は、防具の表面を少々焦がしただけであつた。

「打ち合わせ通りだけど……本当に使い捨てていいの、その銃」

「このじやじや馬、単発火力に欠けるであるからして、ボスの装甲を抜くなんて期待は出来んのである」

「なるほどね……」

「だから、シノン殿のM700がマジで生命線である。こつちも手は尽くすであるが、正直今日の主役はシノン殿であるよ」

「そんなにおだてなくとも、仕事はこなすわ」「頼むであるよホントに……よっこいしょつと」

俺はストレージの底から愛銃を取り出し、バッテリーパックを叩き込んで乱暴に叩き起こした。次第に大きく鮮明になる駆動音と共に、捻れた銃身がゆっくりと回転を始める。

「よーしょし、バジリスクの機嫌もいいである」

「バジリスク？」

聞き慣れない名前。当然だ。こいつは光学銃で、しかも相当なレアモノなのだから。「そう、『PLCバジリスク』。銃身自体を捩ることでライフリングと同じ効果を云々。まあ、威力と精度に長けた光学LMGであるな」

その実銃では絶対にあり得ない幾何学的なフォルムに興味が抑えきれないのか、シンソンはちらちらとバジリスクを横目で観察していた。

「申し訳ないけどこれ、レアドロの上に相棒だからあげられないものである」

「いらないわ、そもそも扱えないし。珍しい形だから、眺めていただけ」

盗み見がバレたのが恥ずかしかったのか、早口で捲し立てられた。そんなに気にすることもなかろうに。

ともかく、と。シンソンは弛緩しかけた雰囲気を今一度締め直した。

「作戦は覚えてるわね？」

「我輩が防御スキル全開にしてLMG設置。耐えてる間にシンソン殿が狙撃ポイントを探し、決まつたらそつちに誘導して後は流れで」

「O.K.」

結局会議までして決められたのは、ここまでだつた。本来ならばこういったダンジョン

ンボスの攻略は情報収集専門のPTを組んで、ファイールドの間取り、攻撃毎の安全地帯、危険な行動や増援の有無等々を集め、そこからスコードロンの面子で会議が行われるのだ。

未知の相手、未知のファイールド。立てられたのは、ダンジョンの所々にある毒ガスを噴き出すパイプから、ボスは毒系統攻撃を使うのでは、程度の予測だけ。

だが、俺もシノンも心構えだけはしつかりと定まった。
仕掛けるのは俺達。狩られるのはボスの方。

出会つたばかりのシノンと組めるのは、互いにこの認識を固く、固く持つてゐるからだ。ここまで戦意を持つて戦いに臨めるプレイヤーは果たして、全体の何割だろうか。

彼女との出会いは、もしかしたらとんでもない大当たりかも知れない。

左手に銃身を出す穴の空いた黒鉄の楕円形の盾を、背にバジリスクを装備した俺は、軽く屈伸をしながら尋ねた。

「シノン殿は？　いけるであるか？」

「いつでも全速力で走れるわ」

「おお頼もしい。それじゃあ我輩も……走つてくるである」

「……グッドラック」

その言葉に軽く手を上げて答えつつ、躊躇無くボスのねぐらに踏み込んだ。

コロセウムにしか見えないこの場所は、元は実験動物の性能試験場だったのだろうか。全体の作りは綺麗な円形を描いているが、見事に荒れ果てたおかげで、瓦礫などの遮蔽物には事欠かない。

監視席とこちら側を隔てるガラスは割れ、その奥には大小様々なパイプが張り巡らされていた。

そして、円形の中央。そこに鎮座していたのは、足がまるで馬のように発達している灰色の巨大な鰐。いや、恐竜と言つてもいいかも知れない。

四対ある橙色の瞳は、全てがこちらを見据えて、いやに煌めいていた。

「よっしゃ来い！」

『挑発』でヘイトを取つて、『開戦の硝煙狼煙』で攻撃力と防御力、移動速度を底上げする。このスキルは戦闘開始直後の十秒間しか発動出来ないが、その分ステータスの倍率と持続時間が優秀だ。これから長期戦になることを見越して開幕に使う強化スキルを絞つた結果、選ばれたのがこの二種類。

聴覚をつんざくようなボスの叫びと共に、盾を両手で、下半身を隠すように構える。もし片足でも傷を負つて走れなくなつたら、それは、死と変わりない。

縦に四本ずつ、合計八列のビームが縦横無尽に暴れた。

そのうち俺に向かつたものが盾に弾かれ、あるいは体を貫いていく。

仮想の痛みは、心臓と脇腹が撃たれることを伝えていた。

残りHP六割。急所に絞つて仕込んだ特別製の装甲板が功を奏した。

熱線を撃つた直後だというのに大した隙も見せず、恐るべき速度で突進してきたボスを転がつて避ける。大層な足の割にはブレーキが下手らしく、ボスエリア入り口の仕切りに頭をぶつけてスタンしていた。

「じゃあ我輩も、バジリスクの設置をせねばなあ……」

交戦前にボスフィールド全体をざつと眺めたが、残念ながら銃座を展開して安全に射撃できるような場所はなかつた。

だが、いくらM700の威力が優れていようとバジリスク無しではおそらく討伐は不可能だろう。しかも、シノンはVITを捨てている。もし彼女があの爪で袈裟斬りされたら、その瞬間彼女のHPが全損するのは確実だ。

やるしかない。壁に頭をぶつけてスタンしているボスの横を駆け抜けた俺は腹をくくつて、バジリスクの銃座をコロセウムの最深部、本来ならばボスがプレイヤーを待ち構える位置に設置した。

ボスの姿を見せるためだろう。入り口から再奥部まで、射線はしつかり通っている。

ストレージからバジリスク用のエネルギー・パックをありつたけ床に落とし。

弾丸の形をした捩じくれた火花の群れが、ボスの巨体を食い破つた。
撃つ。撃つ。撃つ撃つ撃つ撃つ撃ちまくる！

弾切れの瞬間を見計らって、背後から正確無比な狙撃支援が飛んでくる。彼女が陣取つたのはおそらく、この研究所が正常に稼働していた頃には研究者達がふんぞり返つていたであろう監視席だ。

結果として、ボスは身動きが取れないまま撃たれ続ける。

行動させたら死ぬのなら、動けないようにしてしまえばよいのだ。

とはいえ、ボスのHPゲージを見る限りダメージこそしつかり通つてはいるが、時折硬直を無視して繰り出される毒ガスブレスと熱線によつて俺のHPは既に四割を下回ろうとしていた。

『ねえ、本当に大丈夫なんでしょうね!?』

『やるしかないであろう！』

シノンとしても必死だろう。なにせ、俺が死んだら次は彼女の番である。最悪撤退もくなどとほざいていたが、実際そんな余裕はない。分かりきつていたことだ。

だから俺は、銃身が修復不可能寸前になるまで撃ち続けるつもりでいた。

このままダウンを取り続ければ、勝てる！

——奴が起き上がつたのは、そういった微かな希望を打ち碎くためだつたのだろう。

ただのHP減少がトリガーとなつて行動だとしても、俺にはそうとしか見えなかつた。

明らかに力を溜めているその動作は、突撃の前兆。真正面から食らえば、如何に耐久力自慢の俺と言えどHPバーを丸々一本持つていかれる。

『トレント、回避ツ！』

無線が飛んでくる。ああ、そうだ。それが最適解だ。だというのに。

俺はストレージを開き、バジリスクをその中にしまい……

「ああっ……ぶねえ！」

「あなた何考えてるの?!」

紙一重で左に飛んだ。勢いのまま転がつて起き上がる最中、嫌がらせに『ブレイサー』光学ショットガンを空いた右手で数発撃ち込むが、怯む様子はまるでない。

ボスはシノンのいる監視席の下段に頭を突っ込んでいる。本来ならばここからの立て直しは不可能に近いが……俺には一つだけ案があつた。

『シノン殿、三秒でいいからヘイト取ってくれんあるか』

『自分勝手な行動の後は自分勝手な指示？』

彼女の語氣は当然、非常に強かつた。たかが銃一本、見捨てればもつと安全に回避できただろう、と。それに対しても反論したい気持ちもあつたが、今は飲み込む。話して

いる時間すら惜しい。

『やらなきやこのまま二人とも死ぬ』

そう言つた途端に罵声は止み、代わりに呻き声が通信機のノイズ混じりに聞こえてくる。

『……取り分、七・三』

『オーライ！ 合図は任せたである！』

了承の言葉を聞いた途端に、俺はアーマーのポケットから発煙筒と焼夷グレネードを取り出した。

毒ガスで削れ続け、遂にレッドゾーンに達したHPバーを、横目で捉えつつ。ボスの頭が瓦礫から抜かれ、四本の眼光の予測線が俺を捉える。

『3』

光が強まる。お守り代わりに懷からメディキットを取り出し、首に刺した。遅々とした速度で、しかし確実にHPバーが伸びていく。

『2』

遂に放たれた閃光を、散開する前に盾で受ける！

『1』

最後のカウント。それと同時に一発の弾丸が空を裂き、ボスの体力をごつそりと削

り、この鉄火場でこれでもかと存在を主張した。ボスは既に俺の方を向いていない。

装甲を全くといつていいほど装備していないシノンが、何秒も持つはずがない。俺は出来る限りの速さで入り口までたどり着き、発煙筒に火をつけ、ヘイト操作アビリティ『挑発』を使つた。

「こつちを向くであるよ、デカブツがあ！」

スキルの効果で即座にターゲットを変えたボスは、突進の構えを取る。無論、直撃を耐えるつもりなど毛頭ない。

この遺跡の主はきっと、今から起ることを認識できないだろう。

散々おちよくつてくれた獲物を一撃で肉塊に変えるべく、突進し……その視界は、文字通り、灼かれた。

そこら中を歩き回っていたボスの下位種は動くものと熱源に強く反応を示した。つまり、サーモグラフィーと同じ目にをこいつらは持つてているのだ。熱そのものである火炎をばらまく焼夷グレネードを顔面に投擲されれば、視界はホワイトアウトするだろう、という推測を立てた。

無論ボス個体が同じ性質を持っているとは限らない。これは分の悪い賭けだった。

悶え苦しみ暴れるボスに踏まれないように気を付けながら横を通り抜け、シノンのいる監視席によじ登る。

ビームで無惨に破壊され、未だ毒ガスのエフェクトが残る瓦礫群。その物陰に、シノンはいた。

脇腹と右頬を撃たれたようだ。毒気の影響で、たつた今彼女のHPバーは赤色へと変わった。

「すまない、無理をさせたであるな」

「あなたこそ……よくあそこから逃げ延びたわね」

「二人でボス討伐するんだから、相応の無茶は必要であるよ」

メディキットを彼女の首筋に注射し、同時にストレージから虎の子の救急パックを取り出して、シノンに手渡した。これは三分でHPを三割回復させる通常のメディキットとは違い、五分で瀕死であろうと全快させる強力な代物だ。無論その分値段も跳ね上がり、使用中は移動に著しい制限がかかるデメリットもある。これを渡すということは、つまり。

「…………ここまでやらせておいて、私に帰れって？」

そう取られてもなんらおかしくはなかつた。

しかし、それを即座に否定する。

「いや、最後まで戦つてもらうである。でないと我輩、確実に無駄死にするであるからして」

今二人で隠れている瓦礫から見える通気孔。その入り口を指差し、

「ここから」

移動ルートをなぞつていく。

「こう通つて」

戦場全体を一望出来る、金網の位置を終点とした。

「あそこまで。匍匐で移動して、今渡した救急パックで毒に耐えながら撃ちまくつて欲しいのである。ここで狙撃して貰つてたら、回復アイテムが尽きるであるからな。とうか、もう尽きているのでは？」

言われて、視線を微妙に背けた。図星なのだろう。

そして彼女は、当然浮かんでくる疑問を投げ掛けてきた。

「あなたは？ 私が移動している短くない時間、どうするつもり？」

「ここで撃ちまくる。依然変わりなく。我々の勝利は、ダウンを取り続ける以外ないで
ある」

ややあつて、シノンは頷いた。彼女の瞳は冷たい印象しかなかつたが、今の彼女のそ
れはまるで、青く燃える業火のようであつた。

「了解。全弾ぶつぱなしてやるわ」

「こつちも銃身がイカれるまで撃つであるよ」

焼夷グレネードの効果はとっくに切れている。もう話す時間は残されていなかつた。
故に。

「グツドラツク」

手早く拳を打ち合わせて、それぞれの戦いに赴くのだ。

シノンの体が通気孔に潜り込んだのを見届けてから、銃座を展開する。ボスが好き放題破壊してくれたおかげで今度は遮蔽物には困らなかつたが、念のため足元には盾を差し込んである。

彼女は今全速力で狙撃地点に向かつてゐるが、それでも何分かはかかるだろう。

「上等である。そうであろう、バジリスク」

既に鈍く赤熱した銃身。その光はまるで、煮えたぎる怒りを思わせる……というのは、少々氣取り過ぎだらうか。

だが、そもそもバジリスクとは、古来より視線だけで生物を見ただけで死をもたらすとして恐れられた怪物の名らしい。

「お前も大層な名前をしているのなら……その名に恥じない戦いをしてみせろ！」

滾る思いを乗せるかのように、トリガーを力強く引いた。

即座に吐き出される灼光は、紅から金へ、金から白金へ、耐久値^{デュラビリティ}が減る度に姿を変えていく。

色が変わるために、予測円も広がっていく。ボスの巨体を狙つてなお外れが目立つてきた。

薄くなる弾幕と入れ替わるように、ボスの攻撃は激しさを増す。

八本のビーム。爪の袈裟斬り。突撃。毒ガスブレス。こいつの攻撃はこれだけだ。

しかし、エリア全体を侵す吐息はともかくとして、残りの攻撃は全てが並のプレイ

ヤーなら直撃せずとも瀕死に追い込まれる。先程の、シノンのように。

「最後の最後まで頑張ろう、つてのは確かにいい言葉であるな。強固な意志に満ちているのである」

愛銃の、赤を通り越して白く輝いている銃身は、遂にうんともすんとも言わなくなつた。

先の言葉に則るならば、弾丸を撃ち尽くした時点でおしまいということになる。

しかし、俺はそれが少しばかり気に入らなかつた。

足元を守つていた盾を引っこ抜く。三割ほど削れた耐久値を見る限り、それなりに仕事はこなしていたようだ。

もつとも、酷使するのはこれからなのだが。

半壊も間近の盾だけを頼りにコロセウムに飛び降り、その盾を足元に突き刺し、両手でしつかりとグリップを握りしめた。不動の構えだ。

残念ながら、ボスの装甲を抜いて有効打を与えるような貫徹力の高い銃は、今日はバジリスクしか持ち込んでいなかった。

ボスがじろりと俺を睨み、短くもおぞましい黒々とした爪を振り上げる。負けじと睨み返した。

「我輩としては、最後の銃弾を吐き出しても出来ることはあると思うのであるな……ッ！」

地面に突き立てた分厚い盾が、ボスの爪牙で歪む。穴の空いた部分からは、光の塵が導かれるように天に昇っていく。

そして遂に、四対の眼から放たれた熱線に耐え切れず、完全に破壊された。

残されたのは己の身だけ。それでも、それでも。

勝ち誇ったように雄叫びを上げるそいつの上顎と下顎を、閉じないように全身全霊で押さえつける。これで弱点はがら空きだ。

「タンクの根性を舐めたら痛い目見るであるよ……！」

俺に出来るのはここまで。後は狙撃手に託すのみ。

腕に仕込んだ装甲板が軋む。毒の呼気で雀の涙ほどしか残されていないHPがじわじわと削れていく。俺の装備の中で一番値の張るヘルメットが破壊され、その勢いは更に増した。

こんなものは自殺だ。それ以外の何物でもない。しかし、それでも。シノンはやる。やるべき時に、やるべき仕事をやる。あれはそういう人種だ。彼女を信じる。己の経験を信じる。俺は、その二本の足でなんとか立っていた。しかし……いくらなんでも限界が近い！ 遂にＨＰはレッドゾーンへと達した。「ああもう！ この金網、邪魔くさいわね！」

狙撃銃にそぐわない連射音。次いで、ガコン、と、重たげな何かが近くに落ちた。「待たせて悪いけど、ＬＡボーナスは貰つていくわ」

ドス黒い口の中を狙つた、バジリスクと比べても凄まじい火力を誇る弾丸。火薬の炸裂音は咆哮を塗り潰し。

次いで、ポリゴンの破碎音がタ立のように降り注いだ。

SＴR値にものを言わせた命懸けの抵抗から解放された俺は、恥ずかしいことに、ボスの撃破演出を見ることなく倒れこんでしまった。

「ぬお～……」

みつともない呻き声まで出して。

「ちよつと！ トーレント、あなた大丈夫なの!?」

「お高い装備は壊れたけど、そのおかげでギリギリ生きているであるよ」

バーチャル世界のいいところは、どんなに激しい戦闘の後でも、肉体的疲労感には襲

われないことだ。淀みない動作で起き上がり、さつきから気になつていていた落下音の正体を確認した。

「ああ、金網の目が銃身より細かかったから、G18Cでぶつ壊して蹴破つたのであるな！いやあ、流石の機転！さつき弾を渡しておいたのは正解だつたである！」

拍手しながらシノンの方に振り替える。そこには、予想していたような自慢気な顔ではなく。

「あ、あ……」

「あ？」

「あなた、女の子だったの……？」

ただただポカーンと口を開ける、クールな印象とは真逆の姿。それはかなり滑稽だつたが、笑つたら本気で怒られそうな気がするので、そこには触れないでおくことにした。「ああ、ヘルメットが壊れたから顔が見えたのであるな。M9000番系アバター。そいつらはこういう中性的なデザインになつてるらしいのである」

分かりやすいように、ストレージを操作し装備を変更。姿を変えて見せた。

これまでの人間戦車のような装甲服は消え去り、代わりに、ボディラインのくつきりしたアーマーに外套を纏つた軽装になつた。

見た目が分かりやすいように外套も脱ぐ。そこには、おそらくシノンが想像していた

ような力強い軍人めいたアバターはない。

白銀の髪を短く切り揃え、紫紺の眼はあくまでも自然体に、しかし自らを誇示するかのように美しい光を放っている。古来紫は高貴な色として尊ばれたようだが、このアバターはそれを体現したと言つても許されるだろう。

「ま、鏡を見るのも楽しいけど、面倒事も多くて」

「あ、それはあるわね」

しみじみと頷くシノン。彼女のアバターも相当の上物だ。

「お互い大変であるな！」

「本当にね……って、それどころじゃないわよ！」

「おつと、そうであつたな」

美形アバターあるある話で盛り上がりかけたが本題は、現時点において最新で、最深のボスをたつた一人で撃破した莫大な報酬だ。

「念のため言つておくけど！ 私が七だからね！」

「分かつてあるよ、ささ、箱を開けるである」

ゲーマーとしての心が猛り狂い、暴れていますのが分かる。

シノンと俺の指が宝箱の開封ボタンを押したのは、ほぼ同時だつた。

その途端、濁流のように溢れ出るリア演出の山と恐ろしく長いドロップ報酬の欄が頭

上高くまで伸びていった。

「レア素材がこんなにも!? これはしばらく装備代には困らんであるな」

「私もこれは流石に予想外だわ……」

一人揃つて眼光鋭く、ドロップアイテムリストをチェックしていく。

一際輝くレア銃を見つけるのに、そう時間はかからなかつた。

「何これ……うるつい……」

「《ウルティマラティオ・ヘカートII》」

この銃の名を知らないのであろう。たどたどしく名前を読み上げるシノンに、被せる
ようにその名を呼んだ。

「アンチマテリアルライフルだ。今シノンが背負つている物よりも、ずっと強力で、比べ
物にならないほどレアな」

「ちょっと、M700だつてそそここの値が……」

「日本円にして二十万の値が付いたんだぞ」

メインウェポンをコケにされて不機嫌になりかけていたシノンだつたが、俺が値段を
宣言した途端に、息を呑んだ。

「それはシノンが持つていくといい」

「え!? いやありがたいけどこれは……七対三どころじゃないんでしよう!? もつと公

正に……」

二十万という具体的な金額が出てからシノンはずつとしどろもどろになつてゐる。金銭に困つているのだろうか。そこまで考えて、金銭に困るような人間は月額三千円もするGGOには手を出さないだろうと思い直す。

「シノン殿へ

「な、なに？」

「さつきのボス戦、我輩がバジリスクを命懸けで回収したであるな」

「え、ええ。あの時は一体どうしたのかと思つたわよ、本当に」

「きっと、その銃を使い込んだら、我輩の気持ちも分かつて貰えると思うのである」

口調は軽妙に。されど中身は誠実に。

シノンというプレイヤーは、土壇場の度胸といい、腕前といい、文字通り並みではない。そんな彼女が、一心同体の武器を持つていないので、俺にはあまりにも勿体ないと、そう思えてしまつたのだ。

「ど、言う訳で、ヘカートはシノン殿に差し上げるのである。その代わり他は譲つて欲しいな、と……」

「あなた、さてはそれが目当てだつたんじゃ……」
ジトリ、とまるで蛇のような眼光に曝される。まるで戦闘前の交渉の時のような緊張

感だ。

「いやいやそれは誤解であるよアンチマテリアルライフルなんて鰐に十本もない代物に勝るドロップアイテムなんて無かつたし何より我輩の方が装備の損壊多いしマジで頼むであるよこんな苦労して赤字は嫌である」

「分かつて、分かつてるわよ」

シノンがくすりと笑いながらそう言つた時、既にあの底冷えする気配はなかつた。ようするに、からかわれたのだ。

「あー、びっくりした。心臓に悪いであるよ、ほんと」

「ごめんなさい、でもまあ……今日はお互いやつたと思わない？」

「そこは全面的に同意するである。ナイスガッツ、シノン殿」

「ん」

パンと、銃声とは異なる破裂音が山びこのように残響を残しつつ消えていく。

勝利を祝うハイタツチ。幾百の言葉を交わすよりも、こうした方が伝わる情が、人にはあるのだ。

そしてドロップアイテムの分配は終わり、後はボスを撃破した際に発生したワープゲートで帰るだけなのだが。

「じゃあ我輩はこれで……」

「ねえ」

帰還ボタンを押す直前に呼び止められる。

「ん？ 今度はなんであるか？」

「も、もしあなたのフレンド人数が上限じゃないなら、登録、どうかな、と思つて」

修羅場を共に潜つた仲だ。彼女がいわゆる姫プレイヤーではないのは、とつくるのどうに分かりきつている。

それでも、軽く俯きながら爪先で地面をつつき、慣れてない様子でフレンド登録を持ちかけるのは……有り体に言つて、凄まじい破壊力だ。

動搖をなんとか表に出すことなく、口を開く。

「その心は？」

「今日みたいな戦いになりそうだつたら、また呼んで。その時は、今度はヘカートで敵をぶち抜いてあげるんだから」

先程とは対照的な、獰猛な笑みと共に届くフレンド申請通知。

俺はそれに、快く応じた。

今度こそパーティを解散し、先に離脱した彼女の名を反芻する。

「シノン。しのん。詩乃。……いやいやまさかあいつに限つて」

見た目も似てはいる。しかしこのゲームのアバターは現実とは性別以外は何も一致

しないのが当たり前だし、何より彼女にとつて銃とは存在そのものがトラウマだ。こんな世界にいるはずがない。

頭を振つて妄想を振り払い、後を追うようにダンジョンから急いで離脱し、グロツケンに戻つた瞬間ログアウトした。

そのまま爆睡した俺を責めることの出来る者などいまい。絶対に。

事後処理

「お前から金払つて聞いたダンジョンで、お前から聞いてないトラップに殺されかけたのである。慰謝料寄越すであるよ、ゼク」

シノンと共に死線から生還して数日後。俺はなんとか手持ちの金で最低限の装備の修理を施し、全損したヘルメットの代わりに安物を被り、行きつけのバーで長らく唯一のフレンドであつた男とサシで向かい合つていた。

「いやまあ……確かに売ったよ、情報。でもさ、それ自業自得だろ？ ギリギリのライン攻めた挙げ句に罠踏んだんだから。それで金出せはあり得ないっしょ、トール」

ゼクはナンセンスと言わんばかりに頭を振つた。こいつのブルーシルバーの髪は揺れる度にギラギラと輝くので、個人的にかなり嫌いだ。

「まあ半分冗談である」

「半分も本気なのかよ」

「わはは」

乾いた笑いが、ゼクの眉間に皺を寄せた。

「その愚痴の為だけに呼んだのか？ だつたらこっちが金取るぞ」

「いやまあ本題は別なのである」

事前に用意しておいた画像ファイルを二枚オブジェクト化。それを表は見せず、ゼクの目の前でヒラヒラと背を見せつけるように揺らした。

「これは？」

「グロッケン地下新層のボスのドロップと、ボスフロアのマップ」
告げた途端に、ゼクは俺のフルフェイスのバイザ―越しでも分かるほどに目の色を変えた。脳波でアバターの表情が変わってしまうVRゲームの世界では、ポーカーフェイスは超高等技術だ。

「もしかしてお前、逃げたんじゃなくて、踏破したのか？　たつた一人で！？」

「もしかして、この数日誰も突破していないのであるか？」

「八人で凸つた先行攻略専門のスコードロンが全滅して、そつからは皆及び腰よ」
スコードロンとは簡単に言えば、プレイの目的や時間帯が同じ人間同士が組む長期的なチームのようなものだ。他のゲームで言うところのギルドに近い。

詳しく述べれば、そのスコードロンは日本鯨でも有数の強者揃いで有名な連中だつた。
なるほど、俺があそこで相棒を見つけられたのは本当にラツキーだつたらしい。

「その辺ひつくるめて、ゼクはいくらの値をつけるので？」

「……お前のバカ高えヘルメット、壊れたな？」

「うむ」

「五割持つ」

「今日はご縁が無かつたということで……」

「待て待て待て！」

席を立つた俺を、ゼクが必死に引き止める。こんなに本気で焦っているこいつを鉄火場以外で見るのは初めてだ。

「俺だつて限界まで出すつもりだよ、出しやいいんだろ……ただ、お前のヘルメット高過ぎるんだよ」

「まあヘルメットだけは宇宙戦艦の装甲板をふんだんに使つて作つたであるからな。局所に仕込んでるだけの他の部位より値が張るのは当然である。七割」

「ななあ!?」

ゼクの百面相が、面白いくらいに赤くなつたり青くなつたりしている。流石に吹っ掛け過ぎたようだ。

「無理なら六でもいいであるよ、お友達価格である」

「ふざけやがつて……五割五分。これが嫌なら俺以外の奴に売れ」

「まいどありく」

二枚の写真と、ヘルメット新調の見積書のコピーをゼクの手元に滑らせる。

見積もり額を見てあからさまにうへえ、という顔をしていたゼクだが、ドロップアイテムのスクショコピーを見た瞬間、空気が凍てついたかのような剣呑さを纏つた。

「お前……対物ライフル拾つたのかよ」

「うんにや、その時のP.T.メンが持つてつたである」

「マジかよ、お前運ねえなあ……」

わざとらしい大きなため息。それを尻目に、琥珀色の液体で満ちたグラスを傾けた。煙臭い甘みが喉を焼く。当然だが、VR空間での飲酒では、思い込みを除いて酩酊しない。

別にダイス目勝負で負けて渋々差し出した訳ではなく、自分から押し付けたので何の悔いもないのだが、それを言うとこの男はまたピーチクパーキーと喚くだろう。

面倒くさいことこの上ないので、黙っているのが正解だ。

「かーっ、惜しいなあ……お前が持つてつたならよお、試射データをうちのサイトで載つけてもつと稼げたつづーのによお」

「ま、そうそう出回るもんでもないし、諦めるである。というかお前も自力で出せばいいのであるよ」

「それな」

ゼクは攻略情報をWEBで公開し広告収入を得ているタイプのプレイヤーだが、同時

に、最前線に身を投じるトップ勢の一人だ。

AGI寄りのバランス型であるこいつがいれば、昨日の戦闘もかなり楽になつたに違いない。

「しつかしあれだな……これからはAGI特化型は厳しいかも知れねえな」

「ほう」

グラスを置き、身を乗り出す。真剣に聞く構えだ。

「いやお前が分かつてねえのかよ！ いいか筋、このドロップアイテム見て気付くことがねえか！」

「筋は流石に心外である」

突き返された一枚の写真に記された、先日嫌というほど眺めたアイテム名を一つ一つ吟味していく。

GGOの素材アイテムは型番だけが表示されていることも珍しくなく、レアリティ以外を区別するのは骨が折れる。残念ながら俺には、彼の辿り着いた答えが分からなかつた。

だが、AGI型に不都合である、という発言を前提に考えれば、ある程度推測は出来る。

「ゼク、この素材達、何の材料なのであるか？」

俺の発言に、彼は機嫌良くニヤリと笑つた。

「全部重量級のアサルトライフル、ショットガン、極めつけにはLMGだよ。お前が大好きな装甲服もある」

なるほど、どいつもこいつもSTR要求値の高い装備ばかりだ。彼はこの先、どんどん要求STRの高い装備が追加されると読んだのだろう。

AGI特化型の一強と化している現状のは正と考えれば、何らおかしくはなかつた。しかし真に驚くべきは、最新素材の派生先を諳じられる情報把握能力と、そこから時流を読む予測力。それこそが目の前の悪友の強みなのだ。

「という訳で、俺もこれからはSTRとVITに振つていくことにするわ。今度そういうビルドの動き方教えてくれよ」

後腐れがない辺り、ゼクも自分の眼力には自信があるのだろう。だがしかし、一応友人である身としては、彼に忠告しなければならないことがあつた。

「いやそれは構わんのであるが……お前、散々自分のサイトで『正AGI特化最強正』とかやつた後始末はどうつけるつもりなのであるか？」

実は、ゼクは今まで散々AGI型を持ち上げ、テンプレ装備の記事を作り、動き方講座なんて気合いの入ったコーナーまでやつていた。

それをここに来て真逆のステータスに振れと言うのは、いくらなんでも反感を買うだ

ろう。

「いや、あれはあのままでいい。仮にこれからS T R型が台頭したとして、A G I型が弱い訳じやねえのは分かるだろ?」

「まあ『闘風』辺りはバケモンみたいな強さであるからな……特化型にしか出来ない戦法もあるし、精々一強環境が二強環境になつて終わりそうである」

「そゆこと。だからうちのサイトもA G I型最強論は崩さずいく! そんで俺が情弱共を出し抜く!」

段々とボリュームの大きくなつてきたゼクの話に冷や汗をかきつつ、周囲の様子を伺う。

幸いにして今の発言は、酒場の喧騒とB G Mの狭間に消えていつたようだ。

とはいえ生き馬の目を抜くG G O、どこで聞かれているか分かつたものではない。

そう考へると、俺の方が小声になつてしまふ。

「お前それでリスク部隊組まれても文句言えないであるからな」

「そんときや助けてくれよな親友」

「嫌であるが?」

「けつ、薄情モンが」

ぶーぶーいうバカを尻目に、酒代を払う。V Rゲームの酒は未成年でも飲める……

が、味が好きで飲んでいる奴を俺は見たことがない。過半数が俺と同じで雰囲気を楽しんでいるだけだろう。

「じゃ、我輩はこの辺で失礼するのである。リアルで先約があるもんで」

「あー、ちょっと待った」

ゼクの引き留めに、首だけを向ける。

「ヘルメット代、十割出す。俺もここ周回するから、このボスの情報全部吐け」
その瞬間、ヘルメットの代金びつたりのクレジットが俺の所持金に加算され、瞠目を禁じ得なかつた。

フルフェイスヘルメットを被つているとはいえ、動搖は丸分かりだ。

ゼクのニヤケ面に拳を叩き込もうか悩んだが、じやれている時間が惜しいので、腕に込めた力をため息に乗せて吐き出した。

「一日以内に文書ファイルに映像添付して送るである。お前の誠意は見せて貰つたであるからな」

そう言い残し、俺は不満げなゼクをその場に残してねぐらに帰り、ログアウトした。
内心、かなり焦りながら。

ログアウトした瞬間、俺はアミュスファイアを外し、キッチンへと急いだ。

菓子は作り置きしてある。むしろ熱を逃がし終えた今が食べ頃だ。

問題は、彼女の好きなミルクティー。あれは中々手間のかかる飲み物だ。

時間ギリギリにやつと連絡のついたゼクに恨み言を言いつつ、ポツトとカツプに熱湯を注ぎ、温める。ミルクは既に常温だ。

彼女の来る気配はない。これは間違いなく間に合つただろう。

時計を見ると、現在時刻は16時36分。

約束の時間を既に数分過ぎていた。

だが、どうやら俺よりも彼女の方が準備に手間取っていたらしく。

たつた今、鍵の開く音がした。

「遅れてごめんなさい、待つた？」

「いや、今来たとこだよ、朝田」

「そりやあ、あなたの家ですものね」

八月ともなると外は地獄の暑さだ。

冷房つて最高ね、と言いながら手で顔を扇ぎ、安物の椅子に朝田詩乃是腰掛けた。

「それで？ 今日は何を食べさせてくれるのかしら？」

期待に爛々と目を輝かせる詩乃に苦笑いしつつ、洒落た花柄の皿に、黒々としたクツキーを乗せて出した。

「これ……チョコクッキー？」

「うん。菓子作りはあんまりやったことないけど、これは多分上手く焼けたと思う」

「研究熱心ね」

そう言つて微笑む彼女の顔には、どこか影がある。その色は、ここしばらくで大分濃くなつたようだ。

だがそれも、クツキーを口にした途端に消えていった。

「……ん！　これ美味しい……」

サクサクと食べ進めていくあたり、感想に嘘偽りはないようだ。

紅茶やコーヒーと合うよう甘めに作つてあるのだが、それが朝田には丁度良かつたらしい。

「これならそのまま店にも出せるわよ。というか、高校生に料理の特訓とプロゲーマー、これだけ忙しそうなのに、よくもまあここまで専門外のお菓子を美味しく作れるわね……」

「帰宅部だからギリギリなんとかなつてるけど、部活なんかやつてたら不可能だろうな」
料理人とプロゲーマー。双方共に楽な稼業ではない。

楽な稼業というものがこの世に存在するかという問題はこの際横にやるとして、今までして片田舎から出てきたのには、情けない理由があつた。

養父とギクシャクした毎日を送っていた俺は、なんだかんだと言ひ訳を並べて東京の高校に逃げてきたのだ。

未だに仕送りを欠かさず送つて貰える辺り勘当されてはいないのだろうが、やつぱり気軽に帰る訳にもいかず。

進路なんて全くわからない状況で、ぼんやり生きていた。

本気で洋食屋を継ぐ気ならば料理の修行に専念すべきなのだろうが、GGOでのRMによる収入がバカにならないのだ。

自炊で最低限手を錆び付かせないようにしながら、RMTで金を稼ぐ。

GGOでの戦闘くらいしか取り柄のない俺が悩みに悩んだ末に行き着いた、俺なりの精一杯な生き方だった。

「料理に関しては五年間みつちり仕込まれたからな。まあまだ修業中の身だけど……」「もつと精進するように」

「へーい」

冗談めかした詩乃の言葉に、気の抜けた返事を返す。

彼女の微笑みからは、今度は影が消えていた。

「それで……今日は、泊まつていくのか?」

「勿論。パジャマだつて持つてきたんだから」

見てみれば、確かに詩乃是事前に聞いていたお茶をして解散という予定にはそぐわない大荷物を持ち込んでいた。

「まあどうせ朝田の部屋は真下の階だしな……好きにしなさい」

「うん、好きにする」

そういうと彼女は鞄の中から文庫本を取り出し、そのままゆつたりと読書を始めた。ミルクティーの注がれたカップをそっと彼女の前に置く。おかわりは勝手にするだろう。

俺はベッドに腰掛け、自分の本棚を眺めた。そこには、ダークファンタジーを中心とした陰惨な描写の多い物語が多数納められている。

詩乃是無類の本好きだが、ダークファンタジーは好きではない、と昔言っていた。それが最近になつて俺の棚から勝手に抜き取り、俺と感想戦をするほどにまでになつてている。

最近の詩乃是どうも”心も力も強い主人公”が好きらしいが、これも過去の事件を乗り越えようとする彼女の努力の一環だろうか。

彼らを見習い、胸を張つて自分のやつたことを誇ることが出来れば。

このままトラウマを克服し自立してくれれば、兄貴分としては安心である。

「朝田も頑張ってるし、俺も頑張つてメール書くか」

ノートパソコンのメーラーを立ち上げた、その時。

「メールって誰に？ 女の人？」

そう言いながら彼女は隣に座り、俺の顔を覗き込むようにして視線を交差させた。香水でも付けてるのか、いい匂います。兄貴分としては、理性を揺さぶるような仕草はやめて貰いたいのだが。

「いや、男。仕事相手だよ」

そう告げた後も、彼女は俺を見詰める。何の色もない瞳は、一体何を見ているのだろう。

ややあつて。

「そう、それならいいわ」

とだけいって、朝田は読書を再開した。

今度は、俺に背中をぴつたりくつつくように位置を変えて。

「……あの」

「大丈夫、モニターは見ないから」

そういう問題じやないんだけどなあ、と思いつつ、せつせとゼクに送らなければならないテキストを作る手は止めない。

貴重素材をふんだんに使用した特別仕様のヘルメット、それを新調する代金をゼクに

は丸々肩代わりしてもらつたのだ。

ミスの許されない、大事な作業なのだから、緊張感を持つて行うべきなのである。

けれど、朝田とこうして過ごす時間は、ミルクティーより甘くて暖かかつた。

どこかふわふわした心地で殺伐とした文章を書き上げ、ゼクのチャットソフトにファイルを送る。これで俺の仕事は終わりだ。

凝り固まつた体を伸ばしながら時計を見ると、既に六時を回っていた。

朝田はちょっと前から眠りに落ちていたはずだ。この時間の昼寝は夜の睡眠に悪影響を及ぼす。軽く揺すると、手にじつとりとした感触があつた。

違和感。

朝田の様子を良く見てみる。呼吸は浅く、全身は汗まみれ、顔には苦悶の表情を浮かべている。

間違いない。魔されているのだ。

「朝田！ 起きろ！ 起きろって！」

思いつきり体を搖すりながら、隣人に怒られない程度の音量で覚醒を促す。

かなり強引に起こしたからか、朝田の目覚めは早かつた。

目を開いた瞬間、朝田は俺を固く抱いた。振りほどけたかもしれないが、震える彼女にそんなことをする気にはならなかつた。

「……千晃くんよね……？」

「ああ、俺だ、千晃だよ。怖かったな、もう大丈夫だからな」
何を見たのかは容易に想像がつく。

数年前から彼女を蝕み続ける、郵便局強盗事件。

彼女は人生が狂つた瞬間を、何度も何度も見てているのだ。

「……千晃くんは、昔私としてくれた約束、覚えてる？」
「勿論。朝田がもういいって言うまで、俺は側にいる」

朝田はそれを境に、言葉にならない声を漏らしながら泣き続けた。

俺はそんな彼女に、背中を擦りながら抱き締めてやることしか出来ず。

彼女の泣き声が安らかな寝息に変わることには、すっかり日が暮れていた。

気の遠くなるような昔の話

「おい千晃、今日は仕込み手伝う約束だろう」「忘れてないって！ 今着替えてるんだって！」

階下からの声に倍の声量で返事をした。

目覚めてすぐ時計を確認。俺は約束の時刻がまだ先であることを確認しながら、休日であるというのに慌ただしく着替えをしていた。

唯一の保護者であるところの母親が突然姿を消してしばらくした頃、金が尽きた俺は役所に突撃した。それは、小五の夏のことだつた。

されるがままに親戚筋の辰尾と名乗る洋食屋のオーナーのおっさんに引き取られ、店の二階を自室として宛がわれて、もう二年近くは経つだろうか。

電気も水もガスもあり、何より飯が旨い。

以前とは段違いに快適な生活には大満足である……のだが。

「分かつてるなら早く降りて来い！」

「朝っぱらから人使い荒いんだよ……」

聞こえないようにぼやきながら、厨房に向かう。

新しい親代わりはどうもとこん不器用なようで、俺はそれに振り回される日々を送つてゐる。

「おっさん、おはようございます」

「おはよう。それとおっさんはやめろ、俺はまだ三十五だ」

戯れ言を鼻で笑つて流し、エプロンと使い捨ての帽子を手早く着け、入念に手を洗う。ここまで工程を一つでも忘れていたら、とんでもない威力のデコピンを食らう羽目になる。

飲食業における衛生管理の重要性はこの二年できつちり叩き込まれてゐるので、そこに口答えをするつもりは流石になかった。

キヤベツ、玉ねぎ、ニンジン、その他諸々。黙々とそれらをスライサーで均一に切り刻む。ただ無心でそうしていると、意識を野太い声が占領した。

「その…………あく…………どうだ、中学校生活は。もう二学期だが……友達は、出来たか？」
「口ごもりつつ、しかし単刀直入に、彼は俺の心に土足で踏み込んできた。言いづらそ
うにしている辺り、この男の性格が伝わるというものだ。

「いや、一人も」

「…………そうか」

多少不快ではあるが、彼の物言いは粗暴でありながら、大体の場合その内容は俺を思

いやつているものなのだ、と二年かけて受け入れた俺は、嘘偽りなく、努めて平淡に返事を返した。

辰尾に引き取られるまでの十一年と数ヶ月で、俺は人を信用することの愚かさを嫌というほど態度で、言葉で、終いには拳で叩き込まれた。

あの地獄の日々から解放されても、俺の怒りや憎しみ、疑心暗鬼といった負の感情で構成された俺の心は、朝田以外の侵入を激しく拒み続けている。

「あつ……」

肩に手を置かれ、その熱で一気に現実へと引き戻される。

スライサーの上の野菜はいつの間にか限界まで薄くなっていた。

後少しでも手を動かし続けていたら、鋼鉄の刃で削られた指から激しく出血する羽目になつただろう。

「後は俺がやる。お前はもう行つていいぞ」

俺の千切りの方がスライサーより上等だからな、と事も無げに言い放つ。

その言葉に甘えることにして、俺は厨房から出て普段着に着替える。

「ああそりだ、千晃、郵便局であれ送つて貰えると助かるんだが。大事なもんなんだ」

太い指の指す方向を見ると、慎ましやかな色合いの封筒が机の上に置かれていた。持つてみると見た目よりもずつしりとしていて、大事なものという言葉に信憑性が増し

たような気がした。

「俺なんかにやらせていいのか？」

重要な用事を俺のような野良犬に任せるつもりか、という意味の問いに、彼は何を言っているのか分からないとでも言いたげに首をかしげたので、曖昧に手を振りながら二階に引っ込み、そのままベッドの上に転がり込んで、枕元の使い込まれた携帯ゲーム機を起動した。

昔は休日は日がな一日図書館に籠ることも多かつたが、ここ一年はおっさんから小遣いが貰え、仕込みを手伝うようになつてからはその額が増えてるので、ある程度自由になる金が持てるようになつた。

そうして人生で初めて懐に余裕が生まれるようになつてからは、前々から興味のあつたゲームで遊ぶことが増えた。

どうも朝田は本さえあればいいというスタンスらしいが、俺の関心は実際に自分の手で動かせるゲームの方に寄つていつた。

勿論本だからこそ楽しみがあることも分かつてゐるし、実際のところ、俺の本棚には隙間なく古本が敷き詰められている。

「まあ、それはそれ、これはこれつてやつなんだよな」

俺は既に数年後発売されると噂のVRゲーム機のために貯金を始めていた。発売日

はまだまだ未定のままだろうが、そう遠い話でもあるまい。

絶対に発売日に買う。これは最早誓いだつた。

ちよつと休憩を挟もうとゲーム機をスリープモードにし、時計を確認すると、針は昼過ぎを告げていた。

郵便局は日が暮れる前に閉まる。次に没頭から帰つてきたらもう閉まつていた……なんてことになれば、辰尾のおつさんから大目玉を食らつてしまふ。

ランチタイムが終わつたとはいえ、まだまだ客が多い時間帯だ。邪魔にならないように、そつと店を出なければならない。

行つてきますとも言えないでの、店の扉を開ける際に封筒を厨房からも見えるよう掲げながら扉を開けた。

チリンと鈴が鳴り、おつさんの視線がこちらに向けられる。封筒を視認したであろうタイミングで、すぐにまた慌ただしく手を動かす。

それを確認した俺は、さつさと郵便局に向かつて足を進め始めた。

「昼と夜はこれが面倒なんだよなあ」

一度、何故おつさんの家ではなく店の二階に俺を住ませたのか聞いたことがある。

その時は、

「俺の家は狭いし、本来客を入れるスペースだつた二階の出番が全くないので丁度よ

かつた」

などと言つていたが、おそらくあれは何か隠している。そういうつた表情の機微を見抜くことが出来ることだけが、俺の取り柄と言つてもいい。

閑話休題。俺が用事を聞いて後回しにしても怒声が飛んで来なかつたことからも分かるようすに、俺の家兼おつさんの店から郵便局まではそう遠くはない。

帰りやすい夕方まで何をして過ごすか、ということの方が、俺にとつてはよほど重要なだつた。

郵便局の自動ドアをくぐると、太陽よりも白い癡にどこか昏さを孕む蛍光灯の光が、淀んだ空気の中働く人達を照らしていた。

正直なところ、俺はこの古びていて威圧的な雰囲気を全力で押し出しているこの場所が苦手だ。少なくとも好んで居たい場所ではない。ささつと封筒の発送を済ませ、削れた神経を休ませるために、椅子に深く腰掛け、背を丸め、両手で顔を覆うような姿勢を取つた。

その瞬間。

「千晃くん、疲れてるの？ 大丈夫？」

唐突に隣から、滑らかで透明なウイスパーボイスが聞こえてきて、俺は椅子から飛び上がりかけた。

「……朝田、人に声を掛ける時はもう少し驚かせないようやるんだぞ」

「（めんなさい。でも、千晃くんにしかしないし）」

普段より声のトーンをいくらか落としながら、いたずらそうに笑う彼女のほつぺたを
につとつまんてやつたが、何が面白いのかにまにまとした笑みを崩さない。

この朝田詩乃という少女とは、図書室で意気投合して以来はぐれ者同士、親交を深め
てきたのだ。

元々上下関係を好まない悪戯好きな質だつたようで、敬語と先輩呼びはあつという間
に取れた。

「で、朝田はこんなところで何してんのだ。本を読む場所としては悪趣味だぞ」

「ん」

朝田は指を栄代わりにした読みかけの本で、窓口のある方向を指した。そこには朝田
の母が、覚束無い様子で何かの手続きを行つていて姿が見えた。

何をやつているのかまでは流石に分からぬ、というより知つたことではないが、と
にかく朝田は母の付き添いで来ているのだろう。

「窓口での手続きとか、色々あるみたいで……まだ手をつけてない本を持ってきたんだ
けどね、半分読み終わっちゃつたわ」

「それはまた……長いな」

「まあね。でも分かつてたことだし……それに、千晃くんも来たし」

そういうと朝田は本と瞼を閉じて、俺の肩に寄り掛かつてきた。

カウンターの向こうから聞こえる紙の摩擦と、ボリュームの抑えられた職員の話し声だけが響く空間で、朝田の安らかな呼吸の音がやけに耳に残る。

平穏。静寂。それらの残滓をかき集めて、彼女はなんとか生きている。

その儂さが、無性に不安だつた。

「なあ朝田、お前、学校でうまくやれてるか?」

「藪から棒に何よ」

「いや、その……心配になつて」

「バカね、千晃くん。私がそんなにひ弱に見える?」

向き直り、俺の目を見てそう強気に言つてのける朝田だつたが、強がりであることは簡単に分かつた。

朝田がこうした直接的なスキンシップを取るようになつたのは、俺が小学校を卒業してからのことだ。

朝田のガス抜きに付き合つてくれる友人は、俺の知る限りいない。

同じ学校にいた頃は毎日のように一緒にいたけれど、今となつては週末に会えるかどうか、というところだ。心労は積もるばかりのはずだ。

「何かあつたらうちに来るんだぞ。話くらいならいくらでも聞くから」頭をわしゃわしゃと撫でる。一見朝田の表情に変化はなかつたが、耳の先が何故だか赤くなつていた。

「お父さんがいたら……こんな感じだつたのかな」

それは、遠い喧騒にすら搔き消されそうなほどの小さな声。

「お父さんよりお兄さんがいいんだけど」

「……！　もうっ！　独り言聞くなんてサイテーなんだからねっ！」

朝田がそっぽを向くのと同時に手を離そうとしたが、彼女の手がしつかりと頭を撫でていた腕を掴んでいた。

今度はさつきとは反対に、髪型を直すように優しく撫でていく。

どうも満足そうなので、そのまま手を動かし続ける。

「千晃くんこそ、辰尾さんとはうまくいってるの？」

「……分からぬ」

「分からぬいつて、いいか悪いかも？」

「うん。俺、普通の親子を知らないから、どういうのが正しいのか分からぬんだ」

俺の発言に、朝田は何も言わなかつた。

朝田も、真つ当な家族がどんなものかなんて分かりっこないだろう。だからこそ、俺

達は仲を深めることができたのだから。

「まあ、探し探しやつていくよ。少なくとも理不尽に殴られたり、飯が食えなかつたり、電気と水道が止められたりはしてないんだ。今までよりはマシさ」

「それは比較対象が悪過ぎるでしょ……」

溜め息をつく朝田。肩をすくめる俺。

この子と話していると、凍えた心に血が通うような気持ちにさせられる。

だが、見知らぬ痩せぎすの男が自動ドアを通つて入つて来た時、その足音がどこか不穏で、弛緩した空気が一気に引き締まつたような気がした。

気付いたのは俺と……朝田だけだ。

「ねえ、あの人……」

「ああ」

気取られないように、横目で確認する。

頬骨の浮いた、不健康そうな顔。ダークグレーで統一された目立たない服。郵便局には似つかわしくない、大型のボストンバッグを片手に持つ姿は確かに不審と言えば不審だつたが、そんなことがどうでもよくなるくらいに、眼が異常だつた。

眼球の位置に、真っ暗な穴が空いている。そう錯覚するほどに虚ろな瞳をしていた。

それを目だと認識出来たのは、黄色く濁つた白目が黒目とは対称的に、やけに生々し

かつたからだ。俺の母親ですら、もう少し綺麗な瞳をしていた。

男のその不気味さに、脳内で警鐘が鳴り響く。朝田の手を握り、いつでも席を立てるようにならばそれでよい。浅く座る。何故いきなり手を握られたのか理解していないのであろう朝田は顔を赤くして怒っているようだが、説明する気はなかつた。

出入口まではそう遠くない。男がそのまま用事を済ませて出ていくならばそれでいいし、怪しい素振りを見せたら朝田を連れて外まで逃げて、助けを呼べばいい。何も起こさずそのまま出ていってくれ——という願いも空しく。

なおも一生懸命窓口で手続きをしていたらしい朝田の母を、粗暴な手付きで地面に突き飛ばした。

即座に抗議しようと朝田が立ち上がり、つられて俺もそうした。

唐突な暴力によつてもたらされた、怖いくらいの静けさ。

それにも臆することなく朝田は男の母への理不尽な振る舞いに抗議すべく声を上げようとしたようだが、ボストンバッグから取り出された物を見た瞬間、ひゅつと喉から音を鳴らし、声が出ることはなかつた。

艶のない黒色をした金属で作られた、人を殺すためだけの武器。本物なんて見たことがないが、男の覚束ない手付きからその重みが伝わつてくる。拳銃だ。しかも、本物の。

「金を出せ！ 鞄一杯に詰めろ！」

口から泡を飛ばしながら、次々に要求を喚く。その視線は職員達に釘付けだ。今なら、逃げられる。

「行くぞ朝田」

言いながら、握つたままの手を引いて出口に走ろうとした。

が、しかし、朝田は動こうとはしなかつた。

「お母さん、置いてけない……！」

「置いていけないつったって……！」

涙目で訴える彼女を見て、下唇を噛む。

どうする？ どうすればいい？

朝田を無理矢理引っ張つていくのは無理だ。なら朝田の母親をここまで引っ張るか？ それこそ無謀。放心状態で脱力している大人を運ぶなんて俺には出来ない。朝田を置いていくか？

「——それが一番、あり得ないだろ」

加速した思考は、鼓膜の痛みで断ち切られた。

朝田の足元に軽い音と共に転がってきた金色の筒。血の滲む腹を押さえ、机ごと倒れる局員。

銃撃があつたのだと、ここでやつと理解した。

なおも金を詰めるよう要求していた男だつたが、怯えて動こうとしない局員達に業を煮やしたのか、遂に凶器を、客用スペースに向けた。

しばらくふらふらとさまよつていた銃口の向きが定まつた時——それは朝田の母親に向けられていた。

それを見た朝田は小柄な体からは想像も出来ない力で俺の手を振り払い、男に向かつて駆けた。

「お、おいつ！」

止める間もなく、男の銃を握る手、その右手首に思いつきり齧り付く。

その瞬間、形容しがたい、人とは思えない叫びを上げながら、男は銃を取り落とし、力任せに腕を振り回した。

「ぐつ……うう……」

その籠の外れた力によつて朝田の軽い体はいとも簡単に壁に叩き付けられ、口から苦悶の声と共に白い何かをこぼしたのが見えた。

あれは、歯だ。

あいつ朝田に手を出しやがつた。

今この瞬間、自分の中の理性が、猛り狂う怒りの手綱を握ることを放棄したのが分か

る。

「糞野郎がアアア！」

衝動のままに、俺は強盗に思いつきり体当たりをした。勢いの付き過ぎた体はそのまま男を押し倒し、何度も回転して、ようやく止まる。マウントポジションを取られたのは俺の方だ。

死ぬかもしれない。そう思ったのは、初めてのことだつた。

すぐさまパンチが飛んでくる……俺のその予想に反して、強盗の男はあらゆる激情が混ざつた、オニキス色のグロテスクな瞳を忙しく動かして何かを探していた。

銃だ。あれこそがこいつの絶対的な優位を保証する、唯一の武器なのだ。

男に先んじて見つけるべく俺も目に全神経を集中させ……やつとの思いで見つけた瞬間、時間が止まつたかのような錯覚に襲われ、俺の呼吸は止まつた。

よりもよつて、朝田の手元にあつたのだから。

時を同じくして、男もそれを見たのだろう。俺など最初からいなかつたかのように、朝田の方に猛然と駆け出した。

拘束から解放された俺は、朝田を守るべく男の背中に飛び付き、羽交い締めにする。

「朝田！ 速くそれを持つて警察に……」

行け、と。最後まで俺の言葉が紡がれることはなかつた。

正確には、銃声で搔き消されたのだ。

花火のようでいて、それよりもずっと凶暴な音と臭い。

ワンテンポ遅れて、体に感じたことのない種類の激痛が走った。

意識が脳内と視界を支配する痛みのスパークに搔き乱され、薄れしていく。

その最中、朝田の信じられないものを見るような表情が、俺の記憶に焼き付く音が聞こえたような気がした。

トーレントのおもちゃ箱

夢での怪我は凄まじい不快感を感じさせるが、それは実際の痛みとは全く似ても似付かない。

まるで、アミュスフィアのペインアブソーバに与えられる仮想の痛みのように。だから今俺の全身が痛むのは、どう考へても床で寝ていたせいだ。

「身も心も最悪の目覚めだな、全く」

痛みに堪えて体を動かし、カーテンを開ける。

残酷なまでに眩しい日光が部屋を満たし、朝の訪れを告げる。

「ほら、朝田、まだ寝たいなら自分の部屋で寝なさい」

俺のベッドで気持ち良さそうに寝ていた朝田の瞼が、ゆっくりと開かれる。どうやら

今度は、躊躇されずに済んだらしい。

「おはよう、朝田」

「おはよう、千晃くん……」

「ああ、と欠伸をしながら体を伸ばす彼女の姿には女性らしいしなやかさがあつて、不覚にも一瞬見とれてしまつた。

相手は妹みたいなもんなんだぞ。

そう自分で自分に釘を刺す。

「悪いけど今日は飯食つたらすぐアミュスファイア使うから、部屋に帰ってくれ」

「んう……ふう。分かったわ、私も今日は予定があるし」

「そつか」

目玉焼きとトーストだけの簡素な朝食の最中、俺と朝田は互いに何も言うことはなかつた。

「じゃあな、朝田」

「じゃあな、千晃くん」

そんな当たり障りのない挨拶を最後に扉は閉められた。

正直なところ、朝田とどう接すればいいのか、俺は答えを掴めずにいる。

あの事件以来、俺への依存傾向が強くなつていつた彼女が独り立ち出来るようにするためには、どうしたらいいのか。

離れてはいけない。彼女の心は未だに脆弱ぎるから。

寄り過ぎてもいけない。彼女がいつまでも鳥籠に囚われてしまふから。

泣きながら嘔吐する朝田をつい助けてしまう俺は、彼女が障害を乗り越える機会を奪っているのだろうか。

俺は、間違っているのだろうか。

左手と左肩に刻まれた弾痕が鼓動の度に熱と毒を滲ませ、血に乗せて全身を巡らせているような不快感に襲われる。

最早日課となつてしまつて、堂々巡りから逃げるよう、アミューズファイアを被つた。

「リンク・スタート」

起動時に脳に流し込まれる量子の川に流されて、降り立つのはSBCグロツケンの中
心部。ネオンで彩られたちやちな噴水がチャームポイントだ。

俺は修繕のため脱いだ防具の代わりに、全身を覆うようなロープと仮面を着用して
いた。

羽織つているフード付きロープは電飾掲示板のようになつていて、一定時間が経つ度
に色も模様も変わるようになつていて。

仮面もサイバー・チックな仕上がりで、顔を覆う黒のモニターに顔文字を自在に表示出
来るお茶目な機能が付いている。

顔を隠しつつ、無機質な印象を与えることもない。隠れた人気アイテムだ。

一見派手な着こなしに見えるが、ネオンだらけのこの街で素性を隠すには適してい
た。

アバターがM9000番代であるというだけで悪目立ちは避けられないが、全身を隠してさえしまえば、少し小柄な印象しか残らない。

こうでもしなければ、道を歩いているだけで突き刺さるような視線に晒されることになる。俺はそれが単純に嫌いだった。

ありのままの姿は、ゼクにすら見せてはいない。奴に金儲けのネタにされる気は毛頭ないのだ。

「けど、まだ待ち合わせの時間の数時間前なんだよな」

現実から逃げてきたので、やることなんて決めちゃいない。

とりあえずストレージ内に放り込まれっぱなしの最新素材達を知り合いに売り捌くことにしようとしてその場を立つ。

その時だった。

「あら、私を置いてどこに行くつもり？」

気まぐれそうなハスキーボイスが意識の外からやつてきて、背筋に電撃を走らせる。

完全に予想外なことに、シノンも既に到着していたようだ。

「あと二時間はあつたはずなのであるが？」

いつものように軽い口調で話をする。

声は震えていない。頭も冴えている。

問題ない。俺は、お調子者のトーレントなのだから。
手札を晒す無様はしない。

最悪の夢見のせいで弱気になつてゐる自分を宥めるように、心中で唱えた。
「……たまたま散歩してたら見かけたのよ」

流石にそれは通らないだろ、などという野暮なことは言わなかつた。

先程まで座つていた噴水の縁に座り直すと、隣には当然のようにシノンがいた。
「それで、今日は何の用で呼び出したのであるか？」

「あなたがいつまで経つても連絡寄越さないからよ。狩りに行くの。いい加減へカート
も撃ち慣れたいしね」

無くはない胸を張つて言うシノンの氣合いの入り具合とは対照的に、俺のやる氣はほ
ぼ無いに等しかつた。

「装備の補充と修復がまだ終わつてないのであるが……」

「えつ……それは想定外だつたわ……」

星のような目をぱちくりと瞬かせる。

「やつてやれないことはないのであるが、別の日の方がありがたいのであるな。　B
Bも近いであるからして、損耗はなるべく減らしたいのである」

「それも……そうね」

そう、今日時点で既に後二週もないというところまで、GGO初の公式大会が迫っているのだ。

普段より町をうろつくプレイヤーが殺氣立っているのも、それが原因だろう。だが、メインウェポンを提升了ままとというのは些か間抜けではなかろうか。

シノンはというと、ヘカートの代わりに以前のメインウェポンである『M700』ライフルを背負っていた。なるほど、多少は頭が回るらしい。

「しかし、あいつら……あれじや対策してくださいって言つてるようなものだろ……いや、それもブラフか……？」

独り言が思考と共に加速していく。

武器を周りに見えるように装備しているプレイヤーの中には、名のある実力者もちらほらと混じっている。彼らに関しては本命の装備を隠している可能性が高いだろう。ゼクに依頼して何人か探りを入れシノンの顔が近い。

シノンの。

顔が。

近い。

「うおっ……！」

思いつきり仰け反つたせいで、もう少しで噴水に頭を突っ込むところだつた俺を見

て、シノンの凜々しいかんばせが綻んだ。

「ふふつ……何もそこまで驚かなくとも」

「普通驚くであるよ！ なんでそんなに距離感が近いのであるか……」
ぼやきにも近い質問はどうやら彼女にとつても明瞭なものではなかつたらしく、戦場で見た即断即決つぶりとは正反対の姿を見せていた。

「ううん……やっぱり特に理由はないはずなんだけど、不思議と貴方と話してると落ち着くのよね」

思わず渋い顔をした。

こいつ、魔性の女だ。誰にでもこういう事を言つてはいるに違いない。
しかしそうだとすると、初対面の時の警戒心の説明が付かなくなる。
熟考の結果として、俺は心中のシノンに、よく分からぬ女というレッテルを貼ることにした。

一番恐ろしいのは、俺が彼女に悪感情を一切抱いていないことである。
脳裏に『惚れた方が負け』という言葉が過り、遅れて怖気が走った。
やめだ。こんなことを考へるのはやめにしよう。

「じゃあ我輩は例の素材を売り捌くから、今日はこの辺で」
ペースに呑まれないうちに離脱してしまえば良いのだ。

しかし、その程度で山猫から逃れられるはずもなく。

立とうとした瞬間、俺の肩はケチの付け所のない満面の笑みを浮かべるシノンの、やたら重く感じる左手にホールドされていた。

「それ、私も付いて行つていいかしら？」

返事の代わりに、ため息を大袈裟に一つ。

メインストリートでさえ荒れた雰囲気を感じるグロッケン、その裏通りともなれば治安は最悪……という訳ではない。

確かに見た目だけは年月を感じさせる配管が煙を吹き、建築物もあからさまにみすぼらしくはある。

だが、GGOは所詮ゲームであるということを忘れてはならない。

そこが町である、つまりこのゲームの安全地帯だと定められている以上、不意討ちはおろかダメージを与えられることもない。

無論犯罪行為の心配もない。むしろそんなものがあつたらサービス停止ものだろう。結果として裏路地は、プレイヤー経営のガンショップがひしめき合う下町情緒の漂う

場所と化していた。

「道を一本裏に入るだけで、こんなにも雰囲気が変わるものなのね……」

シノンは興味深そうに周囲を見回していた。思い返せば、彼女の装備はNPCショップでも揃えられる物で統一されていた気がする。

いい機会だろう。彼女も裏路地の利便性を知つておくべきだ。

「こつちはNPCショップと違つてプレイヤーとの交渉も必要になるけれど、絶対にNPCショップでは買えないレアアイテムが流通してたり、特注の加工の依頼が出来たりするので、GGOで上を目指すなら歩き慣れておいた方がいいであるよ」

「確かに魅力的だけど……こんな曲がりくねつた道の隅っこで店を開くなんて、商売やる気あるのかしら」

裏通りの大通りと言えるような場所からはどうに離れ、人の気配の疎らな裏道を、配管の隙間を縫うように歩く。

俺の案内を頼りにおつかなびつくり歩いているシノンとしては、ここに通うのは気が引けるだろう。

だが、そんなことが気にならなくなるぐらいの宝の山が、この先に待っているのだ。

「固定客抱えればウハウハであるからな、ああいうのは」「そういうものなのね」

「まあ、今から行く店はちとイレギュラーなのであるが」

今の言葉をシノンは飲み込めずにはいるようだが、現地に着けば分かることだ。特に補足せず足を進める。

いくつかの抜け道を使い、窮屈なショートカットも躊躇わず、そろそろシノンの堪忍袋が切れる、というところで、目当ての店が見えた。

「お、あそこあそこ！」

「……あそこ？」

俺が指を指した先には、廃材で外観の作られた、如何にもボロボロですと言わんばかりのこじんまりとした家があつた。

店らしい表札すら見当たらない有り様だ。

「あんなところが本当に隠れた名店なの？」

シノンの疑問も尤もなのだが、あそこが正真正銘俺の行き付けの店なのだから仕がない。

「入れば分かるであるよ、すぐに」

「もししようもない店だつたら素材の代金の七割貰うわよ、あの時の約束通りにね」

「ヘカート譲つた時点で九割みたいなもんであろう……よつと」

冗談の応酬を交わしつつも、手に多少力を込めて錆び付いた引き戸を開ける。そこに

は、決して大きくはない店内に、所狭しとショーケースが並べられていた。中身は選りすぐり、高性能で高級な有名実弾銃。

シノンはそれを見て、やつと納得したようだつた。

「確かに隠れた名店みたいね……店主が見当たらないけど」

「地下の工房であろうな。ベルを鳴らして待つてれば来るはずである」

レジに置かれたプツシユベルを叩くと、軽快な金属音が埃っぽい店内に鳴り響いた。後はカウンターに寄り掛かりながら店主を待つだけだ。

現実ならば銃器を扱う店としてあり得ないほどに不衛生で、銃にも悪影響なのだろう。しかしここはバーチャル空間であり、これもまた趣があるというもの。

木造の内装に整然と並べられたショーケースを真剣に眺める少女。小さな小さな埃の群れは窓から射し込む光に乱反射して、小さな妖精になつて漂つていた。

それは、洒落た古い博物館のような光景だつた。

俺も新しい掘り出し物を探そうかと動き出した矢先に、微かな足音が下から聞こえてきた。

ようやく店主のお出ましだ。

「やあーっと来たかトール、武器と防具の修繕だろ？ ワタシ様に任せときなつて」「久しぶりであるな、パツチイ」

「おーおー、久しぶり。お前の注文が一番楽しいからな。ワタシ様、待ちくたびれてたんだぜ」

レジの奥、ダミーの本棚を蹴つ飛ばして登場したのは、長めの金髪をボニー・テールに結わえ、眼鏡は無けれど知性の溢れる緑の眼を持つフランス人形。

鍛冶専用のボディーアーマーに身を包むM9000番同類代だ。

GGOには可愛いアバターのプレイヤーのみが入れるギルドがあるという噂が俄に立つていて、それは半分真実である。

M9000番代のみで構成されているスコードロン。俺とこいつはそこに所属している。まあ、俺とこの銃鍛冶はほとんどスコードロンの集まりに顔を出すことはないのだが。

「それで本題なのであるが、大変申し訳ないことに修繕だけじゃないのであるよ」

俺は手早く仮想キーボードを操作し、予め書いておいた、文字でぎちぎちの注文書を送信した。

「……ヘルメットの再作成!? いや見積もつたのはワタシ様だけどさあ……しかもゼクシードの支払いとは……あいつ思い切ったなあ」

「後は……こいつらの買い取りを」

トラップに落ちたあの日に手に入れた素材の表も遅れて送信した。ゼクと共に何重

にも確認したから、種類も数も間違いはないはずだ。

それを見た瞬間、店主は眉をひそめた。

「おいおいおい、これは流石にワタシ様の金庫も空になるわ
「じゃあ……修繕費の分はそのまま買い取つて貰つて、残りの素材は防具の強化に回し
て欲しいのである」

「重量は？」

「勿論据え置きで」

店主はおおげさに頭を抱えたが、不機嫌とは正反対。最高の笑顔を浮かべていた。
「いつも通りのとんでもねえ無茶振りだな！」

「でも出来るであろう？」

「おう。ワタシ様の腕はグロッケン一だからな、任せとけって」

馴れ馴れしく俺の肩を叩く。いつもならこれで退店して、連絡があるまで待機するの
だが、今日は少しばかり事情が違つた。

「それで……トールの後ろにいるカワイイコちゃんは誰？」

シノンは急に話を振られて驚いたようだつたが、流石というべきか、スナイパーらし
く一瞬で平静を取り戻した。

「シノン。スナイパー」

「その無愛想、昔のトールを見てるみたいだな……ここのは“実質”一見さんお断りの銃
鍛冶店、『ケースハードウン』。ワタシ様は店主のパツチイ、どうぞよろしく！」

「よ、よろしく」

自己紹介から間髪なく求められた握手に、シノンはおずおずと応え、そして疑問を口にした。

「あの、実質つてどういう……？」

「ああ、礼儀も知らんバカからはぼつたくるつてだけの話だよ。トールの友達にはそんなことしないさ。それで……ご注文は？」

声音を変えてパツチイはシノンに問う。

翡翠色の目が、無機質に煌めいた。

もつとも、シノンはその目の真意に気付いていないようだが。

「あの、今持ち合わせがなくて」

「いいからいいから、もし何でも買えるなら、この中で何が買いたい？」

身を乗り出して聞くパツチイ。

シノンも内心では欲しい銃があつたらしく、次の答えは早かつた。

「……じゃあ、『M P 7』を」

店内は、あまりにも静かだった。

何も言わず、カウンター横のちやちな椅子に腰掛けて『試験』の様子を眺める俺。完全な無表情で、鏡のような眼をシノンに向けるパツチイ。

空気が変わったのを察し、マフラーで口元を、表情を隠すシノン。一分にも満たないのかもしれないし、一時間以上だったのかかもしれない静寂を破つたのは、パツチイだつた。

「うん、合格！」

「ご、合格……？」

シノンは状況が飲み込めていないのだろう。先程とは打つて変わつて怪訝な表情を晒していた。

満面の笑みで棚からMP7を取り出すパツチイを尻目に、俺が解説してやることにした。

「シノン殿がこの店……というか、パツチイの作る装備に相応しいかテストされてたのであるよ。あれは気難しい人であるからして、一步間違えたら出禁である」

MP7は、『FN P90』の対抗馬として開発された個人防衛火器だ。

アサルトライフルと同様の内部機構を採用したこの銃は射撃精度が高く、短い銃身長のおかげで取り回しも良いため、近距離と中距離の両方で活躍することが出来る。

遠距離戦に特化したスナイパーのサブウェポンとしては、ジグソーパズルのピースの

「よう、びつたりと囁み合うだろう。

「ケースハーダウンって知ってるか」

MP7をカウンターの上に置いたパッチャイが、そう不意に口にした。ポケットから紙巻き煙草を一本取り出し、手慣れた様子でマッチを擦つて火を付けた。

薄暗い店内で、そのぼんやりとした赤い光はやけに馴染んでいた。
「昔の銃は銃身を丈夫にするために、熱した後一気に冷やすつてのをやつてたんだ。そうすると、まだら模様が浮き上がる。自然に付くものだから、全く同じ模様は存在しない。だからこそ美しい」

紫煙を吐き出す。

「ワタシ様はさ、所謂テンプレ装備が嫌いなんだよな。やれ時代がどうだの有名人の誰それが言つてただの、下らないにもほどがある。テメエの身の丈も分からんバカに丹精込めて装備を作つてやるつもりはねえのよ」

パツチイは三分の一ほどの長さになつた煙草を床に捨て、ぐりぐりと踏みつけた。店主が店を汚すのは流石にどうかと思うのだが、どうせ跡も残らないと言わてしまえばそれまでだ。

「その点あんたらは最高だ！ しつかり自分の武器を、生き様を、誰の口出しもなく自分で定めてる。ワタシ様も喜んで働いちやうぜ！ とりあえずシノン！」

「は、はい？」

狂気的なまでに爛々と輝くパツチイの眼光に、シノンは気圧された。

「どういうカスタムにする？　スナイパーのサブ武器なら軽量化メインで……いつそ装弾数を削るとか！　ストックも取り外せばハンドガンくらいのサイズになるから、ワタシ様はそつちもおすすめだな！　反動も大きくなっちゃうけど、押さえ込むSTRはありそうだしいいと思う！」

「あ、あの、私」

「ああ、お代は気にしないでいいぞ！　初回無料がうちのモットーだから！　……そうだ、いつそのこと、防具もうちで面倒見るか！」

マシンガントークに手も足も出ないシノンが、助けを求めるような視線で見つめてくる。

これは、俺も通った道である。全身をパツチイの装備で揃えれば、NPC製の装備しか使用していなかつたシノンの力は更に大きく向上するはずだ。

だから俺は手出しをするべきではない……のだが。

「あの」

「ト、トーレント……助けて……」

「手足の装甲は捨てて、背面に集中させるってのはどうであろうか？」

「うーん、ワタシ様的にはありだと思うけど、それでも重量的には厳しくて……」椅子を寄せて、会議に首を突っ込む。

俺が加わることでシノンの発言の回数は減り、多少は楽になるだろう。シノンはそんな俺の意図を察したようで、ため息を一度つき、それからは真剣な眼差しで議論を始めた。

今日は、長い一日になりそうだ。

議論の結果、シノンの装備は二週間をかけて製作する事となり、彼女がB・O・Bに参加出来なくなつた鬱憤は俺の脛にキックという形で叩き込まれた。

無痛の進撃

第1回B・B本戦、当日。

目覚まし時計が鳴る前に止め、勢いよくベッドから起き上がる。
数日前から食事管理をしていたおかげで、体調はすこぶるいい。

今日のログインは、開催時刻より相当の余裕を持つて行うつもりだった。

遅刻したら洒落にならないというのもあるが、何より、VR環境に体を慣らしておか
ないといけない。その時間を考慮してのスケジューリングである。

ゼクは何やらフルダイブに最適な環境の整えられたカプセルの置かれた高級ネット
カフェからログインすると言っていたが、俺にはそこまでの金銭的余裕はなく、是非一
緒にという誘いも、非常に残念ながら断らざるを得なかつた。

しかし、くよくよしてもいられない。今日も今日とて朝飯を食べに来るであろう朝田
のために、アジの開きを焼きつつ、豆腐と油揚げの味噌汁を急ぎで作る。

両方、調理時間が短く済む比較的手軽な料理である。
洋食のよの字もないが、朝の台所は戦場だ。仕事でもないのでわざわざ面倒なことを
やつてたまるか。

「千晃くん、朝御飯何?」

不意に扉が開き、挨拶の前に献立を聞く不届き者が訪れたのと同時に、米が炊き上が
る音が鳴り響いた。

「おはようも言えない子には教えません」

「へー、干物ね。美味しそう」

朝田は本当に信じられないことに、制服姿でキツチンに入ろうとした。制服に焼き魚
の臭いを染み付けるのは自殺行為だ。

必死に追い返し、テーブルに着いていただいた。

一汁一菜を卓上に並べる。質素な和食は鋭利な朝日に照らされ、素朴ながらも力強い
エネルギーを感じさせる。

箸を一膳、朝田の前に置き、そのまま彼女の向かいに座った。

「はい、召し上がり」

「千晃くんは?」

「ん? これ」

見せびらかすように、スポーツマン向けのゼリー飲料の封を切つた。パキリと小気味
の良い音がする。

「……もしかして、それだけ?」

「え、うん」

フルダイブ直前に満腹だと、VR空間での動きに違和感が出るのだ。何も絶食する訳でもなし、エナジードリンクだけで済ませる不摂生な同業達よりはよほどマシなのだが。

「言つてなかつたつけ、ゲームの大会があるって」

「聞いてないけど……それにしたつて、多少はちゃんと食べた方がいいわよ。あと、学校は？」

「仮病」

飲み干した容器をゴミ箱に投げ捨てる。

それは綺麗な放物線を描いて、ぼすんと狙つた場所に着地した。
ナイスショート。

「呆れた」

ため息をついた朝田はアジを一欠片取り、一口分の米と共に俺の口元へと運んでき
た。

「朝田？」

「あーん」

「朝田さん？」

「食べるまでやめないわよ」

口許こそ微笑んでいるものの、その目は真剣であつた。

諦めるしかあるまいと、口を開いて朝田の箸を受け入れる。

天日干しされることによつて凝縮されたアジの旨味と甘味が、ちよつときついくらいの塩加減で口の中に広がる。そこに白米のねつとりとしたマイルドな甘味が全体を包み込み、良い具合に調和していた。

「うん、旨いよ。……これでいいか?」

「ええ。はい、次。あーん」

「……あの、朝田」

「あーん」

何故か楽しそうな朝田を見ていると、文句を言う気にはなれず、結局、皿が空になるまで付き合わされる羽目になつた。

そんな端から見れば滑稽な食事を終えて、ログインしようとした時。

「応援してるからね」

静かにそう告げた朝田の顔は、俺のことを見透かしている、そんな眼をしていた、気がした。

まるで、これからどこに行くのかを知つてゐるような。

ゲームに詳しくない彼女がそんな表情をした事実が、どこか俺の心の中で泡のように揺れ動き、表層で波立て、そして何もなかつたかのように消え去つた。

「とまあそんな朝であつたのである」

「システム乙」

「なにおう！」

グロッケン中枢、B.O.B本戦待合室。

参加予定者は予定の時刻までにここに来ることになつてゐる。まだ始まるまで時間はあるが、遅刻なんて間抜けをやりたいやつは一人もいない。

だから早めに入室したのだが、やることがない故にひたすらゼクと駄弁つていた。

彼のあんまりな物言いに、全身を使って抗議する。

「向こうがブラコンなのであろう！」

「俺から言わせりやどつちもどつちだわ、アホ。つたく……シノンさんがいりやあなあ、愛想はないけど目の保養にはなつたろうに」

「悪いけどあいつは今回見送りであるよ、我輩が止めたである」

そう言うとゼクは、余計なことしゃがつて、と毒づいた。

慣れないヘカートとG-18Cで乗り込もうとするシノンを止めるのは一苦労であつた。ああ言えばこう言うの見本にしたいくらいのごね方をしていたが、彼女の持つ致命的な欠点を告げると、やけにあつさりと引き下がつた。一転した潔さに違和感はあるが、とりあえず参加を止められたのだから、この話を掘り下げる必要はないだろう。

「しかし、よくお前この場でくつちやべる気になるよなあ。普通気圧されるだろ」

「何にであるか？」

「見て分かれ」

そう言うとゼクは、部屋全体を指すように顎をしゃくつた。

B-O-B決勝の控え室は、殺氣に満ち静まり返つていた。周りを見てみれば、他の参加者の装備を忙しく見回しながら小声で話している者ばかりだ。

酒場の喧騒とは、完全な対極にあつた。

「まあ気の張り方を間違えているバカ共はいいとして」「おいちよつと待て、そりやどういう……」

「ここで神経を尖らせて他の参加者の装備を確認したところで、直前に変えられてしまえばそれまでだ。」

そんなことに集中力を使つて、いざ戦つている最中に疲弊してしまうなんてことになれば、間抜け以外のなにものでもないだろう。となれば、適度に脱力するのが最適解だ。どうせこの場では撃ち殺されたりしないのだから。

ゼクはそれに気付いていないようだが、説明するのも面倒なので放置することにした。

この大会でのダークホース探しの方が、よほど重要だからだ。

最初は目で探していたが、皆揃いも揃つて迷彩服だ。聴覚に意識を集中させる。

そうすると段々と識別出来る、ごく僅かな人数の英語話者。

シノンの参加を止めた、唯一にして最大の原因。今のお前じや十中八九勝てないからやめろ、と。そう俺は彼女に言つた。

「あいつら、マジでヤバいであるな。隙が無さすぎるのである。十中八九本職であろう」
本職という言葉が出た瞬間ゼクの表情は硬直したが、すぐに冷静を取り戻したようだ。

「本職つつうと……あれだな、懸念されてた、米軍人の参戦。かうつ、マジでなんで北米からの参加も可能にさせたんだよザスカーは」

その点に関しては、完全に同意であつた。

そもそも銃刀法で厳しく取り締まられている日本とは違い、向こうでは庭での

的 当て遊びも一般的だ。
プリング

システムアシストに頼らない照準を付けられる……ただそれだけで有利になれるゲームで、日本人のみがデメリットを背負っているようなものであつた。

「或いはPMC……傭兵、であるかな」

「傭兵い？」

最悪のケースを口にする。

雑談中常に声のボリュームを抑えていたゼクが、今日初めてすつとんきような声を上げた。慌てて小声になるが、もう遅い。

シンとした部屋中から尖った視線を向けられるが、軽く謝罪のジェスチャーをすると、じきに解放された。

「おくこわ………というか、そんなんいるのかよ、現代に」

「中東が火薬庫なのは昔から変わらないのである」

個人的には、軍人よりこちらの方が恐ろしい。

軍人ならば、ベースを乱せば手玉に取れる可能性はある。そのためのオモチャもいくつか持参してきた。

しかし傭兵となると、話は変わってくる。

俺ことトーレントは、あの手この手で主導権を握った後に、高めたVITとSTRで

ゴリ押すという、自由度に長けたなんでもありのスタイルだ。

それは即ち、なんでもありの本職の下位互換であるということに他ならない。
「ま、B.O.Bは個人戦のバトルロイヤルであるからな。案外漁夫れたりするかも知れん
であるし、互いに気楽に頑張るであるよ」

時計は既に開始五分前を指し示している。そろそろ気持ちの切り替え時だろう。

俺はゼクにひらひらと片手を振りながら、誰もいない隅っこに陣取ろうとした。

「あ、おい、待てってトール」

「む？」

「……組まない？」

そんな俺を止めたのは、ゼクの弱気な提案だった。お前だつて日本で指折りの腕なん
だから頑張れば勝てるかも知れないだろうに、呆れたものだ。

「はあ……いいであるか、ゼク。これ個人戦。いくらルールにチーミング禁止と書いて
ないとは言えど、暗黙の了解つてものがあるのであるからして、組むとかあり得んので
あるよ」

「無理無理無理無理無理！　組もう組もう組もう！」

「だから言つたろトール！」

右も左も分からぬ森林地帯の暗がりで、俺はゼクに泣き付いた。

完全に素の口調とトーンであつた。

B・B本戦に参加するのが三十名。最初のサテライトスキヤンに写つたのが二十五名。二度目のスキヤンでは八名。

三十分で、二十二人が死んだ。

無論名前は端末に表記されないので、それだけで判断するならば、日本人が奮戦しているという可能性は残る。

だが、俺は実際に見てしまつたのだ。自分から敵の懷に飛び込んで、ナイフで首を切られ死んでいく、顔見知りの姿を。

常人離れした予測力と戦況把握能力が両立して、初めて為せる技だ。はつきり言って、俺の手に負える相手ではない。

それを見た瞬間、俺はゼクに事前に無理矢理伝えられた合流場所に、全力で移動を開始した。

足跡は勿論消した。追跡されている気配もない。だというのに、背骨が冷たい金属に変わつてしまつたかのような緊張感が消えない。

深呼吸を一つして、悪友の顔を見る。軽薄ではあるが、腕も性根も一応は信頼に足る男だ。

「こいつとなれば、あるいは。」

そう思うと、少しは気が楽になつた。

「……まさか、本場とここまでレベル差があるとは思わなかつたである。ゼク、奴らの名前とビルドは判つてたりしないであるか？」

そう聞いてみるも、色好い反応は帰つてこなかつた。

「いや、俺も事前に北米の有名プレイヤーを調べはした。したが、そのうち日本サーバーで参加したのは皆予選落ちだ。その結果を見たから『日本と北米の純粹なGGOプレイヤーの腕前は変わらない、むしろ日本のプレイヤーの方が高い』って結論を出した。お前と一緒にな、トール」

「うむ。ということは……」

「まあ、信じたくはないけど」

ゼクは視線を散らして警戒をしながらも、仕方がないという風に肩を落とした。

「普段は仕事三昧の本職なんだろうよ」

静寂。虫や鳥のいない不自然な森で、木々のざわめきだけが妙に耳に響く。

そんな最中、突如鳴り響いたサテライトスキヤンの通知音が、意識を一気に冷たい現

実へと引き戻した。

「残りは……五人。我々を除いて、三人であるな」

森林地帯の中心に陣取る自分達の方へ、全ての光点が近付いているようだつた。

今更出ていったところで、鴨のように狩られるだけだ。

「ここで迎え撃つしかねえなこりや」

ゼクも同じ結論に達したようだ。となれば、僅かな地の利を生かすために動き出すしかない。

「ゼク、プラスマグレネードは絶対使つたらいかんであるよ、腰にぶら下げるといい的であるからして」

「そつちこそ、アーマー着てていいのかよ。いくら頑丈つつたつて限界があるぞ」「そこはまあ、VIT型の魅せ所であるな」

持つていたバジリスクと盾をストレージにしまい、代わりに使う銃を三丁取り出す。二丁は両の腰に装着し、残りの一丁はスリングに吊り下げた。

万が一のお守りに、市街戦で使う予定だつたプラスチック爆薬を腹部の装甲の上、ポケットの中に入れれば、準備は完了だ。

「じゃあ、ゼクはここから少し離れた木陰で待機。我輩は東から反時計回りに巡回するので、銃声がしたら急いで来て欲しいのである」

「了解。しくじるなよ」

「任せとけ、である」

地図を見ながら歩き出す。今回のB.O.B会場の森林地帯は、ちょうど真円の形をしている。その都合上、どこから入ろうとゼクのいる中央に辿り着くまでの時間は変わらない。

A G I に長けたキヤラクターが全速力で走ればその限りではないが、折角の姿を隠しやすい環境で、攻め込む側がそんな自分から正体を現すような真似をするとは考え難い。

先程のスキヤンで、南以外の方角から近付いて来ていることは把握している。

となれば、東側から近付く存在とまず鉢合わせするだろう。

スリングに繋げられた『SRM1216』ショットガンを構えながら、ゆっくりと移動する。

しばらくそうしていると、不意に足元が煌めいたのに気付き、全神経を注いで飛び退つた。

ワイヤートラップだ。ジャングルに仕掛けるとなれば、クレイモア地雷の類だろう。そして着地の瞬間を狙つて、弾道予測線が蜂の巣の未来を告げる。

けたたましい音で襲い来るライフル弾を、五体を投げ出すような形で伏せて避ける。

間髪入れずの追撃に転がつて対応するが、流石に全弾を回避することは出来ず、左肩に痺れが走ると同時にHPゲージが目に見えて削れた。

だが、気にするほどではない。この程度で怯んではいられない。

身を隠しリロードするギリースーツの男に冷静に照準を合わせ、姿を出すと同時に引き金を引いた。

予測円という独特のシステムのおかげで、GGOでの平常時と変わらない心拍での適正距離における射撃は、素人だろうと確実に当たる。

しかしそれはショットガンという武器にはあまり関係のない話だ。何せ小さな散弾をばらまくのだから、正確無比な狙いは必要ない。

そしてその代わりに、拡散する弾丸は近距離でしか意味を為さない。誰でも知っている常識だ。

ギリースーツもそれを知つていて、絶対的有利を取れる距離を確保して体を出した。

保証された安全に身を委ねた、攻撃一辺倒の姿勢。

だからこそ、その無防備な腹に巨大なライフルドッグ一粒弾が突き刺さる。

真紅のエフェクトを大きく散らし、慌てて岩陰に隠れるギリースーツ。

ここは森の中だ。本職に本気で隠れられたら、見つけるのは至難である。

だからあえて、逃がすことだけはしまいと懐に突っ込んだ。

コツキングの代わりに、マガジンをぐるりと回転させながら。

強引な突撃に対し、ギリースーツ野郎の目からは驚愕が伝わってくる。

が、それも一瞬のこと。『AK-47』の引き金が即座に引かれ、確実に当たる弾丸が
ばらまかれた。

しかしそんなことは関係ない。被弾を氣にもせぬ距離を詰め、敵に遅れて俺の持つ銃
から飛び出た鉛玉は、今度は散弾であつた。

強力な弾丸を二度も受け、ギリースーツの男は、撃破エフェクトと共に姿を消した。

潤沢な装甲と体力に物を言わせた、命知らずの戦い方。

リアルでの戦闘に慣れているならば、リアルではあり得ない戦法で攻めれば良い。

事前に立てた作戦がうまくいったことに安堵しかけるが、俺の見たあの化け物のよう
な男が相手ではこうはいかなかつただろう。

警戒を保ちながら、ショットシェルをリロードする。

ショットガンとはつくづく便利な代物で、ショットシェルに詰められる弾丸の性質の
幅は、ライフルや拳銃のそれを凌駕する。リアルに存在しない弾種の存在するGGOに
おいては、それが更に顕著だ。

『SRM1216』は、三本のマガジンチューブがリボルバーのシリンドラーのように回転
する形で一体になつている変則的な散弾銃だ。

鹿 撃
弾

一本にスラグ弾を、二本目には通常のバツクショットを、三本目には値の張る虎の子を装填している。被弾覚悟で中距離から近距離に押し込むには、なかなか便利な一丁である。

さて、想定よりも早く相手が済んだ都合上、こちらに向かつてているであろうゼクとさつさと合流してしまったが吉だ。

何よりも、先程から散発的に銃声が聞こえるのが気になる。音からして、拳銃だろうか。

一対一ならまだしも、数的不利を背負つたゼクが勝てる未来は見えない。

俺は一步步む度に残る足跡に目もくれず、森林の中心部に駆け出す。

「ゼク！ 無事であるか！」

「ん？ おう、何の問題もないが」

茂みから出てきた優男に安堵の息をついた。

しかし、ゼクがあの銃声に関与していないとすれば、推定本職同士がぶつかりあつたことになる。

勝手に全員が手を組んでいるだと思い込んでいたが、それは間違いなのかも知れない。

「ともかく、残つた方が手練れであることには間違いないのである。銃声はどつちから

したのであるか

「北だな」

ゼクが言つて、俺が聞いて、同時に立つ。

「行くである」

「おう」

そして、同時に歩み出す。この先に、常識外れの強者が潜んでいる。
そう思うと、じつとりとした緊張感が全身を包んだ。

誇り、あるいは執念

見渡す限りの木、木、木。

赤茶色の土煙を巻き上げながら、でこぼこだらけの道を駆ける。銃声は既に止んでしまっている。潜伏に徹されても、こちらからの発見はほぼ不可能だろう。

だからこそ居場所の露呈も気にせず急ぐ。かくれんぼに自信がない訳ではないが、それでは相手の土俵に上がることになる。

隠れたと思った途端に首をナイフで切り裂かれるビジョンまで、俺にははつきりと見えていた。

「クソッ、来るなら早く来やがれってんだ」

小声で悪態をつくゼク。その気持ちを痛いほどに解る。

居場所がバレているのは分かつていて、後はいつ撃たれるか、それだけなのだ。

急所を切り裂かれて即死するよりは、弾丸の一発でも貰つた方がマシだという判断が間違っていたとは思わない。

だが、見られている。それだけで、まるで相手の掌の上で踊らされているかのような

錯覚に陥る。

突如、ポケットの端末が鳴り響いた。
サテライトスキヤン。

「ゼク、横に飛べッ！」

俺が叫び、ゼクが端末に伸ばしかけていた手を止めて飛び退ると、弾丸がゼクの居た位置を通り過ぎ、俺の腕の装甲に弾かれたのは、ほぼ同時のことだった。

伝わる衝撃と、減ったHPゲージの長さからして、そこそこ口径の大きな銃らしい。

銃声の元を辿ると、そこにはスマートなシルエットのボディースーツに身を包んだ細身の男が、黄昏た木漏れ日の中、あくまでも自然体で立っていた。

ゼクがトリガーを引き撃鉄が落とされる瞬間、男は隠れ、俺はバジリスクを取り出した。

丁度いい岩がないので、足への射線をバリケード代わりの盾で遮り、愛銃の三足を開する。

「ゼク、展開完了である！」

「おけ！」

合図を皮切りに、ゼクは一気に加速した。

彼自身のビルドは現在進行形でAGI特化型からSTR-VITのバランス型に変

化させている最中であり、理想とは程遠い。

それなりの速さに中途半端な頑健さがおまけのように付与された、見るも無惨なステータスだ。

だがそれでも彼は予選を勝ち上がり、本戦においても最終盤まで生き残るほどの動きを見せつけた。

それを支える根幹が、三次元軌道だ。

STRを上げる最大の利点である装備の最大重量の上昇を敢えて無視し、身軽な体で障害物から障害物へ、走るというよりは跳躍する。

上から下へ、下から上へ。

そして敵の視界から外れた瞬間、鉛弾を叩き込む。反動は高めたSTRで押さえ付け、かすり傷もVITが上がったおかげでさして気にはならない。

閉所で猛威を振るいつつ、中距離の撃ち合いも可能とする、理論上は強力、しかしてなかなか難しい動きだ。

それを実践出来るのが、ゼクシードというプレイヤーだつた。

持ち前の情報量と頭脳で新たな理論を導き出し、トライ&a m p;エラーの果てに実戦で運用可能なレベルまで磨き上げる。

それが彼を一介のまとめサイトの管理人ではなく、GGOのトッププレイヤーたらし

める要因だろう。

木々は太くしつかりとした枝を伸ばしており、足場には事欠かない。目で追うのが非常に難しい動きをしながらも、ここぞという時に引き金を引くことは欠かさない。

それを僅かに体をずらす、たつたそれだけで擦らせもしない男は、ある種悪魔的でさえあつた。

無論俺のバジリスクも、目の前の生意気な小物を潰さんと言わんばかりに爆音で唸り続けている。

それでも、当たらない。

十字砲火、否、四方八方からの銃弾の嵐に曝されながらも、その中心で死の舞踏ダンス・マカブルを踊り続ける男が居た。

その舞踏家は、愉快そうに笑いながら、合いの手を入れるように大型拳銃の引き金を引く。

戯れであると言わんばかりに、急所をわざと外しながら。

俺の理性が弾け飛び、本能が目の前の畜生を決して許すなど叫び吼える。

「嘗めるのも大概にしどけよ、本職様がよ」

休むことなく灼弾を吐き出し続けていたバジリスクを即座にインベントリに格納し、

S R M 1 2 1 6を抱えて遮二無二突撃した。
選ぶチューブは三本目。コストパフォーマンス度外視の、目の前の敵を殺すためだけの弾丸。

現実には存在しない、小さな榴弾の弾幕が火を吹いた。

先程の静寂とは一転、銃声と爆発音、硝煙と爆炎が場を支配する姿も見えぬ舞踏家に向かい、俺は全力で掴み掛かる。

左手の指先に、手応えあり。そのままひつ掴んで倒し、マウントを取つて首を掴んだ
その手で握り潰す体勢だ。

「俺達を嘲笑つた事、後悔して死んでいけ……！」

ふと気付く。間違いなく命に手をかけているのは俺だ。言葉が分からぬとも伝わる憎悪をぶつけているのも俺だ。

なのにどうしてこの男は、どこまでも冷めた目付きをしている？

疑問の答えは、首の側まで迫つていた。

「トールツ！」

飛んだ。

その瞬間見えたのは、あと数瞬逃げるのが遅れていたら飛んでいたであろう俺の首、それを取り損ねた死神の鎌。

刃を漆黒に染めた大ぶりのサバイバルナイフが、このいけすかない男の主武装のようであつた。

立ち上がりろうとする男に、とつさに左の腰に差した銃を抜き撃ちした。

このブレイサーという銘の光学ショットガンは、そのカテゴリーに似合わず、二発毎にリロードが必要だ。射程も短い。威力も高いかと言われば微妙なところだ。

だが、一発に込められた散弾の数では、他の追随を許さない。

このゲームにおいて、被弾によるノックバックが発生する条件は単純明快。威力か被弾数が一定のラインを上回ることだけだ。

つまり、近距離でブレイサーの咆哮を食らつた者は、まるで漫画のように豪快に吹っ飛ぶのだ。

もう一度榴散弾で面の爆撃をすれば、よりダメージを与えられたかもしれない。しかし、爆煙に身を隠される方が、余程恐ろしかつた。

「ゼク！ いつぺん退くである！」

「おう！」

ギリースーツの男の仕掛けていた罠を再利用して作つた罠だらけの道を駆け抜ける。にやけ面の舞踏家が追い付くのはもう少し先だろう。爆音が一度だけ聞こえたが、まさかあの程度の罠で殺せるなどとは思っていない。

なんとか森林中央部、一応陣地として利用可能な程度に整備された安全地帯に駆け込み、肩で息をしながら相棒と言葉を交わす。

「ゼク、怪我の具合はどんなもんであるか」

「遊ばれてたからな、帰りに治療出来た。そつちは？」

「余裕である。見向きもされなかつたであるからな」

そう、俺達は一人がかりで襲い掛かり、軽くあしらわれたのだ。

まるで子供の喧嘩に割つて入つた大人のように、容やすく、気軽に。

その姿勢が、実力が、何もかもが瘤に触る。

「なあゼク、ここは確かにゲームかもしれない。お遊びの世界かも知れない。だけど、それでも俺達は、誇りを賭けて全身全霊で戦つているんだ

握り拳に思わず力が籠る。ここが現実だつたなら、血管の一つや二つ浮き出ていたかもしけれない。

「あんな嘗め腐つた野郎に、俺達の頂点に立たれてたまるか」

怒り狂う俺とは対称的に、ゼクはあくまでも冷静だつた。

「いやまあ、つええよ、あいつ。最強だ。疑う余地もねえ」

残りの弾倉のチエツクを行いながら、彼はあくまでも落ち着いた声音で言う。

「だが、心底ムカつく」

あくまでも、落ち着いた声音で。

「だからよトール、ここは二人、死んでもあいつを殺すしかねえよな？」
しかし、矜持を傷つけられたのは、彼もまた同じであつた。

考えてみれば簡単なことで、ゼクシードはあるの舞踏家に幾度となく見逃されているのだ。狙撃のタイミング全てが、完全に読まれていたというのに、致命打にならない肩やふくらはぎばかりを撃ち抜かれたのだから。

「ここから先、俺達は優勝の栄誉を捨てる。俺達の縄張りでイタズラして遊んでるクソ野郎をぶつ殺すためなら、命も使い捨てる。いいな、トール」

「当たり前だ、やるぞゼクシード」

そう言うと、ゼクの真一文字に締められた口が、突然緩んだ。

「口調、取れてるぜ」

「信頼出来る人間の前で取り繕う意味がないだろ、ゼク」
今度は、何も言わなかつた。その必要がなかつたから。

男にとつて、これは兎を狩ると何も変わらない行いのつもりだつたのだろう。

乱雑に撒かれたクレイモア地雷も、鼻歌混じりに避けながら歩んで来る。

そんな中を山猫のように飛びかかつたのは、ゼクシードであつた。

またも木々を飛び回りながら、『SIG MPX』サブマシンガンの吐き出す弾丸を当てていく。

MPXはサブマシンガンとしてはかなり重いが、吐き出す弾丸が拳銃弾であるということ以外はほぼアサルトライフルと言つても問題ない機構を備えた銃だ。

問題の重量も反動吸収を手伝うというメリットを持つので、命中精度は相当のものだろう。

足元が地雷まみれであるのも幸いし、先程よりも明らかにクリーンヒットが増した。確実に、着実に、悪魔は死に近付いている。

男が本気を出したのは、それを認めた瞬間だつた。

ゼクシードが枝に着地した瞬間を狙い、右手に構えた拳銃——おそらく『M1911』

の力スタッフ品だろう——で、両膝を撃ち抜いた。

慣性の働くままにゼクシードが落ちたのは、クレイモアの感知範囲内。

そのままポップコーンのように飛び出すベアリングに全身を穴だらけにされ、ゼク

シードは光の粒子となり会場から消えていった。

その一部始終を見届けながらも、俺は至極楽しそうな男に体当たりをかました。大したダメージもなく、地雷の感知範囲手前で急制動をかけてピタリと止まる。こいつがクレイモアの有効射程を知っているのは、一度だけ聞こえた炸裂音で察していた。

おそらく、自分でクレイモアを銃撃し、射出されたベアリングがどこでオブジェクトとしての役目を終えて消失するのか、距離を目で測つたのだろう。

そしてそれは、極めて正確であつた。

こいつの吸収力は異常だ。後一ヶ月もGGOにいれば、こいつは手も付けられない怪物と化していただろう。

だが、未熟で手負いの今なら勝てる。

互いにじりじりと間合いを探りながら、俺の左手にはマチエットが、男の右手にはナイフが、消されたはずの艶を殺氣の中で取り戻し、夕闇にてらてらと輝いていた。

銃など無意味、むしろ吊るしていくところで敵に使わせるチャンスを与えるだけだと、全てインベントリの中に収納してきた。

だがそれでも、盾だけは背負っていた。背後からの首絞めはこれで出来まい。一步、一步と縮まる距離。

先に仕掛けたのは、得物の長い俺であつた。

様子見の袈裟斬りを、身を低くして避けられた。

閃光。左の手に痺れが走る。

視界の端では、中指、薬指、小指。それぞれの第一関節より先が切り飛ばされ、マチエットが何処かへと飛んでいくのが見えた。

爆音。ついで鋼の球体がおぞましい速度で飛来するのを、これまた互いに無傷で避ける。

ここまで、計画通り。

かけられた足払いを身を引いて避け、その勢いのままがら空きの顔面にフツクを叩き込み、俺の右手首から先が無くなる……

悪魔のシナリオでは、そうだったはずだ。

俺が実際に放つたのは、フツクではなくラリアット。

そのまま二人共に勢いよく転がり、マウントポジションを得たのは、俺ではなく、舞踏家の男の方。

間抜けめ、と、そう目が語っていた。あるいは、俺の思い込みかも知れないが。

無感動にナイフが心臓めがけて振り下ろされる、その瞬間——身をよじり、僅かに狙いを逸らす。

そして、凶器を抜こうとするその手を、右手に込めた有らん限りの力で押さえ付けた。

「お前は確かに強いよ」

だがお前は、自分の専門に近く、しかしども遊びにしか見えないテリトリーに生きる猛者達を嘗めた。

「だからこれは、お前が払う代償なんだ」

俺は、ポケットの中に入っていた旧式の携帯電話のような形の起爆装置を左手で握り込み、腹に仕込んだC4の起動ボタンを起爆した。

長くこのゲームをやっていて、体験したこともない轟音。閃光。衝撃。

仮想空間だというのに、体だけじゃなく意識まで吹っ飛びそうになる。それを堪えるので、精一杯だった。この戦いの結果が緊急切断など洒落にならない。

耳鳴りから解放され、ようやく起き上がる。

真っ先に視界に入ったのは、僅か一メモリほど残されたほぼ透明のHPゲージ。

「ば、VIT一番に振つててマジで良かつた……のである」

一息ついて見上げると、そこには優勝者を告げるホログラムと、いくつかの撮影用ドローンが、中継中を示すピカピカと赤のランプを光らせながら俺の周りを漂つていた。

俺がここにいるのはゼクのおかげだ。

彼がいなければ、炸薬の量を減らした自爆用C4ではあの悪魔の体力を削りきれな

かつただろう。あれは二人で成し遂げた偉業なのだ。

だが、一応優勝者になつてしまつた以上、観客の期待に答えねばならない。

俺は全身ボロボロになつたアーマーを脱ぎ、本日右の腰に提げてはいたが一発も撃つことのなかつた『M1ガーランド』をカメラに向かつて掲げ、満面の笑みを見せた。視界の端で白銀の髪が日光できらきらと輝き、まるで沈みゆく陽が祝福しているかのようだつた。

後日、死闘の最中よりも素顔を晒したこの瞬間の方が視聴率が高かつた事を知り、少しだけ凹んだ。

夕闇

町の外れのボロの家屋。

埃まみれの空間。

使い古されたカウンターに肘をつきながら、店主はからかうような笑みを浮かべていた。

「秘密主義のトレントくんがよくもまあ派手にやつたもんだなあ。ワタシ様びつくりしたわ」

そう言いながら、彼は咥えていた煙草を指で弄ぶ。少女然とした見た目とは全く噛み合わないはずの動きが、不思議と馴染んで見えるのは、機械油にまみれたラフな格好だからだろうか。

「我輩もあんなことになるとは思つていなかつたのであるな」

「その割にはノリノリだつたじやん、カメラパフォーマンスまでしちやつてさ」

弁解させて欲しい。あの時の俺は怒りが一気に快感に変換されて脳内麻薬でおかしくなっていたのだ。

でなければ顔を晒したりなんかしない。絶対に。

こんなことになつたのだから、勿論道中は仮面と外套で変装をしていた。

それですら、ここに来るまでに受けた期待と好奇の入り交じる視線を思い出すと、タイミングスリップして優勝した時の俺を殴りたいという衝動に襲われた。

そんな俺の痴態の話などしたくはないので、どうにか流することにする。

「いやあまあワハハ……そんなことより」

「流したな」

「そんなことより！ 見積り、どんなもんであるか」

本題に入ると、電卓を叩く店主の表情は一転して苦いものとなつた。

「ヘルメット以外の全損した防具の再作成、ショットガン用特注榴散弾の補充、特殊弾使用によつて損耗したSRM1216のバレルの交換。C4も特注で、他にも取り扱いの少ないのがエトセトラ、エトセトラ、と。バジリスクが無傷で良かつたな、マジで」

パツチイは金が欲しくてこの店をやつている訳ではない。故に、彼の表情は大儲けの前に弛んではおらず、逆に、俺と同じような不安そうであつた。

何せ、高い金は払うのが大変だから。

遂に金額が明らかになり、パツチイの手が止まつた。

「……トーレントさ、これ、払えんの？」

提示された金額は、俺の想定を遥かに上回る代物で、思わず絶句してしまう。

体の力が抜けるのに抗わず、客のために一応用意されたパイプ椅子にどつかりと座り込んだ。

「……食費を削れば、あるいは」

「……お前、優勝商品はどうした」

『H & amp; K G36』ならゼクにあげたのである

優勝商品として贈呈された、先行実装品の超高性能アサルトライフルは、ゼクに直接手渡した。

彼は俺のために死んだのだから、それぐらいはしてやらねば、バチが当たるというものだ。

その時の彼の喜びようといったらもう、送ったこちらの方が嬉しくなるほどのものだつた。

そうして互いの奮闘を労い、後日祝勝オフ会でもやるか、とまで話が進んだのだ。

故に、後悔の念など全くなないのだが、一から話すには長過ぎるので、そこにに関しては黙ることにした。

「バカ！　お前……もう……バカ！」

彼からすれば俺は、超がつくほど高額のプレミア武器をタダで譲り渡し、挙げ句の果てに支払いのために飯を抜く愚か者であった。

それ自体は事実なので、なんとも言えない。

不摂生発言に突然怒り出すその顔色は、彼の咥えている煙草の燃える様とそつくりだった。

「大体お前はいつもそうだ、普段は意味不明なくらい用意周到、人間不信の権化みたいなくせして、いつぺん感情的になると後先考えず突つ走る！　そして後からこうして頭を抱える！　マジで何度目だトール！」

「返す言葉もないるのである……」

オカン、いやオトンかよ、と思わないでもないが、言っていることは全てが正論であつた。

パイプ椅子の上で正座している俺の姿はかなり間抜けだろう。

「はあ……しゃーない、この前お前から買った素材をそのまま使うから仕入れ代をさつ引いて、そつから優勝祝いも兼ねてある程度……そうさな、5割引。残りはツケ、まあお前なら払えるよな。特別だぞ？」

ギザ歯を見せて笑うパッティ母さん……

「ありがとうパッティ母さん……」

「誰が母さんか。せめて父さんだろそこは。おら、この後はシノンの装備の最終チエツクと受け渡しなんだ、さつさと出ていきな」

そんなやりとりと共に、俺は文字通り店から蹴り出された。
さて、メインの防具無しで、どうやつて金を稼いだものか。

そんなことを考えつつ表通りに踵を返す、その瞬間。丁度ケースハードウン前に到着したのであろうシノンとばつちり目が合った。

「あら、奇遇ね、チャンピオン？」 装備の調子はどう？』

「どうもこうも、財布をすっからかんにしてもまだ支払いが足りんのである」

「あく……御愁傷様？」

「慰めの言葉ありがとう。では我輩はこれで」

「待つて」

襟首を突然捕まれて、蛙の潰れたような声が絞り出された。

「やつと私の装備が出来上がったの、丁度いいから見ていきなさいよ」

「あく……拒否権は？」

「あると思うの？」

シノンはにつこりと笑うと、そのまま店内に俺を引き摺つていった。

「あく……なんだ、おかえり、トール」

「……た、ただいま」

お気になさらず、ピジエスチャーで伝えると、パツチイはなんだか哀れんでいるよう

だつたが、すぐに仕事に取り掛かつた。

「ほい、これが頼まれてた全身の防具と、MP7シノンカスタム、縮めてMP7SCだな」
カウンターには、きつちりと畳まれたカーキがベースの衣類の上に、いくらかの装甲板。

そして、本来のそれよりも一回り、いや、二回り大きなPDWがごとリと重厚な音を鳴らして鎮座していた。

正規品よりもバレルが長く、マガジンも大きいような気がする。フォアグリップも折り畳み式ではなく、より頑丈な物へと取り替えられているようだ。ご丁寧に、小型のドットサイトまで付いている。

だが、その分重量もかなり増しているだろう。全長も長くなっている。取り回しが悪くなっているのは間違いない。

「結局、至近距離戦特化型にするのはやめたのであるか」

「ええ。ヘカートの調整は出来ないみたいだから、この子一本である程度戦えるようにしておかないと、と思つて」

パツチイの腕をもつてしても出来ないということは、GGO内でこの狙撃銃をカスタマイズ出来る銃鍛冶はいないということになる。

「へい、パツチイ。それ、マジで弄れないのであるか？」

どうにも気になつたので詳しく述べると、彼は諦念と共に肩を竦めた。

「そもそもほぼ全てのカスタマイズ項目がロックされてるんだよね、これはワタシ様でもどうしようもないってのが結論。ま、高レアの銃にはままあることだし予想は出来てたさ。トールのバジリスクもそうだし」

「じゃあ……ヘカートには、発展性がないってこと?」

「その解釈はちと間違ってるかな」

物騒極まりない対物ライフルの銃身を撫でながら、パツチイは持論を展開していく。
「そもそも発展させる必要がないんだ、その銃は。全てが規格外。魔剣ならぬ魔銃だな。
だから……」

鋼鉄を撫でていた指を、びつとシノンに向けた。

「ワタシ様が磨くんじやなくて、君が見合うように育つのさ。それしかないね」

シノンがヘカートを見つめ、俺がバジリスクを見つめる。

そうして生まれたどことなくぎこちない妙な沈黙を、しかしパツチイは強引に二度拍手して破つた。

「はい、銃の話はおしまい! これからはワタシ様特製、シノン専用装甲服の御披露目の時間だよ! あ、更衣室あつちね」

「は、はい……」

従業員スペースの一角に用意された、簡易トイレにも似た箱のような簡素な試着室に、シノンは新しい装身具を抱えて入つていった。

衣擦れの音は聞こえないが、近くで異性が、それも美人が着替えていると思うと、ちよつと……ほんのちよつとだけ、浮き足立つてしまう。

勿論それを見逃す店主ではなく、ニヤニヤと笑う彼の視線から逃れるために、必死に平静を裝う。それが一番滑稽だと知りつつ、そうするしかなかつた。

ややあつて個室から出てきた彼女の装いは一見すると変わらないようであつたが、良く見れば装甲板が各所に増設され、関節はプロテクターに守られている。

へそと太ももも防刃纖維で編まれた服に隠された。これは大変ありがたい。目のやり場に困ることが無くなつた。

色合いや雰囲気、可動性はそのままに、弱装弾程度なら真っ向から撃ち合つても勝てるであろう防御力を手にした事になる。

「まさに固定砲台であるな！」

素直に感心していると、彼女は自信ありげに胸を張つた。

「A G I 補正下がつてないから前と同じように走り回れるわよ」「……マジで？」

そんなのチートだろ、パツチイの鍛治スキルはどうなつてるんだ。

「こいついつか運営にBANされるんじやないか、等と考えていると、ストレッヂをしながら動き心地を確かめているシノンが何故かじつとりとした視線を送つてくる。

「あの……何か？」

「とんとん、と床をブーツでつつきながら彼女が発した言葉は、まさに爆弾であつた。

「……感想は？」

「いや、それはもう言つて」

「そうじやなくて……見た目の」

シノンは恥ずかしげに髪の先を弄つていて。

パツチイは笑いを堪えながらスクショを取りまくつていて。

俺はと/or>いうと、置物になつていた。

人はあまりにも驚くと、舌の根が硬直するのだと、俺は初めて知つた。

「なあ新川、俺、何て言えば良かつたんだ？」

図書委員会の居残り仕事が終わった学校の帰り道で、俺は後輩にそう切り出した。

この話を繰り返ししている俺は相当煙たい自覚があるが、こいつは何を言つても曖昧に、というより、微妙に喜色を浮かべて笑うので、俺もつい口が滑ってしまうのだ。

「そりゃあ……似合つてるね、とか、可愛いよ、とか」

「そんなの朝田以外に言えねえよ……」

「朝田さんには、言えるんですね」

そういうと新川は、呆れたように笑つた。

陰る太陽の光が闇に溶ける夕暮れ、整然とした街並みの中にある通学路には、俺達しかしれない。

電灯も陽光も届かない、昼と夜の隙間の時間。

顔もろくに見えない今だからこそ、聞けることがあつた。

「……なあ、新川。お前、出席日数もう足りないんじゃないのか？」

ゆつたりと動いていた足が、自然に止まる。

そこは丁度いつもなら別れる場所で、このまま帰つたところで俺は止めるつもりはないのだが、新川はそうしなかった。

帰路を進める代わりに、俺の顔をじつと見つめていた。

いつも通りの、笑顔で。

「はい、だから、やめることにしました」

「やめつ……」

言葉に詰まる。高校はゲームやスポーツとは違うのだ。そんな簡単にやめると言えるものではない。

それを新川は、当たり前のように口にした。

「はい。親には、高認取つて大学行くつて言つたら、すんなりと。結果しか見ませんから、うちの親は」

でもね、先輩。ほんとは僕は、そうするつもりはないんですよ、と。

そう続けた。

「先輩とおんなじように、GGOで稼ごうと思うんです。あの砂塵と血煙にまみれた荒野で、僕は生きていく」

不可能だ、という言葉を必死に飲み込む。

俺は控えめに言つて、あまり模範的な高校生ではない。

小学校も中学校もサボりまくつていたおかげでズル休みに抵抗はないし、成績だつて赤点だけはなんとか避けている、という具合だ。

担任と一年の間だけ所属していたバスケ部の顧問、それに図書委員会の先生にそれとなくeスポーツの選手であるという旨を伝えて、後はギリギリ留年しない範囲で好き勝

手GGOに没頭していた。

俺はゼクシードとは違ひ情報サイトの運営等はしていないが、RMTによる利益、ゲーム系ウェブメディアからの取材、記事の寄稿等で収入を得ている。

それらをひつくるめて、月に二十五万。それが俺の稼ぎだつた。

高校生としては破格だろう。しかし、GGOプレイヤーの収入はここが実質の天井であり、そして、一般の社会人から見れば大した額ではなかつた。

何より、GGOはいつかサービスを終了する。何故ならあそこは現実じやなく、ザスカーという一企業の提供するサービスに過ぎないからだ。

風が吹く。丁度夏真つ盛りの生温いそれは、新川の暗い情念の炎を更に煽るようであつた。

「先輩の言いたいことは分かつてます。楽な世界じやない。でも僕だつて、先輩ほどのじゃないけど、そそここ強いんですよ？」BQBの本戦にだつてもう少しで行けたんだ

新川のこれは最早会話ではない、独り言だ。

「そしたら、先輩と一緒にいられますよね。そうだ、朝田さんも呼んで——」「おい、あいつは巻き込むな」

じつとりとした空氣とは対照的に冷え込んでいた俺の心が、今完全に凍つた。

「あいつは毎日毎日怯えて生きているんだ。誰かが守つてやらなくちゃならないんだ。トラウマそのもので構成された世界に放り込めるような状態じやない。新川、お前それが二度と言うなよ」

今まで黙りこくっていた人間に突然捲し立てられ、新川は驚いた様子を見せたが、それはすぐに、ばつの悪そうな微笑みに覆い隠され、人差し指で頬を搔きながら、視線を逸らした。

「す、すみません、変なこと言つて」

「いや、いいよ」

しかし、なんとなく居心地は悪くなつた。このまま帰れば、この気まずさも持ち帰らなければならぬい訳で……

そうだ。名案を思い付いた。

「なあ新川、明日は休みだろ？ GGOの金策付き合つてくれないか？ 装備の修理代で首回らなくて」

「ああ、C4で派手に吹つ飛ばしましたもんね。勿論いいですよ」

俺も新川も、他人に心を悟られぬよう仮面を被つてゐるという意味では同類だ。だからこそ分かる。明るく笑いながらそういう新川の顔に、それはついていなかつた。

「じゃあ明日、グロッケンの噴水前で」

「おう。それじゃあな」

良かつた。これで気持ち良く一日を終わらせられる。

そう思ったのも束の間。

「先輩」

新川が呼び止める。

「やっぱり僕、朝田さんは先輩の言うほど弱くないと私は思います」

その顔に、やっぱり仮面は無く。

「お前の思うようなヒーローでもないよ」

本心の言葉に、俺も本心で返した。

KA—BOOM! （前）

ゼクシード曰く。

数日前、『磁気嵐の吹き荒ぶ地の廃墟、そこにある核シェルターの中には秘密の研究所に繋がっている隠し通路があり、中には戦争当時の宝が残されている』というNPCの意味ありげな発言と共に、それに準ずる内容のサブクエストが見つかった。

しかしこれがなかなかの曲者らしく、マップに表示される通りの宝箱を開けると、ちゃんと報酬を与えられただけでクエストが終了してしまったらしい。

流石に怪しいので詳しく調査したいが、正直手が足りないので手伝つてほしい。金は出す。

「そんなんこんなでやつてきました、カレント研究所跡地！ 拍手！」

「ぱふぱふぱふ、とグローブ越しに手を叩くが、誰もそれに追従することはない。
なんとなく、気まずかつた。

本日のPTメンバーは、前日に約束していたシユピーゲル——新川のハンドルネームだ——と、暇うだつたので呼びつけたシノンだ。

シユピーゲルはアバターの爽やかな見た目とは裏腹に人見知りで、シノンに至つては

交流そのものを好まない。加えて言えば、今日は何故か機嫌が悪い。

「あの、お二方共……折角の宝探しであるし、もう少しテンション上げて欲しいのであるが……」

「そ、そうですね、はは……よろしくお願ひします、シノンさん」

「ええ、今日はよろしく、シュピーゲルさん」

勇気を振り絞ったシュピーゲルの挨拶は意外にも好意的に受け止められ、なんとなく雰囲気が柔軟なものとなつた。

シノンはシュピーゲルには怒つていない。となると、怒りの矛先はおそらく俺なのが、残念ながら心当たりが全くない。

結局のところ、俺はいつも通り、道化を演じて盛り上げていくしかないだろう。

「それじゃ早速核シェルターを探していくとするであるか。民家の床に入り口があるらしいので、見つけたら報告してほしいのである」

俺が話し終わった瞬間に、矢継ぎ早にシノンから提案が飛んできた。

「それだつたら、手分けした方が早いんじやないかしら。M O Bの量も大したことないみたいだし」

彼女の言う事にも一理ある。

今回の目的はあくまでもシェルター内部の詳細調査であり、シェルターそのものを見

つけるために時間を割くのは効率が悪い。

危険になつたら通信を飛ばすように伝え、散り散りに個性のない家の群れの中を探つていく。

この家も、元々は核実験か何かをする研究者達の家だつたのだろう。

雨風凌いで眠る事が出来ればそれでよい、という効率のみを追求する思考回路が、コンクリートそのままの色の立方体という味気ない外観からも感じ取れる。

内装も、寝床として使われた形跡はあるが、あまり生活感を感じない作りだつた。それがいくつもいくつも、判を押すように並べられている。

正直、退屈である。

だが、シエルターを見つけなければ話にならない。注意深く床を調べていく……

「ねえ……シユピーゲルさんとはどういう関係なの？」

散開しようと言い出した張本人が何故俺の背後に立つてているのか、と聞きたい気持ちはあつた。

しかし、このシノンという女はかなり面倒な性格で、機嫌を損ねようものならあちらこちらの戦場に引きずり回される羽目になる。

その姿からはなんとなく、元気な時の妹分が思い出され、じんわりと心が暖まるので、俺は基本的に、彼女にされるがままになることを選んでいる。

それは、今回も例外ではなかつた。

「後輩である。丁度金策に人手が欲しかつたからP.T組んでくれつて言つたのであるよ」

「……ひょつとして、私を誘つたのも？」

「人手不足であるな」

「このつ……！」

刹那、後頭部に衝撃が走り、勢いのまま壁まで転がり激突した。

天地がひっくり返つた姿勢は長くは持たず、重力に従つてずるりと地面に滑るように落ちる。

「ゞ……ごめんなさいトーレント、まさかここまで飛ぶとは思つてなくて」

「……シノン殿、いつも我輩がどんだけ重い装備をつけてるのか、よく分かつたであろう？ 今後ドロップキックをするのはV.I.T型だけにするのである」

「……あなたにしかやらないわよ」

まあそれはそうだろう。彼女のSTRが存分に発揮されたドロップキックを軽傷で受け止められるのは、G.G.O広しと言えどもきつちり防具を装備した俺くらいだろうから。

「ほら、さつさと立ちなさいな。手を貸してあげるわ」

「助かるのである」

しかし、さつきの壁は、些か固過ぎではなかつたろうか。

コンクリートではなく、何か……そう、金属のような感触だつた。助け起こされた俺は、すぐさま自分のぶつかつた壁を調べる。

「ビンゴ。お手柄であるな、シノン殿」

「は? 言つてる意味が……あつ……!」

さつきの衝撃で偽装が剥がれたようだ。

何の変哲もなかつた壁にノイズが走つてゐる。

もう一度拳で殴り付けると、偽装装置は完全に破壊されたらしく、その真の姿を明らかにした。

合金の扉はまるで金庫のようで。

巨大で複雑な電子錠は機密を守るに相応しく。

そして何より、その大きさたるや!

『こちらトーレント、シェルターの入り口を発見。速やかに集合せよ』

『こちらシユピーゲル。すぐ向かいます』

無線機を仕舞い、肩を回した。

「さて……大仕事である」

「あの、トーレント……これ、開けられるの?」

不安、というよりは疑わしげにシノンが聞いてくる。

確かに彼女と組む時は、VITに任せた生きた盾のような戦法を取るので誤解されてもおかしくはないが、俺のビルダなら鍵開けはむしろ本職なのだ。

「我輩はVIT、STR、DEX_{器用さ}にばっかり振ってるであるからして、鍵開け罠解除爆弾作りその他諸々、人並み以上には出来るのである」

「AGIは?」

「聞かないで欲しいのである!」

「ふふつ……そうね、高い訳がないものね」

低いも何も、ほぼ初期値だ。

「でも、そうね。本職がいるなら、私は邪魔にならないように外で見張りでもやつてるわ」

そういうと彼女は、窓から屋上へと音もなく登つていった。

全く以て羨ましい限りの俊敏性である。

さて、のんびりこの立派な鍵と格闘するか、と思つたのも束の間。

『敵、二部隊! 挟まれてるわ!』

『せ、先輩、その……合流地点に行けば、確実に接敵してしまいます……』

無線が鳴り響く。

俺は今まさに使おうとしていた一番目に高いピッキングツールを乱雑にポケットに突っ込み、USBメモリにも似た奥の手を迷いなく鍵穴に捩じ込んだ。

かしやかしやかしやん、と軽妙な金属音。

『シノン、一発撃つて引け！ もしかしたら帰つてくれるかも知れん！ シュピーゲルは何も考えずこちらに走れ！』

一拍おいて、大きな声で。

『鍵は既に開いている！』

電波に乗つて届く戸惑いの声に追われるよう、俺は恐ろしく分厚く鉛のように重い扉を一息に開け、中に飛び込んだ。

中にあるのは、宝箱一つ。

部屋の中央にある異様な太さの柱が気になるが、少なくともあのような形のエネミーは見たことがない。

「安全！」

至近にいたシノンは、もう金属扉まで辿り着いたらしい。

「ひとまず敵影はないである！」

「オーケー！ それじゃあ入るわね！ シュピーゲルさんの援護は任せたわ！」

「任せろ、である」

防具を切り替え、《M P 5 K》を二丁握る。

シユピーゲルのための血路を開かねばならない。

再度民家に駆け戻り、窓を割つて転がり出る。

『シユピーゲル！ 後何秒かかる？』

『はつ……はつ……分からぬけど……三十秒あれば、逃げ込めます！』

『オーケー！』

今は機動性を重視し、身軽な装いをしている。

腕こそいつものように装甲板に守られてはいるが、それ以外は紙つぺらのような金属板と光学武器用プロテクターしか身につけてはいない。

威嚇射撃に苛立つた面々が俺の姿を見た瞬間、親の仇だとでも言わんばかりの速力で突っ込んでた。

瓦礫に隠れつつ、断続的に、それでいて足止めに最適な位置に銃弾を吐き出していく。

音が止んだようだ、さて突っ込むか、というタイミングで撃ち。

辛抱だ、リロードを待つんだと隠れる相手を銃声で脅し。

今度こそリロードに違いない、と突っ込んできた相手を穿つ。

「クソッタレ、あいつのリロード技術はどうなつてやがんだ……！？」

唐突に耳元で慣れない男の声がしたので大層驚いたが、どうやら無線が混線しているらしい。

「兄貴、やつぱりあのトーレントを仕留めるなんて無茶だつたんですよ……」「じゃかあしい！ 奴を見ろ、案の定予備の装備で戦つてるじゃねえか！ 今やらずしていつやるつてんだ！」

「あの……その予備にやられてるんですけど……」

正直言つて、こういう会話を盗み聞くのは気分がいい。自分の強さで盛り上がられて喜ばないGGOプレイヤーなどいない。

しかし残念ながら、じっくり聞いている時間はない。

無線のノイズの走り方から大体の距離を計り、合致する物陰にグレネードを投げる。

残念ながら人の吹き飛ぶ赤いエフェクトは見えなかつたが、威圧程度にはなるだろう。

「先輩！」

背後からの聞き慣れた声。そして、一人分にしては多過ぎる足音。

「すみません、小隊を引き連れてきちゃいました……」

心底申し訳なさそうにしているシユピーゲルはまるで灰色ウサギのようだつたが、このまま狐共に狩られると困る。

とは言えども、二個小隊を相手にするのは大変に面倒だ。さつさと退いてしまおう。

「いや、上出来である。さ、いくであるよ」

「は、はい。で、でもどうやつて……」

「着いてくれば問題なし！」

言うや否や、立ち上がつて二方向に引き金を引く。

如何にシユピーゲルのA G Iが高かろうと、残念ながらこの場は俺の鈍足に合わせてもらうしかない。

しかし、問題はない。

無尽蔵の弾丸の雨が、二人を隠してくれるから。

「クソッタレ、そういうことか……！　トーレントの野郎、Cマグ使つてやがる！」

ドラムマガジン、という種類の弾倉がある。

円形の、ぎつちり弾の敷き詰められた弾倉で、かさばる代わりに容量がびっくりするほど大きいのだ。

Cマグとは言つてしまえば、そのドラムマガジン二個を合体させてしまつたようなものだつた。すると入る弾数は当然、倍になる。

そうして俺の『MP5K』に装填されたのは、一丁につき百発。

本来ならば軽さと取り回しの良さが売りのサブマシンガンに装着することは絶対に

あり得ないのだが、俺のビルドと戦闘スタイルには、この奇妙な銃が合っていた。

「我輩、リロードがド下手であるからな！ そもそもやりたくないのである！」

「クソツタレ！ 待ちやがれ！」

「わはは！ 待たない！」

悠々と小屋に逃げ込み、三人とも中にいるのを確認してから金属扉を閉め、施錠する。外から足音が聞こえるが、このロックを破るのはそこといい鍵師がいても十分はかかるだろう。

「いないだろから、おそらくもつとだ。

「はあ……はあ……なんとかなりましたね、先輩」

「うむ……とりあえず、ここにいれば三十分くらいは安全であろう。全員お疲れ様である」

「私は何もしてないけれどね」

シノンが茶々を入れてくる。しかし、俺が思うに、先の遭遇戦、彼女こそがMVPではなかろうか。

「いや、狙撃手がいると思うだけで動きは単調になるのである。あの威嚇射撃のおかげで全員無傷で逃げ込めたのだと思うのであるな」「あら、じゃあ誓めてくれてもいいのよ？」

「はいはい」

一転して胸を張る彼女の頭を乱雑に撫でて、本命のトレジャー・ボックスの開錠に取り掛かる。

先程使ったズルい道具、オートピッカーは確実に開錠を成功させることが出来るが、一度使えばなくなる消耗品だ。

今度こそ、手作業で開けるためにロツクピックを取り出す。これも十分に上等な代物だ。

「これからちよつと集中するから、二人で仲良くしてて欲しいのである」

「ええ、分かつたわ。そつちは任せる」

「えと、その、了解です」

シユピーゲルは外が気になつて仕方がないようだつたが、シノンとの会話に必死になつてゐるうちに、外のことなど忘れてしまつたようだ。これなら、雰囲気の悪化する恐れはないだろう。

安心して指先の感覚に意識を集中させる。

彼女らの会話の内容は分からぬが、女同士だからこそ話せることがあるだろう。まともに他プレイヤーとの交流を持たない二人にとつてはいい機会のはずだ。

念のため念入りに鍵の内部構造を探つてはみたが、事前の情報に違わず何の細工もな

いようで、開錠作業自体はスムーズに終わつた。

中に入つていたのは……

「……四十万クレジットぱつち、ですか」

「骨折り損のくたびれ儲けつてレベルじゃないわね」

およそ四百円なり。大掛かりな仕掛け扉にしては、この箱の中身はショボ過ぎるのだ。

「さて、ここからが依頼の本番……うおつ!?」

「きやつ！……な、何!?」

「ひやあつ……！」

突如として鳴り響くブザー。

それと比べるとあまりにもささやかな駆動音で、柱の中央が観音開きになる。

中には、見たことのない装置が埋め込まれていた。

装置の液晶画面に大きく表示された十五分を示すタイマーは、刻一刻とカウントを進めている。

端っこには、小さく原子力のマーク。

ここまでくれば間違いない。

核爆弾だ。

GGOでは放射線の影響は受けないが、凄まじく強力な爆弾であることには変わりない。

本来ならば一旦部屋の外に退避、いや、数キロ離れて爆発を確認してから調査を再開したいのだが。

「先輩、外は多分見張られてますよ！　出る訳には……」

「全員吹っ飛ぶより二チームと戦う方がマシよ！　トレント、行くわよ！」

「嫌であるが？」

血気盛んなシノンは血みどろの戦いがお望みのようだが、俺は別にそんなことはなかつた。

おそらく、既に外の二チームは組んでいる。

銃声が聞こえないのだ。

俺達を確実に殺すために一時休戦をし、戦利品を争つて改めて戦う。そのような取り決めをしているのではないだろうか。

「そういう展開だと我輩は予想しているのであるからして、この部屋から出る気はないのであるよ」

「……臆病風に吹かれた？」

鼻で笑われる。この場面でも焦りに支配されず、かつ戦意を漲らせているのは称賛に

値する。俺もいざとなれば、彼女に背中を任せて戦うことに異存はない。

しかし、俺のプランと彼女のプランが合致しなかつた。それだけのことだ。

「十分で爆弾解体。やるしかないであろう」

「……正気？」

静まり返った室内に、タイマーの刻む音が流れ続ける時間の存在を告げる。タイマーには、赤いデジタル表記で、残り十三分と書かれていた。

K A — B O O M ! (中)

なんなんだ、この錠前は。

俺の目前には今、この核爆弾の解除鍵の迷宮のような内部構造が、仮想ディスプレイという形で存在している。

ロボットアームを利用した最新の外科手術を行う医師を以前テレビで見たが、これはそれと瓜二つだ。

俺はこれでもGGOのプロとして、罠のついたトレジャーボックスをそれなりの量開けてきた。

起動したら即死する罠を解除したのも一度や二度ではない。

それでも、理解不能だつた。

ゴールは見えている。ただ、そこまで辿り着く唯一の道が分からない。

縦横無尽に敷き詰められたレッドゾーンは、ロツクピツクの先が少しでも触れてしまえばその時点では核が起動する。

「ちよつと、そつち行つたら行き止まりよ」

「うおつ、あぶねつ……」

「先輩、こっちのルートなら……」

「……ああ、いくらか進めるであるな」

作業を開始して五分ほど経過した頃だろうか、ついに死を待つのに耐えきれなくなつた二人が、手元を覗き込んで作業を手伝い始めた。

集中が乱されるが、変に喧嘩されるよりはマシだらうと特に何も言わなかつた。

しかし、実際のところ、既に何度も二人の助言に助けられている。

「ねえ、買付きの宝箱つて全部こんな目に悪い作りをしているの？」

「んなわけねー、である。今まで見た中で最高クラスに悪辣なやつをいくつも連結したようなもんであるよこんなの」

悪態をついている間にも、刻一刻とカウントは進む。

残り五分。それが我々三人の現時点での寿命だ。

「あ、あの、先輩」

不意にシュピーゲルが、震える指で、ディスプレイに煌めく青点を指した。

解錠画面に置ける青点は、そこに辿り着けば解錠は成功である、というゴール地点を示す。

「ここ、行けますよね？」

「もう……」

確かに彼女の言う通り、そこに辿り着くためのルートは、既に俺の脳内で克明に光輝いて見えていた。

が、しかし。青点は三つある。

俺の見立てでは、そのうち二つは偽物だ。

これが並の罠の偽ゴールならば俺の罠解除スキルで看破出来るのだが、ここまで高度な罠となると、俺のスキルが通用するとは思えない。

その怪しい三つのゴールの中で唯一解法が分かっているのが、シュピーゲルの指したそれだつた。

そのルートは、他の二つと比べ、あからさまに簡単だ。

「行ける……行けるのであるが……」

「はつきり言いなさいよ」

「最悪辿り着いた瞬間全員死ぬ」

シノンにせつつかれて、俺は端的に結論を伝えた。

ルートを示したシュピーゲルは可哀想なくらいに動転していたが、シノンは凧がごとき冷静さを見せていた。

「それで、貴方はどうするつもり？」

「……時間が足りなさ過ぎるのである。一か八か、突っ込んでみるしか無かろう」

五里霧中だつたピツクの先を、今度は淀みなく動かし始める。

「一分で開ける。覚悟を決めておくのである」

「分かつたわ」

明瞭な返事。シノンのこの土壇場での度胸の源泉は一体なんなのだろうか。

「あの……シノンさん」

「何?」

「流石にヘカートは仕舞つておいた方がいいんじや……ストレージの中に入れていれば、ランダムドロップの抽選で外れるかもしませんから」

シユピーゲルの言葉は正論だ。

もしこの狭い部屋で核が爆発したら、アイテム化しているもの全てが消し飛ぶだろう。

かく言う俺も脱げる限りの服を脱ぎ、インナー一枚で作業をしていた。

「まあ、あなたの言うことにも一理あるわね」

息をつく音が聞こえる。あまりにもいつも通りのそれは、自らの手元しか見えない俺に彼女の仕草までもを克明に想像させた。

「確かにこのヘカートは今となつては、私にとつて命にも等しい思い入れがあるわ」「それなら……」

「でもね」

弱気な声を、力強い声が遮る。

「これが私の手元にあるのは、そこのでつかいのかちつちやいのか分からぬ彼のお陰なのよ」

声色から笑みが伝わる。ひょつとしてバカにされているのだろうか。

それでも手は止めない。役割は全うせねばならない。

「その彼が命を懸けて私達のために罠を解除しているの。だつたら、私も彼から貰った命を懸けるべきじゃない?」

命。

命、か。

プログラマーの身で言うのもなんだが、俺は仮想世界にそこまで入れ込んでいいない。故に、ここで死ぬことになつたとしても、精々算盤を弾いてげんなりする程度だ。

だが、共感できる言葉だった。

対等であるために、賭けるべきもの。

現実の俺が、昔々に取り零したもの。

それを、彼女は既に両の細腕に抱えている。

何より、それを失うことを躊躇わない精神性。

強い、と。そう思つてしまつた。

無論狙撃手としての力量ではなく、心の在り方が、だ。

「そういう、ものでしようか」

「私にとつてはね」

シノンが話を切り上げたのと同時に、ぶしゅつと圧力の抜ける音と共に、爆弾そのものが鉄柱からすっぽ抜けた。

「よおっし！　とりあえず生きてるであるな！」

「先輩、カウンントは止まつてないです！」

それはそうだ。俺が先ほどこじ開けたのは、鉄柱との接合部のロツクだつた。

爆弾そのものは、自由に動かせるようになつただけで、相変わらず起爆カウントを止める気配はない。

「だけどまあ、取り外し出来るならこつちのもんであろう！」

「はあ……私、すっかりあなたのやりたいことが分かるようになつてしまつたわ」

いそいそと着替え始める俺、銃身の軽いクリーニングを始めるシノン。

爆弾が取り外された瞬間に俺とシノンの頭の出したアイデアは、おそらく同じ物なのだろう。

「我輩は扉の開閉をやるので、シュピーゲルは援護を頼むである。しくつたら全員死ぬ

からそのつもりで気軽にやつてほしいのである！」

「気軽に出来る訳ないじゃないですか！　というか、お二人とも、何をするつもりなんですか？」

「外の奴等に爆弾押し付ける」のである

小部屋に、ずつしりとした爆弾の重苦しいカウントに加えて、重厚なボルトが引かれて生じる金属音が鳴り響く。

その音色は、この小部屋に閉じ込められてから聞いた中で、最も頼もしい音だつた。

エメラルドの絹が、肌を刺すような風に舞う空。

それに見下ろされながら、狩人達は爛々とした目で鉄扉を見つめていた。

やたら頑丈な扉の先に引きこもつた獲物は、人数差をものともせずこちらを蹴散らすかも知れない危険な存在だ。

一度GGOの頂点に立つた男——それをみなが認めているかは別として——と、最近

になつて急に頭角を現した女狙撃手、それにもう一人は……分からぬが、この面子と行動を共にしているのだから、只者ではあるまい。

既に要塞化されている可能性すらある扉の先に、雄叫びを挙げて突撃するほど、彼等は愚かではなかつた。

こうなると面倒だ、お互い、見なかつたことにして引き上げるしかあるまい。

そう言外に伝える空氣が、その場にはどんよりと漂つていた。

しかし、それを誰とも知れぬ、場に似合わない明るい声が破つた。

「あれ確かにやべー爆弾付きの宝箱のある部屋で、生き残るために部屋から出ないといけないやつじやありませんでしたつけ？」

なるほど確かに、この扉の異常なまでの対爆性なら、その爆弾とやらの威力も殺せるだろう。

扉の口ツクは異常に頑丈で、突撃を強行することも出来ないようだし、奴等が出てくるまでゆつくり待つとしよう。なあに、獲物を待つのは慣れっこだ。

突如として、扉が勢い良く開いた。

それに怖じ気付くようではP v Pなどやつていらはれない。

優れた人狩りである彼等は、現れた巨漢に銃を向け——その後ろから鋭く射し込んだ

弾道予測線を見て、反射的に伏せた。

「どっせい！」

どこか間の抜けた声と共に飛び込んできたのは、重々しい、円柱状の、規則正しい音を鳴らす物体。

これは、件の爆弾ではなかろうか。

ただ一人事態を正しく認識していた、片方の集団の頭目は、いち早く立ち上がり、この前新調したばかりの『UZI』サブマシンガンを構えた。

否、構えようとした。

ストックの畳まれた『UZI』は、大型の拳銃と遜色ないサイズとなる。

それを利用して、この頭目の男は、腰のホルスターをこの銃専用に改造を施し、サブマシンガンの制圧力と拳銃の取り回しの両方を手にした。

抜き撃ちは拳銃と遜色ない速度で、精度は数でカバー出来る。

故に、腰だめで弾丸をばらまけば、少なくとも目の前の巨漢一人は殺せる。そのはずだった。

だが、今彼の手にあるのは銃ではなく、機関部を破壊されたガラクタだ。

腰に手を伸ばしたその刹那、大口径のライフルの音が聞こえた。

この銃が自壊したのでなければ、それこそが原因だろう。

自身に向けられた絶技を感嘆の念を込めて噛み締める頭目の男は、カウントが止まる

のを、ただ、聞いていた。

地震か、と、思つた。

しかしこの仮想空間では、広域での地震は起こらない。

まず間違いなく、先程投げた爆弾の衝撃だろう。

俺が被弾覚悟で核爆弾を移送し、シユピーゲルに俺の異形と化した『MP5K』を貸し、バレットラインだけをばらまき威嚇、それでも止まらない攻撃を狙撃で止める、といふ、一人のミスが全滅に直結する作戦は、上手く行き過ぎて不安になる程の結果を残した。

「ふいー！ 案外うまくいくもんであるな！」

「まあ、賭けには勝つたみたいね」

「ま……まだ膝が笑つてますよ……というかなんですかこの……サブマシンガン？ ですよね？ マガジンが空なのに両手で構えるのが精一杯なんですけど」

で

自爆を覚悟していたので、望外の成果を噛み締める俺。

神業を事も無げに為したシノンはあくまでも冷静で。

怯えながらもしつかりと仕事はこなしたシユピーゲルは、自信無きげな様子でへたりこんだ。

反応は三者三様だつたが、それでも全員が一つの勝利を喜んでいた。
しかし、お忘れではないだろうか。

「ここからが本番であるぞ」

「あつ」

そう、今日の探索の本題は、この小さくも異彩を放つ施設の調査だ。

PvPスコードロンの小隊を二つ潰したのはおまけどころか、道端にあつた邪魔な岩をどかしたに等しい。

「そうは言つたつて、この部屋が何もないのはさつき調べたじやない。これ以上何を探すつもり？」

疲労の混じつた声でシノンは言つた。しかし、何もないと言つたが、俺はそうは思わない。

「爆弾から取り外した二つの留め金、あれに穴が空いていたのである。もしかすると、鍵穴かも知れん」

「……正氣?」

容赦なく突き刺さる冷たい眼差し。しかし、数多の修羅場を潜り抜けた俺の直感もまた侮られるようなものでもない。

「ま、やるだけやってみるであるよ。手ぶらで帰つたらゼクに怒られるのである」
結論から言うと、仕掛けは一瞬で解けた。二つとも。

すると二つの金具が変形し、噛み合いそうな凹凸を生み出した。

見えない何かに促されるように金具同士の凹凸をくつづけると、寸分の狂いもなく合体した。

その姿はまるでルービックキューブから無作為に金属の植物を生やしたようで、既存の道具に当て嵌めるにはあまりにも奇怪であつた。

しかし。俺はこれの正体に目星がついていた。

「金属製のオブジェ……ですかね? これがNPCに高く売れるとか、あるいは他のクエストのキーアイテムだとか」

「いや、我輩の見立てが正しければ……」

爆弾の鎮座していたまさにその場所、そこ出来上がつた空洞の中。

この部屋の中で見ていないのはそこだけだ。

そして案の定、本当の鍵穴がそこにあつた。

一切の躊躇なく合体した金具を差し込むと、直線と直角のみで構成された、キュー
ブの溝から溢れる蒼光が、空洞の中を満たした。

「どうであるか!?」

「先輩、完璧です！ 本命が出てきました！」

彼女の指差す方向を見ると、今まで髪の毛一本分の溝も見当たらなかつた場所が
シヤツターとなつており、音もなく、煌めいたアタツシユケースが冷たい白煙と共に現
れる最中であつた。

「これがこのサブクエストの真の報酬であるか」

「また爆弾が付いてたりしないでしようね」

シノンのどこまでも冷静な言葉に、隠された報酬に対する興奮の熱が多少引く。

即座に罠感知スキルを使つたことで、未だに白煙に包まれて いる宝箱の安全性は保証
された。

「では改めまして……御開帳である！」

今までの作業とは対照的に、あつけなく箱はばかりと開き、入手アイテムの名がずら
りと並ぶ……ことはなく、メツセージウインドウの中には僅か三行の文字列があるのみ
だつた。

が、しかし。本当に重要なのは量ではなく、質なのだ。

「プラズマコントローラにレーザー発生装置、火薬制御機構……どれも現状確認されている最高レアリティの一つ上であるな。量もそれなりである」

「ほんと!? ジヤあ今回のお宝探しは……」

振り返り、俺の査定を今か今かと待つ二人と視線が交差する。

その瞳は爛々と輝いていて、冷徹なマンハンターとは思えない、年相応の無邪気さに溢れていた。

俺は素材の鑑定は得意ではない。パツチイのような本職ではないし、ゼクシードのような情報オタクではないのだ。

だから、俺にはどうしても彼等に劣るざつくばらんな査定しか出来ないのだが、それでも彼女らの求める答えを言つたところでバチは当たらないだろう。

「大儲けであるな！」

ヘルメットを外し、にこやかな笑顔でシノンと拳を軽くぶつける。

いつの間にか、習慣付いてしまつた動作だ。

「ほら、シユピーゲルも」

何故か俺とシノンのやりとりを遠巻きに眺めていたシユピーゲルにも、拳を突き出す。

しかし彼女は、

「僕はいいです」

と、だけ。

その顔は、いつも通り曖昧に笑っていて、何故か首筋がチリつくような感じがした。

KA—BOOM! （後）

「一体全体、なあーにが気に入らなかつたのであるか、シユピーゲル？」

手元のCマグにちまちま、ちまちまと弾丸を込め直しつつ、俺は彼女に問うた。

帰り道、興奮気味の俺とシノンをよそに、シユピーゲルは無言でただ一番後ろに着いてくるだけであつた。

コミュニケーションに関しては得手ではないシノンは早々に面倒事を俺に押し付け、素材を搔つ扒つて換金へと向かつてしまつた。

分け前は後から請求すればいいとして、だ。

この俯いてブツブツ言つてる後輩を、俺がどうにかせねばならないのである。

相談事には慣れているし、サクツとこいつを元気にしてしまおう。

この時俺は、こんな具合で気軽に考えていた。

「P v Pには勝利、お宝も発見、明日にはまとめサイトに載るような新情報も手に入れた。これ以上ないくらいの——」

「僕はこれでも第一回B o Bの最終予選まで残るくらいの腕前はあります」
彼女はそう、吐き捨てるように、遮つた。

「先輩の背中は遠いけど、それでも努力すればビルドの違う先輩の助けになれると思つて、一人前の人間として生きていいかと思つて僕はこの道を選んだんです。それなのに……っ！」

瓦礫を蹴る。蹴る。蹴る。STRがほぼ最低値の彼女の蹴りは岩肌を崩すどころか、それらしい破碎音を鳴らすことすらなかつた。

「聞いてない聞いてない聞いてない聞いてない！ どうしてここにいるんだ！ どうしてそこにいるんだ！ おかしいじゃないか！」

乱雑に蹴る足を止めないシユピーゲル。その襟首を、ぐいっと引っ張つた。

「落ち着くのである、シユピーゲル。シノン殿と貴公の関係は知らんであるが、別に我輩はシノン殿とペアを組んでいる訳ではなく、深い間柄でもないのである。ただの、フレンドのうちの一人であるよ」

シノンに心を惹かれつつある、という事実は敢えて隠しつつ、嘘はない程度に答える。

それに反応して首だけをこちらに向けた彼女は、フェイスガード越しでも分かるほどに鋭く、暗い眼光をしていた。

鬼神の如き形相が急に哄笑に変わる。

「ハハハハハツ！ 嘘をつかないで下さいよ先輩！」

（ここまで荒れる彼女を見るのは初めてだつた。

「シノンの正体は朝田詩乃に決まってるじゃないですか」

そして、ここまで俺が動搖するのも、また初めてだつた。

「な、にを」

「振る舞いはちょっと違いましたけど、素の反応は朝田さんそのものでしたし、そもそもユーモアが全てを物語つているじゃないですか。僕よりその辺鋭い先輩が気付いていないはずないですよねえ？」

新川は錯乱している。その主観まみれの言葉で俺の心を汚す必要はない。

そう念じても、無駄だった。

何故シノンが俺にだけ親しげなのか。

何故シノンが俺とほぼ同時にログインし、ほぼ同時にログアウトするのか。

何故B.O.B本戦当日、朝田が俺の行く場所を理解しているような視線を送つてきたのか。

目を逸らしていた唯一解。

それを受け入れれば、あらゆる疑問が氷解する。

しかし俺は、それでも今まで俺が目を逸らし続けていた理由を口から漏らした。

「朝田は銃なんて握れない。見ることすら出来ないんだ。いるはずがない、こんな……こんな、血鈍の浮いた金属と火薬しかないような世界に」

この期に及んでは、薄氷よりも頼りない声が絞り出される。

「先輩、よく僕に現実逃避だけはしちゃいけないって言つてたじゃないですか。現実は眼の前から消えてはくれないから、と。その言葉、そつくりお返ししますよ」

「おい新川——」

そう言うと彼女は、こちらに目もくれずさつさとログアウトしてしまった。

新川恭香という少女は、初めて出会つた時から思い込みが激しく、言いたいことだけ言つてその場から逃げ、人目のつかない場所でうずくまる、そういう不安定さがある。癪癩を起こすのも珍しくはないが、今日のそれは色んな意味で特別だつた。

頭の中で響く不愉快な油蝉の声を、ため息で無理矢理押し退ける。

この時ばかりは、何も考えたくなかつた。

朝田が、ここに、いるはずがないんだ。

頭の中でその言葉だけが、まるで、心という水盆に延々と波を立てるようリフレインしていた。

けれど、もしシノンが朝田ならば。

シノンのあの飄々とした有り様こそが本来の姿ならば。
やつぱり、俺の甘やかしこそが、彼女の自由を奪つてゐるなんじやないのか?
事実と推測と妄想が頭の中で混ざり合つて溶けていく。

脳みそがミキサーにかけられて、どろどろの吐瀉物として口から吐き出されるような、最悪の気分だつた。

「千晃くん、今日の献立は?」

明朝。

朝田はいつものように、我が部屋の薄い金属製の玄関扉を開け、朝飯をたかりに來た。普段ならば、ダイニングの席に着くよう促しながら、調理の仕上げに入つていただろう。

足をぶらぶらせながら待つ彼女の前に食器を並べ、共に朝食を摂つたのだろう。俺は今から、この日常を壊す。

「ない」

端的に伝えると、彼女はちょっと申し訳無さそうに笑つた。

「……そうよね、そういう日もあるわよね。じゃあ、明日、楽しみにしてるから」

何かある。それを察知する能力に朝田は長けていた。その状況から逃れる術にも、同じく。

だから俺は、踵を返して部屋から出ていこうとする朝田を、間髪入れずの言葉で止めた。

「明日も明後日もない。朝田、俺は、お前を甘やかすのをやめようと思う」

ノブを握る朝田の手が止まつた。彼女は、これが冗談ではないと分かる程度には頭が良い。

俺の体も微動だにしていない。

デジタル時計を使つていてるから、時計が時を刻む音すらもない。

まさしく、無音だつた。

不吉な静寂を拭い去りたくて、俺はとにかく捲し立てた。

「前々から思つてはいたんだ。俺が朝田に構い過ぎるせいで、朝田の成長を邪魔してるんじやないかって」

脳裏にシノンの笑顔が過る。

朝田がシノンかどうかは置いておくとして、シノンには元気だつた頃の朝田の面影があるのは確かだ。

もしも朝田が自由に羽ばたけるならば、鳥籠たる俺は用済みのはずなのだ。

「だから、俺のことはもういなものと思つて、朝田は好きにやつてくれ。きっと、それが一番いいんだ」

その時朝田は、尻すぼみになる俺の声を搔き消さんばかりの勢いでこちらに突っ込んできた。

そのままぽすんと胸元にうずまり、続いてじんわり、温かさと湿り気を感じた。

「あ、朝田……？」

「うそつき」

しばらくそうした後に顔を上げて放たれたのは、理性的な彼女のものとは思えない、まるで幼子のような響きだつた。

「私がもういいって言うまで一緒に居てくれるつて約束したじゃない！」

「だけど

「私はまだそんなこと言つてない！ 一人になるなんて耐えられない！」

普段の朝田は理知的で、発作を起こしている時は弱々しい。

けれど、こんなに激しく感情を吐露する彼女を最後に見たのは、もう何年前だつたか。「私の側にはもう千晃くんしかいないのに、あなたまで私から離れていくの!? そんなのつて……そんなのつて、あんまりじやない……」

白く細い両の腕で、一生懸命俺をしがみつく様に抱く浅田の姿を見て、俺は彼女の中

学の入学式の日のことを唐突に思い出した。

それは、四月の頭だというのにしんしんと降る異例の雪に見舞われながらも執り行われた。

まるで冬のようになると降る雪のせいで、新入生は大はしゃぎだ。自らの人生の節目を雪桜の日に迎えられたのだから、無理もない。

とはいって、上級生にとつてはただのとびきり寒い早帰りの日だ。一秒でも早く帰らんとする生徒で下駄箱は溢れ帰っていて、とてもではないが近寄る気にはならなかつた。仕方なく、いつも昼寝に使つてゐる空き教室の机の上に寝つ転がり、本でも読んで過ごそうと、そう思つていたのだが。

「みーずーゆーきー、陸上やめるつてマジ？」

外気より冷たい声が邪魔をする。

鋭い眼差しで俺を睨む少女に、俺はこう返した。

「耳が早いな。マジだぞ、小坂」

緩くウエーブのかかった茶髪をポニーテールにまとめた、小柄な少女。

彼女こそが、俺が一年と数ヶ月在籍していいた陸上部のマネージャーである。

「確かに俺はあるの部でひたすら走るのは嫌いじゃないし、部の奴等が特別嫌いな訳でもない」

「だつたら……」

だが、俺にはそんなものより優先するべき人がいるのだ。

朝田が強盗を射殺した事件から二年近く経つた。俺の手と肩の銃創は痕こそ残つたものの、後遺症が残るような重い傷ではなかつた。

報道規制のせいで、俺はあくまでも被害者として周囲から憐れみの目で見られるだけだつたのだ。

それに比べ、朝田は相当な地獄を見ていたらしい。既に小学校を卒業していた俺は、朝田に何もしてやることが出来なかつた。

俺は、朝田が生け贊になつたからこそ、のうのうと学生生活を送ることが出来たのだ。だが今日からは違う。朝田が同じ学校に入つた以上、俺が守つてやれる。

何せ、陸上部で無心になつて上を目指したのは、肉体的、政治的な地盤固めのためにもあつたのだから。

そんなことは露知らず、彼女は突然部を去ろうとする俺を引き留めに來たようだ。

「なんで!?　あんた変人だけど、そんなでも主将でしょ！　責任感とかないわけ!?　監

督だつて、あいつは変わつたやつだが足はインターミドルでも上位狙える、て言つてたのよ!?」

キンキンとよく耳に響く声で、必死に訴える小坂。だが、俺の心は揺らがない。

「その監督が退部届けを受け取った。それだけの話だ」

「納得が！　いかない！　監督にもした説明を私にもしなさいよ！」

「監督には、朝田詩乃の面倒を見るからって言つたら一発で通つたぞ」

朝田詩乃。この小さな町で、人殺しとしての汚名をただ一人着せられた、本物の被害者。

その名前を出した途端彼女は少したじろいだが、彼女はその程度ではへこたれない。
「だ、大体、朝田さんと流みずゆきになんの関係があるの？　流にとつて朝田つてどんな子なの
よ」

俺にとつての朝田詩乃とは何か？

それは、不思議と目を惹かれた初対面の頃から考え続け、未だにこれと胸を張つて言える答えが見つからずにいる問い合わせだつた。

だが、左手と左肩の傷痕が疼く度に沸き上がる、不甲斐ない自分への怒りは間違いなく俺の内にある。

守れなかつた後悔の象徴が、彼女の悲痛な顔が、いつまでも脳裏に焼き付いているのだ。だから。

「俺にとつての朝田は、死んでも守らなきやいけない妹分だよ」
これが、今の俺に出せる精一杯の答えだつた。

「まあそういう訳で、残りの連中の面倒を見てやつてくれ」

なおも不満げなマネージャーを尻目にさつきと話を切り上げ、出入口の戸を開く。

そこには、頭に雪を薄く積もらせた朝田がいた。

「朝田!? なんでここが……」

「千晃くん、いつまで経つても校舎から出てこないし、でも靴箱には外履きしか入ってなかつたから、何処かの教室にいるんだろうなって」

「それで、しらみ潰しに?」

「くりと、頷いた。

風邪を引いてはいけないからと、とりあえず頭の上の雪を優しく払った。いつの間にか真っ赤になっていた耳も手で暖めてやり、こんなこともあるうかと用意していたマフラーも巻いてやつた。

「ふふつ」

すると朝田は、とても嬉しそうに目を細めた。事件以来ふわふわとした年相応の笑顔を見せることはなくなつたが、かといって彼女の感情が無くなつた訳ではない。

朝田が嬉しそうだと、こつちまで笑みがこぼれてしまう。

「さ、帰ろうか」

「ん」

ゆっくりと、朝田の歩幅で帰り道を歩き出した。

彼女いるんなら言つとけやー! という背後からの声は無視した。朝田は彼女ではないし、大体誰に言えというのだ。

さくさくと小気味良い音を立てながら、車一台通らない道を二人きりで歩く昼下がり。

「こうやつて一緒に帰るのは久々だな、朝田」

「……うん」

「時間が時間だし、うち寄つておつさんの飯食つてくれ?」

「……」

「おつさんの飯はな、旨いぞ。ほら、朝田の家には連絡しておくからさ」

「……あのね、千晃くん

「ん?」

「……千晃くんは、怒つてないの?」

それは、重苦しい沈黙を貫いていた朝田からの、藪から棒な質問であつた。

朝田は、震えていた。これは寒さではない。恐怖だ。

「わ……わ、わたしが、ちあきくんの……う……」

「朝田、公園で一休みしよう。それからおつさんの飯食つて、俺の部屋でゆっくり話そ

う。な？ その方がいい」

嘔吐する素振りを見せてなお話を続けようとする朝田を制止して、半ば無理矢理公園のベンチに座らせた。

それでも、冬の冷たさは心の温度も奪つていくようで、俯き続ける朝田に渡したホットココアは、プルタブが起こされることすらなく温もりを失つていつた。

俺は隣に座つて、ジャケットを脱いで朝田の頭にかけた。

「わつ……あつたかい

「また雪を積もらせて、傘地蔵にでもなる気か。風邪引くぞ」

「……服を脱いだ千晃くんよりはマシだわ」

「それはまあ……そうかもな」

ジャケットまで被せられてもここになつた朝田と、薄いシャツの上に学校指定のセーターを着てているだけの俺。雪の中、どちらが先に体調を崩すかは明白だ。

雪舞う春風が一層強く吹いて、指の感覚が薄れる。気付けば妙に朝田の顔も赤いし、ここはさつさと家に帰るべきだろう。

どちらからともなくベンチから立ち上がり、今度こそしつかりとした足取りで、家路を急いだ。

隣を歩く朝田の体は俺の普段着ているジャケットにすっぽりと覆われていて、改めて

彼女の小ささを実感させられる。

「いいにおい……」

「ん？ 何か言つたか、朝田」

「んっ!? い、いえ、何も言つてないわ」

口元までマフラーとジヤケットの両方で隠されては、流石に俺でも彼女の表情は読めなかつた。

住宅街からちよつと遠い、車通りの多い交差点に俺の家はある。

木を基調とした、磨りガラスが嵌め込まれた窓のある扉には、『CLOSE』と書かれた札がかかっている。開けると、チリンと入店を告げる金属音が鳴つた。

「おっさん、帰つたぞ」

「おー、おかえり……つて、なんだその格好は。風邪引いても面倒見ねえからな」

心底嫌そうに睨むおっさんだが、俺の後ろにぴつたりとくつつく小さな影を見た途端に商売の時の人当たりの良さそうな笑顔になつた。

「詩乃ちゃんも連れてきたのか！ それを早く言えつてんだよ千晃よお」

「思つたより雪が酷くてな。うちで体暖めてから帰そうと思つたんだよ」

「あ、あの、お邪魔します」

俺の後ろから出てこないことを除けば、礼儀正しい挨拶だつた。

「あの、とりあえず私、家に連絡しなきやなんですけど……」

「じゃあ厨房は五月蠅くなるから、上の俺の部屋を使つてくれ。俺は強制的に昼飯作りに駆り出されるから」

「当然だ、自分の食うもんは自分で作れ。詩乃ちゃんの分もあるから俺が手伝つてはやるがな」

「へいへい」

俺の料理はまだまだ未熟、辰尾のおっさんに追い付くためには場数を踏むしかないのだ。

淀みない手付きで材料を取り出していく。今日作るのは、ナポリタンだ。

それを理解したおっさんは、呆れたような顔をしていた。

「またナポリタンか、飽きねえなお前も」

「当たり前だろ。この世で一番旨いのはこここのナポリタンだ」

この店に連れてこられた時に、初めて出された料理。それがナポリタンだつた。

給食費すら払つたことのない俺に手料理を食べた経験なんてある訳がない。それ故に、初めて食べたナポリタンの味は筆舌に尽くしがたかつた。

危なつかしさの消えた、しかしままだ粗だらけの手付きで自分の分を作つていく。朝田の分は、当然おっさんが作る。曲がりなりにもお客様であり、半人前の料理など出

すことは出来ないのだ。

「なあ、千晃」

「なんだよおっさん」

「お前、詩乃ちゃんとデキてるんだよな？ 晴れて中学生になつたんで、家でデートに洒落こむ算段か？」

この瞬間、信じられないほど大きなため息が口から漏れた。

「……俺と朝田はそんなんじやないよ。去年までランドセル背負つてた妹分にそんなこと思えるかよ」

淡々と調理を進めながら、吐き捨てるように言つた。

おっさんの方を見やると、既に盛り付けまで終えているというのに、処置なしとでも言いたげな、腹の立つ表情をしていた。

「……なんだよ」

「……いや、こう、詩乃ちゃんも大変だなあと」

「そりやそうだろ、あんだけ酷い目に逢つてりやなあ……！」

「あー、そういう意味じやないんだが……ほら、残りの作業は俺が代わつてやるから、詩乃ちゃんとゆつくりしてこい」

おっさんの言葉の半分くらいは意味を図りかねたが、朝田の様子を見ておきたいのも

確かなので、とりあえず彼の言う通りにすることにした。

階段を上がろうとした、まさにその時。

「おい」

いつもよりずっと硬い、辰尾の声だ。それは、飲食店としての流儀や俺の将来に関わるような、大事なことを話す時だけに聞かせる、諭すような声。

「詩乃ちゃんにそっぽ向かれるような男にはなるなよ」

いつもなら鼻で笑つて片付けるような言葉。しかし、言葉に乗せられた重みがそうはさせなかつた。

反応しかねた俺は、ただ頷き、その場から逃げるよう自室への階段を登る。

それしか、出来なかつた。

部屋に入ると、やけに布団が膨らんでいるのに気付く。

「朝田？」

声をかけると、もぞもぞと布団が動き出し、朝田の顔だけが出てきた。そのシルエットはまるでおにぎりのようだ。

「寒いよな、この部屋。ヒーター付けるぞ」

「うん、寒い。だから、こつち来て」

電気ストーブの電源を付けようとした俺のシャツの裾が、くいくいと引っ張られる。

されるがままにしていると、布団がずり落ちる音と同時に、俺の背中に冷えきった何かが密着して。俺の腹に白磁のような手が回された。

これは、ひよつとして、朝田に抱き付かれている――？

つまり、これは、ええと……どうすれば……

「あ、あさだ」

「千晃くん」

俺の上擦つた情けない声が、朝田の決意の籠つた声に遮られた。

これは、さつき帰り道で朝田が吐きそうになつてまで話そうとした、その続きだ。

背中に女の子がくつついているという事実から極力目をそらしつつ、沈黙を貫く。

朝田が恐る恐るといった様子でこぼすように言葉を紡ぎ始めたのは、数秒後のことだつた。

「……千晃くんは、怒つてないの？」

それが、二年前の銃撃事件を指していることは明白だつた。

朝田が今までずっと俺を避けていたのは、会いに行つても顔を見せてくれなかつたのは、自分の手で俺に発砲した罪悪感からなのだろう。

中学生という節目で、遂に彼女は恐怖に立ち向かうことを決心したのだ。
なんという、心の強さ。

「朝田。確かに俺はずつと怒つてる」

ビクン、と震えが伝わつた。

「でもそれは、朝田に対してもやないんだ。あの時の強盗に対してと、何も出来なかつた自分に対する」

そして、親なのに朝田を守らなかつた彼女の母親に対してと、なんの理由もなく俺達に降りかかる苦難に対して。これは言わないが。

「あの強盗が全部悪くて、朝田は皆をあいつから守つたんだ。だから、朝田が苦しむ必要は何もないんだよ」

抱き付いている手は既に力を失つていた。やすやすと振り向き、逆に抱き締める。二年間、ずっとこうしてやりたかった。

「で、でも私、み、みん、なの言う通り、人殺しで……」「関係あるもんか」

クズ一人死んだところで、なんだというのか。

「それでも苦しかつたら、俺がいるから。朝田がいいって言うまで、俺は側にいるから」

それが、本来あそこで手を汚すべきだつた俺に出来る唯一の贖罪なのだ。

朝田はそれきり黙つて、ただ俺の腕の中で泣いていた。

今の状況は、それとそつくりなようで、実際は真逆だつた。

俺は今彼女を、安堵ではなく、不安で泣かせている。思い出したように傷痕が疼き、自己嫌悪に襲われる。情けない。

死んでも守るとはなんだつたのか。

地元から逃げて、仮想の鉄砲遊びにかまけているうちに、そんなことも忘れてしまつたのか。

俺はそつと、朝田を抱き締め返した。

「ごめんな、朝田。俺、大切なことを忘れてた」

「ばか」

朝田の腕の力が更に増した。けれども俺の百八十センチを軽く越えるガタイからしたら、この程度の力なんて可愛いものだ。

「さ、なんか適当に食べて……今日はゆつくりするか。学校は休んじまおう」

「……わかった」

その日は、布団の中で二人くつづいて過ごした。

邪な意図は何もなくて、ただ互いの温もりが欲しかったから。

邪魔になるからと、俺は枕元に置いてあるアミューズファイアを片付けた。

そう言えば、GGOで戦い出して以来初めてコンセントを抜いた気がする。

戦場と断絶されたリング状のヘッドギアは不思議と重たかつたが、不思議と今の俺に
とつては、心の底からどうでも良かつた。
さつきまでの嘔吐感が嘘のように晴れやかな気持ちになり、まるで体がふわふわと浮
いているようだつた。

そしてその日を境に、俺はGGOにログインしなくなつた。

だつて仕方ないだろう？

俺にとって一番大事なのは、朝田のお世話なんだから。

雲泥の差

「最近、ちょっと肌寒くなつてきたな」

日課の買い物から帰宅した途端、俺は室内の暖気にほつと息を吐いた。
紅葉の敷かれた商店街には木枯らしが吹き始めていて、先日までの暑さは無いもの
だつたかのように消え去つていた。

「むしろ今まで半袖でいられた方がおかしいのよ。おかえり、千晃くん」

彼女は俺が帰つてくるなり、それまで読んでいた本を閉じて、ぱたぱたと玄関に走つ
てきた。

昨日まで着ていなかつたライトブラウンのカーディガンが目を引く。
決して派手ではないが、彼女の落ち着いた雰囲気にはよく合つている。
「ねえ、今日の晩御飯はなあに？」

「サンマ焼こうか。今日はかなり安かつたんだよ
「そつか……もう九月も終わるものね」

「おう。サンマの旬だ」

そして、第二回、B・O・Bの開催も迫つてゐる。

その事実を前にしながら、俺はそれでも身が入らずにいた。先日の一件の後、一度も GGOにログインすらしていないほどだ。

朝田と過ごすこの日々は幸福で満たされているはずなのに、最後のピースが欠けているような気がして、不思議とただ虚しかつた。

いつものように食事を終え、ゆつたりとした時間を過ごす。

朝田はあれ以来大きな発作を起こしていない。

穏やかで平和な日々。何も問題なんてないはずなのに、胸中にあるしこりは消えないでいた。

まるで泥の中で呼吸をしているような閉塞感が、四六時中付き纏うのだ。

どうしたら開放されるのか、と考え始めたところで、疑問が浮かぶ。

なんで幸せに暮らしているはずなのに、こんなにも息苦しいのだろうか。

突如。普段は沈黙を保っているスマホが震え出し、それを盾に不快な思考から逃げ出した。

ゼクからのメールだ。仕事はしばらく休むと伝えたはずなのだが。

『俺の部屋でサシの話がしたい。問題なければ連絡くれ』

ゼクの部屋とは勿論GGO内部の物だろう。

時間は持て余しているくらいだ、軽く話すくらいなら日付が変わることすらないだろ

う。

朝田に一言告げて、俺はアミユスファイアに積もつた埃を払い、電源ボタンに指を伸ばした。

前回の起動から、一ヶ月が経過していた。

「久しぶりであるなー、ゼク」

俺はそう言いながら、珍しく神妙な面持ちで琥珀色のグラスを傾けるゼクシードに軽く手を降つた。

公式にそう言われた訳ではないが、GGOプレイヤーの間では、SBCグロッケンは、二層構造ということにされている。

落書きだらけでゴミと砂塵の吹き溜まる、スラムに片足突っ込んだ、繁華街の下層。オレンジの街灯が、鏡のように磨かれた黒の道を常に照らす、居住区の上層。居住区にプレイヤーが住むには相当の量のクレジットが要求されるので、態々こここの

部屋を買おうという奇特な人間は少なかつた。

何せ、街のそちら中に自身のアイテムを安全に保管するための個人倉庫へのアクセス端末が配置されているので、レアアイテムの保管のセキュリティも問題はない。

家具を置いてオシャレなGGOライフ？

GGOにおいてオシャレとは銃をカスタムすることだ。

そういう事情があるので、部屋を買う利点はもう密談をする程度しかないのだ。それだつて、メールでいい気がするのだけれども。

「おう、久しぶり。まあなんだ、とりあえず死んでなくて良かつたよ」

「縁起でもない事言わんて欲しいのである」

「この業界じやあ珍しい話でもねえだろ。ダチが一ヶ月音信不通で仕事を休んでるのを心配するのは変か？ お？」

ゼクシードから伝わってくる静かな怒りは、俺を思つてのものだろう。

外出用のの顔文字仮面と都市迷彩マントを外し、目を合わせる。

視界にいるのは、何時ものおちやらけた三枚目ではない。

俺を真剣に心配して、怒つている友人だ。

「ごめん」

頭を下げる。ちょっと間を置いて、わしやわしやつと頭を搔く様な音が聞こえた。

「……いや、まあ……なんかこつちこそわりいな、お前にもお前の都合があるん、だろうし。ほら、頭上げろって」

その歯切れの悪さは不器用な思いやりの証左で、それがなんだか嬉しかった。

「それで？ 何があつたんだ？ 一ヶ月ログインサボるつてのは、ログイン代の三千円 ドブに捨てるどころか、俺達プロの稼ぎのことも考えると何万もドブに捨ててんだと」

流石に環境までは変わつてねえけど、と言つたところで彼の発言は終わり、会話の ターンは俺に回つた。

この一ヶ月ログインしなかつた理由。それは勿論、朝田の世話を付きつきりで焼いて いたからだ。

それが間違いだとは思つていない。が、しかし。何故か胸にしこりがあるのも、また 事実なのだ。

果たしてそれを、ネットゲームの知り合いに相談していいものなのだろうか。頭の血 が、轟々と音を立てながら加熱していく。

脣氣ではあるが、心が少しづつ削れていく感覚がある。

膨れ上がる不安と悩みを吐き出して、誰かにこの苦しみから開放して貰いたくて堪ら なかつた俺は結局、ネット倫理と恥をかなぐり捨てた。

「その、リアルの話も、めちゃくちや混じるんだけど」

「だから密談用の個室を用意したんだよ、トレソン君。話したくないなら俺は聞かない。でも、相談くらいには乗れると思うんだがな」

ゼクシードが気取った動きで仮想パネルを操作すると、彼が飲んでいるのと同じ種類であろうドリンクが虚空から量子の粒と共に現れる。琥珀の液体の上に氷の浮かぶそれは、いつも酒場で二人で飲む酒モドキだ。

一息に煽る。いつも通り不味く、こここのところ不安定続きの毎日を過ごす俺には、いつも通りのそれがありがたかった。

肩の力が程良くな抜けた今なら、動転せずに語れるだろう。
「じゃあ……話すけど、その前に」

「前に？」

「トレソン君は死ぬほどダサいであるよ」

「やつぱり？ 俺もそう思つてたんだよね」

軽口を叩いてから、俺はぽつりぽつりと、慎重に言葉を選びつつ、けれど、嘘だけはつかずに、目の前の友に、今まで隠し続けてきた、俺を取り巻く現実^{リアル}を語つていった。

朝田詩乃がシノンなのではないか、という仮定だけは隠したが。

「……という訳で……」

「なるほど。お前のそのツラ見るに自分でも話してゐるうちに理解したみてえだが、そ

りやお前のシスコンつぶりが足い引っ張つて空回りしてんだ。分かるかシスコン野郎」「むぐう……」

ぐうの音も出ない。むぐうの音が出た。

そんな俺を横目にゼクシードはグラスを置き、指を組んで滔々と語り始めた。それは珍しく、真剣な顔つきだった。

「結局、お前の妹分を守りたいっていう欲求と、自立させたいっていう理性がせめぎ合つて、限界まで疲弊したお前は欲求に身を任せることを選んだんだ」

「ゼク、あんまり傷口を抉る様な事は言わんでもほしいのである……」

「いや……よく頑張ったよ、お前は」

それまで苛烈でありながら理性的な言葉を機關銃のようにまくし立てていた彼が、急に俺を慰めた。

その相反した行動が俺の頭の中でぐるぐると回るも混ざることは無く、終わらない処理に脳が焼け付く。

何も考えたくない。

だから、次の言葉をただ求めた。同時に喚き散らす様はまるで母から餌を貰うのを待つ雛鳥だ。

正視出来ぬ滑稽さを晒している自覚がありながら、それでも言葉の濁流は止められな

かつた。

「俺は頑張れちゃねえよ！ ゼクの言つた通り俺はやること為す事全部空回りだ！ 俺の人生なんて全部中途半端の塊だ！ 料理人にもなれねえ！ 筋金入りのプロゲーマーにもなれねえ！ 後輩どころか妹一人も幸せにしてやれねえ……」

机にもたれ掛かるように俯く。

「俺は屑だ」

「トールよお、お前の年頃の時、俺はただ現実から逃げてVRゲームばつかやつてたただの引きこもりだつたんだぜ？ お前は立派にやつてるんだよ」

慰撫するような声が、俺の心の昏い炎に油を注いでいく。どうしようもなく喚き散らしたかつたが、それだけは臍気に残る理性で押さえつけた。

「いいか。俺はただのプロゲーマーなんだ。お偉い病院の先生でも、人生経験豊富な力ウンセラーでもなんでもねえ。だから、何でもかんでも的確なアドバイスは出来ねえ」
 すうっと息を吸うと、それまでのシリアルな雰囲気は何処へやら、素人のトランペツトのような騒がしさで、ゼクシードの怒濤の提案が始まった。

「まず後輩とは縁を切れ！ 多分メンヘラの地雷女だろ、知らねえけど！ そんでもつて妹分とはもう正式にくつつくか逆に思いつきり突き放せ！ んでもつて会うな！」

流石にそれが正しいとは思わないくらいの理性は残っていた。

「おう。俺はその二人のこと知らねえからな。まあ選択肢としてはナシじやあないだろうが、どうするかはお前が考えろ」

「言われないでもそうする」

「そんで、トール」

彼からすれば、顔も知らぬ他人より、こつちの方がよほど大事なのだろう。一区切りして、一文字一文字を噛みしめるように、口を開いた。

「これだけは絶対に後悔しないって保証してやる。お前はGGOに戻つてこい」

それは今までの付き合いからは想像できないほど、重い、重い響きだった。

「その腑抜けた二ートみてえなツラ見て一瞬で分かつたぞ。今やりてえこと、ねえんだろ？ GGOで暴れ回つてた時のお前はな、お前の眼は、もつとギラッギラしてたんだ。未来の絶望なんか知らねえ、一瞬一秒全てが宝だつていうツラだつたんだ」

「やりたい、こと……」

思えば。

俺の人生は朝田に捧げるのだと、そう信じ込んでいた。だから、俺がやりたいことなんて、一度も考えたことも無かつた。

けれど、それでは駄目だつたのだ。

自分の人生を歩む事を怠つたから、こんな無様を晒している。

「なあトール。俺達プロゲーマーつてのは一見綺羅びやかだが、半分賤業みたいな扱いを受けてる。社会的立場なんてゴミみたいなモンだし、ゲームが消えればおしまいだ。俺達は普通のゲーマーからすりや雲の上の存在だが、そうじやねえ。クソ不安定な雲の上に立つてるんだよ」

ゼクシードが自嘲気味に話した内容は、確かにプロゲーマーという職業の抱える闇を端的に、しかし確実に表している。

スポンサーの意向で、ゲームの調整で、それどころか、発言一つが炎上すれば、最悪選手生命が断たれる。

存在すら曖昧な雲の床。言い得て妙だと、俺は普段は隠された彼の知性の一端に感嘆した。

けどよ、と、そこから彼は続けた。

「自分の足でしつかり立つて、最高の眺めを堪能出来るんだ。雲の上にいる人間だけが見えるもの、お前も散々見て来たら?」

どのプレイヤーも知らない場所を探索する、自然と口角が上がつてしまふような高揚感。

名高い猛者に打ち勝った時の鳥肌が立つほどの全能感。

最強になつた

何より、B・O・B 優勝、その時に浴びた万雷の喝采。

俺の人生は灰色だつた。

何かに期待することもなく、ただ機械的に朝田を守る事のみを考えていた。

しかし、この荒野で、トーレントとして駆け抜けた思い出は全て、俺の記憶の中で一等色鮮やかに光り輝いている。

結局俺はこの、己の力が全ての荒野が好きだつたのだ。

「ゼク。我輩、やるべきことが分かつたである」

俺は郵便局での事件以来、色々な感情がぐちやぐちやに混ざつっていたのを、朝田への献身という形に変換して執着することで、全てに蓋をしていたのだ。

その蓋を開け放つ。

過去と決別し、未来を選び、掴み、歩む。

そうして初めて、俺の人生の止まつていた針が動き出すのだ。

「お、いつもの調子に戻つたか」

「今日何もかも吐き出して、やつと自分のやるべきことが分かつたのである。それに

……

「それに？」

「泥の中より、雲の方居心地が良さそうであるからな」

ゼクシードが首を傾げているが、そんなことがどうでも良くなるくらい、仮想世界の無味無臭の空気が肺腑に染み渡つた。

それらが細胞一つ一つに染み込み、全身が作り変えられ、何もかもが素晴らしく好転していくような感覚。

錯覚だろう。それでも、今この瞬間が、どうしようもなく愛おしかつた。

「ゼク」

「おう」

四十五度傾き、最敬礼。

「ありがとう」

「おう」

た。

所在無さげに視線を宙にやる彼が柄にもなく照れているのを見て、つい笑みが溢れ

「うおっ……！ やめろやめろ！ そのアバターで微笑まれるとホモになりそうだ！」

「そ……そんなに」

「おう。という訳で、そんな顔を生かした仕事がここにだな……」

なんと。俺を呼んだのは、商談込みだつたらしい。抜け目ないゼクシードらしいと言えばその通りだが、なんとなく格好の付かない男だ、と思つてしまつても、仕方なくは

ないだろうか。

「M M Oストリームつて番組の新コーナー、今週の勝ち組さんの初回ゲスト、反響があれば準レギュラーつて話でだな……」

「はあ……分かつた分かつた、聞くであるよ」

その後、日がとつぶりと暮れるまで、俺達はひたすらに語りあつた。
仕事の話も、友達との世間話それ以外も。

アミューズファイアを外すと、やはり隣で朝田がいつも通り読書に勤しんでいる。
その背中に、落ち着ききつた声色で問うた。
「朝田は、狙撃手のシノンなのか？」

振り向く。三日月のような笑みを浮かべて、

「やつと氣付いた？」

そう彼女は返した。

二筋の光明

初めて出会った時は、場所が悪かつた。
最新のダンジョンの最奥部、一步踏み出した足のせいで即死してもおかしくない極限
状態。

互いが生き残るので精一杯だつた。

だが、二度目に街で出会つた時は互いに自然体で、だからこそ疑念が生まれた。
来る日も来る日も、溶けない雪が積もるかのように、その疑念は少しづつ分厚さと嫌
な冷たさを増していき、やがて思考は凍り付く。
ずっと見ないようにしていた、逃げていたもの。
今から、俺はそれに正面から相対するのだ。

「シノンは」

「朝田」

呼び名を訂正してきた彼女は、さつきまで得体の知れない熱を帶びていたのが嘘だつ
たかのような、冬の谷底もかくやという、昏く、冷たい瞳をしていた。
「……朝田は、何時俺がトレントだつて知つたんだ？」 GGOプレイヤーとすら教え

ロールプレイ

てないし、そう簡単に分かるR·Pだつたとは思えないんだが」

「地下で出会つた時は、正直言つて分からなかつたわ。でもあの後、ヘカートを手にずっとその日のことを考えていたの。最後に送られた言葉のついでに、ね。そうしていたら、あの時出会つた重装プレイヤーの素が出た時の振る舞いが、なんとなく千晃くんに似てることに気付いたの」

なるほど、二度目に出会つた時の変わりようの原因はこれか。

彼女にとつて信頼出来る人と同じ匂いを嗅ぎつけて、無意識にガードを緩めていたのだ。

そこからはすぐに俺とトーレントを一致させる作業に入つたのだろう。

僅かでも手がかりを掴んだら、トーレント^{ゲーム内}と流千晃^{ゲーム外}のすり合わせをしていけば、同一人物かどうか程度のことならすぐに分かるはずだ。

「それに、普段の生活でそれとなくゲームの話を振つたら、千晃くんは快く答えてくれたもの。トーレントは千晃くんだつて、すぐに分かつたわ」

確かに長時間のフルダイブから戻つた時は、彼女からそれとなく仕事の調子を聞かれていた覚えがある。

「そういえばB·O·Bに参加する前に朝田のくれたエール、まるで俺がそれに参加するのを知つてゐるみたいだったな」

朝田には、B・O・Bについては一言も話していないというのに、だ。

「その時にはもう、確信してたもの」

シャツの下から、彼女の手が滑り込んでくる。

夏の気配も失せたというのに俺の体も朝田の手も汗ばんでいて、かなりの湿気を感じる。

「でも楽しくなつちやつたから、千晃くんが気付くのを待つてたの。けど、やつぱり鈍感ね。やつと気付くなんて」

アミューズフィアを片手で乱雑にどけて、朝田は俺の胸に跨がり、そして覆い被さった。彼女の長いまつ毛が俺の目に当たつてしまいそうなほどの中距離。そこまで近付いてしまうと、美貌だとかそんなものは気にならず。

よく知る人の体の形をした熱。どくんどくんと早刻みの心音。

何より、硝子細工のように美しい焦げ茶色の瞳。

瞳孔から虹彩へと広がる毛細血管はある種の規則的な紋様を描いていて、その美しさが、俺の心胆を力強く揺さぶつた。

まるで、雪の結晶のようだ、と。

これまで幾度も彼女の瞳を氷だとか雪に例えてきたが、それはやはり、間違いではな

かつた。

だが、それでも拒絶せねばならないのだ。

おもむろに起き上がり、必然朝田も俺の上から退いて、ベッドにぺたんと座り込む。そして俺は、告げた。

「ごめん。今のお前の思いを受け入れる訳には、いかないんだ」

友の助けによつて、答えは得た。俺は今、助けを求める手を払い除ける。

そして予想していた通り、みるみるうちに彼女の顔から色が抜けていくのであつた。わなわなと震える唇から紡がれるのは、力ずくで封じ込め続けて、遂に限界に達した

感情の濁流。

「……また気が変わったの？ 一月前の焼き直しね、まるで」

想像していたよりもその口調は冷静で、けれど、声が震えていた。

だが、一月前とは決定的な違いがあつた。

俺の決意はより固く、搖るぎ無いものと化している。

だから今度は、自分の思いの丈を余す事なく伝えられるのだ。

「前に言ったよな、俺が朝田の成長を邪魔してんじゃないかって。そしてそれをお前は否定した。朝田がどう思つているかは、朝田にしか分からぬ。だから、俺には朝田が間違つてると言う権利はない」

「だつたら……」

「だけど少なくとも、シノンの立ち姿は頼もしかったよ」

「あれは……あれは、仮想現実私じゃないわ。VRと現実は違う」

「違わないさ。配られたカードを手に、自分で感じて、考えて、行動する。現実と違うことなんて何も無いんだ」

そうだ。自分の心を何にも侵させること無く、自分の力で自由に振る舞える。だから俺は、プロになる程までにGGOに没頭した。

こうして改めて自分の事を見つめ直すと、どうしても避けることの出来ない感情が転がっている。

ここまで互いに心を開いて話すことなんて、今を逃したらもう一生無いのかも知れない。

この際だ、全て吐き出してしまえ。

「俺はシノンが好きだよ」

「なつ……にや……!?」

告白の言葉に、朝田はこれまで見た事もないくらいに動転している。

元々感情を表に出さない彼女がこうも狼狽えるのを見ると、妙な悪戯心が湧いてくるのを感じるが、今は見ないふりをする。

「凜々しい姿とか、獲物には容赦ない所とか、俺にちよつかいを出してくる所とか、諸々ひつくるめて全部好きだよ。これは完璧に初恋だ」

「そ……んなこと言つたって、誤魔化されりゆと思わないで！」

「誤魔化すも何も、本心だから」

「……！」

朝田は遂に言葉を捨てて、いつの間やら奪つた枕に顔をうずめたまま動かなくなってしまった。

耳は塞がつていながら、俺の言葉は多分届くだろう。

今から言う言葉こそが、告白なんかよりもずっと大事なことだから、これだけは聞き逃してほしくなかつた。

「だから、俺の手じやなくヘカートを握つて、自分はシノンだつて言い張れるようになつてくれ。お前には俺だけじやなくてあいつもついてるんだから。それだけは絶対に忘れないで欲しい」

言つてから気付いたが、最後の一言は必要なかつたのかもしれない。何故なら、

「……そんなの、私が一番分かつてるわ」

彼女が歩んできた道を、彼女自身が知らないはずは無いのだ。

たとえ見えていなかつたのだととしても、存在しなかつた事にはならない。

枕から顔を離し、胸元に抱き寄せ、何もかもを曝け出す様に、彼女は語る。

「約束して。私がシノンになれたら、ちゃんとした形でお付き合いしてくれるって。こんな歪な二人の生活じゃなくて、ちゃんと恋人らしいこと、するつて。約束してよ」

「ああ。約束する」

「本当に？」

「本当に」

「そう」

抱えていた枕を横において、俺を見据える彼女の目には、微かに、だが確実に力強い光があつた。

「次のB.O.Bまで……には、ちょっと自信ないけれど、もう少ししたら、きっとあなたの心を射止めた女になつて見せるから」

そう告げた朝田の顔からは、荒野の女狙撃手を思わせる雰囲気が既に漂つていた。

その後、彼女は何も言わず、脱力しきつて俺の膝を勝手に枕にした。

「私はね、ずっと前から千晃くんの事が好きだったのよ」

「うん」

中学に入つた頃だつたろうか、彼女から向けられるのが親愛から恋慕に変わつたのは。

「分かつての癖に、新川さんと仲良くしちゃって、私は気が気じやなかつたんだから」「うん」

朝田には悪いが、新川との関係について俺は何も後悔していない。

彼女は彼女できつと、今も助けを求めている。

「でももう、全部どうでもいいわ」

「どうして?」

「何処かの誰かさんが、進むべき道を教えてくれたから」

甘えるように頭を動かす彼女の頭をそつと撫でる。目と目が合うと、朝田はリラック
スしきつた顔でふにやりと笑つた。

迷走していた俺を助けてくれたゼクシード。全ての起点は彼だつた。

彼が俺を導き、俺が朝田を導いた。願わくば、その連鎖に新川も——と望むのは、きつ
と、贅沢なんかじやないはずだ。

しばらく寄り添つた後、俺は朝田を彼女の自室に返した。日はとつぱりと暮れ、切れ
かけの蛍光灯がバチバチと怪しげな音を鳴らす廊下が、一気に俺を現実に引き戻す。

「じゃあ私、しばらく千晃くんの所には行かないようにするから。千晃くんの側だと
……その……自分の欲に流されそうだから……」

尻すぼみの言葉を残したその晩から、朝田が俺の部屋に入り浸ることは無くなつた。

一月もべつたりくつついていたのが急に居なくなると、なんだか寂しさを感じてしまう。

だがそんな感傷に浸つてはいる場合ではない。
一刻も早くG G Oでの勘を取り戻し、第二回B・Bにて、前回覇者としての威厳を示さねばならないのだから。

まずはパツチイの店で装備を注文し、素材が必要ならダンジョンに潜り、勿論料理の鍛錬も欠かさず……

やる事は盛り沢山だ。

けれども、あの日、俺のベッドの彼女が座つていた場所が何となく温かい気がして、思い出す度に恥ずかしさに頬を搔いてしまうのであつた。

幕間：狩りの時間（前）

「よーパツチイ、やつてるであるかー」

「ワタシ様の店は年中無休だよ寝坊助」

「あんまりVRに入り浸るなであるよ暇人」

軋む扉を開けると、埃っぽさこそ以前より薄くなっている気がするものの、それ以外は前と変わらない内装のこじんまりした銃砲店。

そのカウンターに、こじんまりした店主が頬杖を付きながら軽口を叩く。

「アタシ様が暇人たあ聴き逃がせねえなあ！　お前の装備の修理に改造に補充に、十二月でもないのに走り回ってるんだぜ？」

「相変わらず我輩以外の客がいないのであるな」

「見る目のねえ客未満共が悪いのさ。お前の名前につられただけのミーハーに売る銃はねえのよ」

ケラケラと笑う店主の覇気に満ちた声は、一月留守にしても何も変わりなかつた。

まあ、そんなものだろう。たかが四週間留守にしたからといって、ガタガタ騒ぐ方がおかしいのだ。

「それなら、預けた装備の具合は万全なのであろうな？」

それを聞くと、待つてましたと言わんばかりに店主は足元の銃器保管庫からバジリスクを米俵のように腰を使って持ち上げ、カウンターの上にゆっくりと下ろした。それを受け取った俺はすぐさま機関部のメンテナンス用の蓋のロックを外し、内部まで状態を確認する。

所有者の俺には分かる。こいつは、新品だつた頃よりも磨き上げられている。

「一月もありやあ、ワタン様の腕ならオーバーホールを3回したつてお釣りが来るね！」

口振りとは裏腹に、彼の金の髪に点々と機械油の染みがある。

M9000番台は容貌に恵まれて荒野に降り立つ故に、基本的に身嗜みに気を使う。初めのうちはともかく、鏡を通して男とも女とも思えるような透き通る美貌を拝むのに慣れると、着飾らねば勿体無い、と思うようになるのだ。

それはパツチイとて例外ではないし、名が売れる前は俺もそうしていた。

そんな当たり前すらも放り出し、彼が本当に俺の為の仕事を全力で行つてくれたことが分かると、なんだかくすぐついたい気持ちが湧いてくる。

「修理だけじゃなく、チューンアップまでしてくれたのであるな」

機関部を一目見れば分かることだ。レーザーを生み出すこの銃の心臓部、収束レンズの色がガラスのような透明のものから、青みを帯びた水晶の様な代物になつていてる。

気品ある輝きは、高ニアアイテムの証だ。

「まあね。電磁収束レンズとプラズマコントローラを最新式にした上でワタシ様が調整して、冷却方式も空冷から超純度液体金属による水冷もどきに変えてある。出力が上がるのは勿論、冷却効率も上がってるから、よっぽどのことが無い限りオーバーヒートは起きないはず」

「バレルもチリ一つない。本当にいい仕事である」

「んでこっちが『SRM1216』ショットガン。一応銃身交換だけしてあるからな。パツチイお手製ショットシェルも揃えといたぞ。おまけに盾。お前の大好きな宇宙戦艦の装甲は使われてないけど、まあ砲撃とか機銃掃射でもされない限り弾けるだろ。P VPなら十二分だぜ」

「パーフェクトである、パツチイ」

確認もそここに、ストレージにバジリスクと『SRM1216』、そして大盾を収納する。盾と光学式LMGと実弾式ショットガンを全て加算してもなお、装備可能重量バラメータは余裕のある数値を示していた。

完璧な仕事だ。パツチイに気に入られたのは俺のGGO生活における最大級の幸運であることは間違いない。

「でもさ……その……」

だが、叩き出した結果に反し、彼の表情は曇っている。

「珍しく歯切れが悪いであるな、パツチイ」

「あー……うん。言うわ。お前、それ、性能が底上げされてるとはいえ、第一回のB o Bと同じ装備だろ？」

「で、あるが」

「……装備新調しないでさ、勝てんの？」

ゼクシードがトーレント専用の対策をしていないはずがない。

俺とパツチイの視線が交差した時、その言葉は寸分の遅れも無く俺の心に届いた。相手は俺の装備のスペックを諳んじられるデータツキー。まんまと罠にハマつた瞬間、何も出来ず一瞬で殺されるだろう。

俺の装甲を、物ともせず。

ゼクシードは、それが出来る。これは奴がどういうビルドだからとか、そういう話ではない。

奴ならやつてのけるという、実力への信頼。

だが、俺のカードは既に配られ、この場に揃つてしまつている。

唯一の幸いは、それらが砂一粒も付いていないくらいにピツカピカに磨き上げられていることだ。

「やるしかないであろう。超特別価格で最高の仕事をしてもらつた。これで文句を言う奴はGGOで長生き出来んである」

カウンターに体を預けながら銃の状態をチェックしていると、襟布を引っ掴まれて耳元で囁かれた。

「どころがさ、あるんだよ、儲け話が」

「儲け話?」

ぐいっと店主を押し戻し、ボロの椅子にどつかりと座つた。インベントリから瓶コラを二本取り出し、一本をパツチイに投げ渡す。

そのまま互いの持つ瓶を軽くぶつけて乾杯をすると、親指だけで栓を外し、吹き出す泡が収まつてから一気に飲む。

VRの酒が嫌いなパツチイとの乾杯はいつもこうなので、完全に流れ作業のような手際になつてしまつた。

飲み干したパツチイは足元に瓶を放ると、話を続けた。

「そう。砂漠フィールドの端っこに出てくるPKの正体を暴くのに大きめのスコードロンが動き出してな、懸賞金が掛かつてんだよ。生死不問、生け捕りならボーナスだ。お前ならその辺のPKなら余裕で勝てんだろう? その報酬でさ、全身換装までとはいかずとも、銃の新調とか、オーダーメイドの弾丸の融通くらいならやれるぜ?」

「魅力的な提案なのであるが、相性悪かつたら普通に負けるである。我輩、鈍重であるからして」

「……確かに」

多少落胆した様子のパツチイを尻目に、頭の中のデータベースを急ぎで探る。

砂漠でそんながつぽり稼げるような大捕物が行われる心当たりが、てんではないのだ。

「……この賞金首の呼称は？」

「さつき言つた通りキヤラネームは分からんから……皆蠍つて呼んでるな。やつぱスコーピオン使うのかね」

「あれは人気の銃であるからな！」

「アタシ様としては気に食わねえけどな！」

「パツチイ、マイナー銃好きも程々にするであるよ」

そう言えば、砂漠のユニークMOBの出現エリア近くでプレイヤーの死亡が多発していた……ような気がする。

てつきりそのユニークMOBに殺された間抜けかと思つていたが、どうやら真犯人がいたということらしい。

しかし、待ち伏せなど誰でもやるだろう。蟻とやらは、どうしてそこまでの恨みを買ったのだろうか。

「腑に落ちんであるな……懸賞金をかけたのはどこの誰か、分かるであるか？」

「…………ちと、耳貸せ」

憚りながらも彼が伝えた集団は、PKを積極的に行う一団であつた。マナーも弁えなければ素行も悪く、おまけに異常に喧嘩つ早い。人を撃つ理由を四六時中探しているような連中だ。

「なるほど、懸賞金の安さの理由はこれであるか。我輩はあくまでも釣り餌と」

「まあ……このスコードロンは確かに信用出来ないが……安いつつてもそれはリスクとりターンを見た時の話。報酬自体は纏まつた金ではあるだろ、トール。四の五の言つてる場合か？」

むしろ、賞金首よりもこいつらの方が余程疎まれてているのではなかろうか。

ともあれ、金がそこにあるのは確かだ。

それをどう掠め取るかを考えるのは、賞金首を生け捕りにしてからでも遅くはあるまい。

「ちょっと失礼、知り合いに声かけてみるである」

手早くフレンドリストを開き、オンライン状態の証である緑のランプが点灯している中で腕利きを探していく。

情報の少なさからして、確実に暗殺専門。

ガジェットを多く使うDEX型なら、もつと大きくコトを起こさないと元手すら帰つてこないはずだ。となると、AGI特化、もしくはAGI-ST型だろう。どちらにしろ、相当すばしつこいことは確かだ。鈍重な俺との相性は最悪である。装甲を貫通する特殊な弾丸で四方八方から蜂の巣にされれば、さしもの俺も死ぬというものだ。

と、言う訳で、仲間は皆俺を支援出来るくらいにはすばしつこいと嬉しい。

メンバーの選定を脳内で終えた俺は、フレンドリストを開き、オンラインになつているかどうかを確認していく。どうせ二ページ目すら埋まっていないのだ、全員念入りに確認してもすぐ終わる。

銃撃戦において、頭数は重要だ。何せ、余程のことがない限り多い方が勝つ。俺とゼクシードが、サトライザーにそうしたように。

例え格下でも二対一なら、もしかしたら負けるかもしれないが、大いに勝ちの目はある。

三対一なら、負けないとは言い切れないが、大概勝つ。

四対一なら、化け物以外なら確実に勝てる。

GGOで生計を立てているプロがニュービーの十字砲火を受けて殺される光景も、幾度か見た覚えがある。

用心に用心を重ねて困ることはない。

少なくとも、俺はこのまま一人で蠍狩りに乗り出すくらいなら、諦めてその辺のMO Bを狩る。

さて。気軽に声をかけられて、なんか暇そうで、強くて……
「オンラインは銃マスケティア士Xか……欲を言うならあと遊撃手が一人いればまず全滅せんであろうが、まあ悪くはないであるな」

「ピトフーリーは?」

「面を合わせるどころかメールもしたくねえのである」

「ハハハ！ 同感！」

俺が苦虫を噛み潰した様な顔をしたのとは対照的に、パツチイは手を叩いて笑つていた。

実はあるの毒鳥とは因縁がある……まあ、珍しい銃を持つてる奴は大概奴に声をかけられるから、面識があるくらいは珍しくはない。

だが、連絡先を交換して互いに迷宮に挑んだことがある人間は一握りだろう。正直なところ、危険に突つ込んでいつては暴れ回るピトフーリーの立ち回りは命がいくつあつても足りないので、あまり組みみたい相手ではないのだ。

腕は立つが、信頼性に欠ける。こいつに命は預けられない。

その点銃士Xは旧友であるし、腕も捨てたもんじゃない。

ついでにゼクシードもいれば完璧だが、そもそもこいつを誘つたらこの計画の意味はないくなる。

ちなみにパツチイは、上記のメンバー全員のことが嫌いだ。

理由は節操のない収集癖とか、遊びの一切ない武器選択とか、まあ、大体そんなところだ。

俺は彼女との待ち合わせ場所に向かうべく、パツチイの店を後にした。

「さて、気に入らないクライアントに気に入らない報酬額。せめて仲間はお気に入りを使わせてもらうである」

「お~い」

砂漠の隅、オアシス型の拠点に転送されると、俺はこれと決めた方向に向かつて、適

当に声をかけ始めた。

というのも、俺は銃士Xに待ち合わせる拠点の指定はされたが位置の指定はされておらず、何度も聞いても『着いたら待つて』の一点張り。

仕方なく、こうして声を上げている。

人の疎らなこの拠点だとこの声もガヤにかき消されず、夜空に虚しく溶けていく。向けられるのは奇異の視線。

「声を上げるのは無駄であるなあ」

溜息を一つつき、その辺のヤシの木に寄りかかった。

戦闘用の装備は全てストレージの中、今の俺は街を歩く時の装いだ。

顔隠しのデジタル式フェイスマーク仮面以外、リアルで外を歩いていても問題ないと言い切れるほどの軽装があるので、寄りかかつた木がへし折れる事はないのであつた。言われた通り、黙つて待つていると、待ち人の姿が次第に見えてきた。

ファンタジー系のゲームに出ている雪精を思わせる真白の肌を、ビキニと見まごう露 出度の装備で惜しげも無く晒している。

俺のアバターとそつくりの銀髪がはためき、黄昏の光にチカチカと瞬いていた。

「マスケ」

軽く手を上げて会釈すると、先程までクールビューティーの体现者だったのが嘘のよ

うに、らんらんと目を輝かせながら、タツクルの姿勢で突っ込んできた。

「メトル！ サフエロン！」

「だー！ 抱きつくな！ 尻を撫でるな！ 嘸ぐな！ そしてフランス語だけで喋るなー！ ……である！」

メトル。フランス語で先生だか師匠だか、確かにそんな意味の言葉。

何を隠そうこの銃士Xは、俺が手づからGGOにおけるソロ活動のいろはを叩きこんだ弟子のような存在である。

つまり、俺がM9000番であることを知っている。

話は変わるが、彼女は可愛いものが大好きなのである。

……少々、困るほどに。

「久し振りにメトルと会ったんだから、メトルニウムを補給しないと……」

「相変わらず何を言つてるとか分からぬいであるな」

「あら、これぐらいのフランス語が混ざつてもメトルは分かるでしよう？」

「いや言語の壁とは全く別の意味であるが……」

約170センチの女性が小さいアバターの腹に顔を埋めている様子は、あまりにも人目を引く。

俺は彼女がはふうと一心地ついたのを見逃さず、裏路地に引き込んだ。

「改めて、久しぶりね」

「うむ、久しぶりであるな」

軽く握手を交わすと、夏場のアイスクリームの如く溶けて緩みきつっていた顔が精悍さを取り戻していく。

このフランスから日本にやつてきた変態は、俺が知る中ではトップクラスに優れたソロの狙撃手である。

フットワークが軽く、冷静な状況判断に優れ、一射毎に音も無く狙撃地点から消え去る。

俺が仕込んだ技術を更に狙撃手としてのスキルに発展させていく。
守破離の離の段階に達しているのだ。

「それで、目的の賞金首はどちらにいらっしゃるのかしら？」

愛用の『SR-25』を肩に担ぎ、自信満々な様子で彼女は訪ねた。

彼女のライフルは全長が短く、取り回しに銃身が邪魔になることがない。
射撃の度に動き回る彼女にはうつてつけの装備である。

その扱い易さ故に愛用者も多く、だからこそ彼女にパツチイはいい顔をしないのだ

が。

閑話休題。

クライアントに渡されたマップデータを共有すると、お互いのマップの同じ位置に赤い円が出現する。

この円が、標的のおおよその位置を示しているのだ。

「この辺らしいであるよ」

「ダナル。確かに隠れるにはいい土地ね」

「我輩が思うに、フィールドm o bが湧くのを同時に監視出来る位置に陣取ると思うのであるな。こいつ、罠狩りも並行してやってそうであるよ」

「となると……この辺と……あと、ターゲットの周りにも対人罠がありそうだね」

「となるとやつぱり、地雷の一個や二個踏んでも問題ない我輩が偵察役であるな。マスケにはスポット一無しの仕事をさせて悪いであるが」

「私がそれで問題ないのは、貴方が一番分かつてゐるでしょ？」

「わははー」

やんやんやと言ひながら、二人でマップに情報を書き加えていく。

大方の情報を纏め終わると、どちらからともなく、何も言うことなく、一直線に狩り場へと歩き出す。

空に浮かぶ不变の黄昏の光に照らされて伸びる影を見ると、なんとなく、首筋のあたりがざわついてしまう。

愛銃をしつかりと握り締めて、不意に過る不安を集中に変えた。

実際のところ、目的地は街からそこまで遠くはない。

歩いていつても数時間で往復出来る距離だ。

「マスケ、ここで待機。いざという時には援護を頼むである」

「任せて」

彼女は適当な岩の隙間に腹ばいになり、保護色の布を頭から被つた。地形が味方している。余程の事がない限り、遠距離から彼女が発見されることはないとずだ。

この辺りは岩と朽ちた戦車が点々と見えるばかりの殺風景なマップで、必然、隠れる場所は限られる。

M O B のポップする様を監視出来るような、という条件が加えられれば、合致するのは数ヶ所しかない。

俺は候補地の中から、以前大規模の商会系スコードロンの護衛を請け負った時に知つた、M O B に感知されづらい、即ち人通りの多い道に近い地点を目指していた。

人もM O B も狩ろうとする欲張りの好きそうな場所だ。奴はきっとここにいる。

目的地が見えてくると、想定していたような地雷原はなく、人の気配すらない。

これは見誤ったか。そう思考した、その刹那。

視界が紅に染まつた。

反射的に盾を括り付けてある左腕で顔を覆うと、暴風雨がトタン屋根を殴りつけるかのような衝撃、次いで轟音に見舞われた。

奇襲だ。しかも、相当手際が良い。並の体力のプレイヤーがこんな集中砲火を頭に全て受け入れたら、HPゲージが最大値の三倍は余裕で消し飛ぶだろう。

「だが盾の前には無力であるな」

「うえええ!? そんなの聞いてないよ!」

予想より随分と可愛らしい声は、言葉を紡ぎ終わる前に遠ざかっていく。

なるほど、随分とAGIに振っているらしい。それを捨てていて俺ではとても追いつけまい。

無線機を取り出し、起動する。周波数は事前に決めて合わせてある。

「マスケ、蠍が逃げたのである。姿が見えなかつたからして、熱探知モモで探してほしいのである」

「ラジャー。全部予定通りつて訳ね。所定の岩場に誘い込むわ」

「任せたのである」

マスケのやつ、何故か英語も混ぜるんだよなあ。

香気にそんなことを思いつつ、頼もしい狙撃手の銃声をBGMに、狩り場へえつちら

おつちらと走る。

この辺りは複雑に岩が重なり合い、扉のない家のようなになっている場所がある。

そこ以外に狙撃から逃れられるような場所はない。となれば、術中と分かつていようがいまいが、飛び込むしかないのだ。

生き物の気配を感じさせないほどシンとした岩の屋根の下に、ズケズケと入り込む……なんてリスクキーな真似をする訳もなく。

奥の方に白リン手榴弾を投げ込み、向こう側の出口を炎の壁で塞ぎ、手前側にフランシュバンを転がした。

熱。音。光。三種類の過激に過ぎる刺激から逃れるために、獲物は自分から飛び出してくるのである。

「わー！ わー！ ゴメンナさいー！」

「はい、確保。蟻というより兎であるな」

転がり出たところに首根っこを掴まれて、ピーピーと喚きじたじた暴れる、容姿も振る舞いも子供な賞金首は全身が煤けたピンク色をしていて、なるほどこれでは砂塵舞う岩場では見えるはずもない、という納得を与えてくれた。

幕間：狩りの時間（後）

とつ捕まえた兎の武装を解除させ、手足を縛り、布を囁ませ、目隠しを巻く。出てきたのはスコーピオンが二丁だけ。本当に奇襲による暗殺だけに特化していたのだろう。

「これだけ尖った戦法を取るのなら、通用しなかつた場合の対処法まで考えておくべきであつたであるな？」

「むー！　むー！」

芋虫に教導めいた話をしながら、俺は相方の到着を待つた。

このゲームで奇襲をするならステルススキルをもつと向上させ、武器も小口径の拳銃弾ではなく、アーマーを貫通出来る小口径高速弾を発射出来る銃を使うべし。

逃げる時の為に、事前に簡易的な代物で良いので罠を張るべし。

狙撃手に狙われたら安易に屋根の下に逃げ込むのではなく、ジグザグに走つて逃げるべし。

そのようなことを返事も聞かずにクドクドと語つているうちに、後ろから砂を踏みしめる音が聞こえてきた。おそらくマスケだろう。

この話を締めたら、件のスコードロンとの商談に移ることにしよう。

「であるからして、GGOにおいて狙撃手が本当に嫌がるのは遮蔽物に隠れられることではなく、ちょこまかと動くことにより狙いを定めさせず、距離を稼いでそのまま逃げられる事なのである。それをふまえてこの状況ならどうすれば良かつたのかというとあるな……」

「メトル！ 縛り上げた人間にウンチクを語るのは悪趣味なんじやないかな？」

「マスケ。これは次回に活かせつてことなのである。このまま何も分からずに引き渡されたらGGO引退しちゃうかもしれないものであるよ？」

「メトルってやつぱり変な人だね」

「カワイイ狂いに言われたくはないのであるが」

俺の反論に思い出したかのように手を叩き、彼女は話題を大きく切り替えた。

「そうそう、そこのおチビちゃんの顔が気になるんだ。サーモグラフィーだと輪郭しか分からなからね。目隠しを外しても？」

「構わんのである」

待ち切れないと行つた様子で目隠しを剥ぎ取ると、煮られる直前の兎のような眼を潤ませて微かに震えている賞金首の姿を、マスケはようやく至近距離で視認した。

「ブテイヽ!!!!」

急な叫び声に、俺と賞金首は同時にビクリと体を震わせた。

「メトル！ こんなプレティな子を縛り上げるなんて最低だよ！」

「は、はあ……申し訳ないのである」

「いい仕事してるね！」

「は？」

遂に狂つたのだろうか。それともあまりの衝撃に日本語を忘れ去つたのだろうか。そんなことすら思えてしまうような痴態。

しかしこれがクールビューティーで高いプレイヤー人気を誇るソロプレイヤー、銃士Xの本性であると知つてゐる俺は、日頃から完全に共感することを放棄していた。

「まあとりあえず、こいつをさつさと引き渡して金を少しでも多くかつ剥ぐであるよ」「むぐう……」

観念したように、兎がもう一度呻いた。

「はいはい、仕事は忘れてないよ。さつさとクライアントのところに行こうか」

「うむ。ちよつくら街から四駆を持つてくるである。マスケはその賞金首を頼んだであるよ」

「任せて！ いくらでも見てるから！」

引っ掴んでいた兎はマスケに引き取られた。おそらくそのまま愛でられながら、俺が

帰つてくる時を待つのだろう。

その予測は当たつていたようで、四駆でマスケと兎を拾つた時、色々と拘束を緩められていた。

再度拘束し直す時に見た顔も緩んでいたのだが、一体マスケは何をしたのだろうか。聞いたとしても、彼女は普通に愛でてただけ、と言い張つた。

小さくて可愛いと褒めちぎつていただけだ、と。

そう答える間も、彼女はひたすらに賞金首のほっぺたをぷにぷに、ぷにぶにと触り続けていた。

「マスケ……そろそろやめないとハラスメントコードに引っかかるんじゃないの？」
うか

「大丈夫。引き際は弁えてるから」

「戦場で聞きたかったであるなあ、その言葉」

言いつつ、四駆のエンジンを止めた。

取引場所に着いたのだ。

相手方には交渉役とおぼしき身なりの良い非武装の男が一人、タバコをくゆらせている。

その側にAKの類を握る護衛が二人。彼等の装甲車を見る限り、いざ戦闘となれば、

どう少なく見積もつても後四人は出てくるだろう。

だがそれはあくまでも戦闘になれば、の話であり、この商談には関係のないことだ。片手に件の賞金首を抱えて車から降りると、男が口を開いた。

「それが例の蠍ですか？」

「応とも」

そう答えると、彼はサングラスの奥の鋭い目を細めて愉快そうに笑った。

「これが素性の全く知れないアサシンとして恐れられた蠍か！　いや傑作だなあ！　百五十センチもないんじゃないかな？」　はつはつは……」

笑い声だけが木霊すらすることなく砂の海に消えていく。

一頻り笑つた後、唐突に彼は侮蔑の笑みからビジネススマイルに表情を変え、慣れた様子で話を始めた。

「ああ、挨拶が遅れて申し訳ありません。私はコードロン『デュース・デュース』渉外担当をさせて頂いてます、いのつちと申します。以後お見知り置きを」

「トレントである」

「ええ、存じております。第一回B.O.Bの覇者にして、隠者達のコードロン『ナインボール』の構成員……」

「うちのスコードロンは関係ないであろう」

こいつ、この取引に俺の所属するスコードロンまで巻き込もうとしてきやがった。隙あらば戦争を仕掛けようとしてくる危険な集団という評判に違いはないらしい。人好きのする笑みを浮かべているが、この男、かなりの狂犬だ。

「そうですか、いやはやこれは失礼。では早速商談の話に移りましようか！」

パン、と拍手を一つして、話題を切り替える。

「その賞金首の身柄、十五万クレジットで引き取りましょう。どうです？」

「論外であるな。それは元々提示されていた額。本来の囮としての役目どころか、ここに傷一つなく生け捕りにしているのだから、その分ボーナスを要求するのである。三十

「いえいえ、我々としては囮などとは一度も言つておりません。実行するあなた方がどう感じたか、までは契約の外です。とはいえ、傷一つなく、というのは誇張表現では無いようですね……致し方ありません、二十出しましよう」

このあたりが潮時だろう。これ以上長引かせたら、交渉が破談となり銃を向けてくるやも知れない。

「あい分かつた、交渉成立なのである」

「おや、私としてはもう少し話していたかつたのですが……」

「そうやつて誰でも口車に乗せられると思つたら大間違いであるよ」

「はは、手厳しい」

俺はそう言いながら、最速の操作でクレジット取引を済ませた。

なおも毒気の抜けた笑みを浮かべる男だが、こいつのペースに乗せられたが最後、デュース・デュースの構成員共と思いつきりドンパチやる羽目になる。

リアルでアメリカ人が庭で安い22口径弾をじやんじやん撃つと同じように、ヴァーチャルでも弾丸を撃ちまくりたい。リアルでは空き缶や壊れたパソコンが関の山だが、システムが許容するのであれば人を撃つた方が楽しいに決まっている。

そうと決まれば、あちらこちらで好き放題撃ちまくろうじゃないか！

そんな過激な思想を持つスコードロン、デュース・デュース。

彼等は自然な振る舞いで殺し、奪い、戦争をし、当たり前のように嫌われた。

GGOではPvPが推奨されてはいるが、狂犬が人気者になれるほど狂った場所でもないのだ。

そんな連中とは関わりを持つ事自体がリスク。奴が何か次の能書きを垂れる前に踵を返し、四駆に向かう。

その判断はあまりにも遅く、或いは、交渉役の男が巧かつた。

「そうそう。あの賞金首ですがね、しばらく我々で玩具にしようかなと。もちろんこのゲームは様々な倫理コードが存在しますから、それらに抵触しない範囲でね」

「……は？」

それを耳にした途端、足に回す血液が頭に全て集中したかのように足が止まり、激情が湧いた。

なおも不快な声は続く。

「装備を見る限りアレは相当足が早いようですから、うちの者の作つた迷路の中に放り込んで、上から射撃でもしましようか。或いはちよつと古風ですが、金網に電流を走らせて逃げられないようにした上でうちの者と延々戦つてもらう、とか。嗚呼、武器はもう貴方に奪われたんでしたつけ？」彼女もお可哀想に……」

分かつている。こいつの身振り手振り、口調は、俺に手を出させる為に、わざと苛立ちを誘うようにしているのだ。こいつらが実際にそのような凶行に及ぶ事はないだろう。

如何に倫理コードが頼りない代物とは言えど、そこまで悪質な行為は即座に取り締まられるはずだ。

理解はしている。だがしかし、脳裏にどうしても朝田詩乃がちらつき、震える兎娘と重なっていく。

泣く声が、嘲笑う声が、罵倒の語句が、脳内で反響する。

そんな時、俺は何時だつて、暴力による解決が何を引き起こすか分かつていながら手

を出した。

「ああ失礼、話題が逸れました。何が言いたいかと申しますと、意外に思われるかもしれません、これ、両方共に通常の戦闘行為扱いなんですよ！　いやあ、面白いですねえー！」

高校になつてからとんとやらなくなつたそれを、俺はまた繰り返す。

相手の掌の上であることを理解しながら、それでも踊らなければ、自分を保てない時がある。

俺にとつての激情とは、まさにそういうものであつた。

「言いたい事はそれだけか？」

「ええ、それだけの話です」

レンはそのまま商談が進むものだと思っていたので、双方が同時に銃を抜いて心底驚いた。

彼女を拉致した全身鎧の人、トーレントの光学式マシンガン、PLCバジリスクは重く、既に構えられていた護衛のライフルに先んじて動かせない。しかし、それに動じた様子はなく、実弾を全身で受けながらマシンガンの引き金を引いた。

豆鉄砲の憐れな程に微かな鳴き声を搔き消すかのように、バジリスクが唸りを上げる。

爆発音と勘違いしそうになる発砲音が戦場を支配し、無数の捻くれたレーザーで戦場が薙ぎ払われた。

だが、音の激しさに反して敵は健在だった。ボロクズのように破壊された車両だけが、先程の咆哮の証となつていた。

「陣を組め！ 急げ！」

「作戦通りに行動しろよ！」

「了解！」

その鉄屑から、何人もの精兵が蜘蛛の子を散らすように散開した。その腰に輝いているのは、高級光学防御ファイールド。

対人戦で光学銃を使う奇人はそうはない。光学銃の対策なんて、適當な防御ファイールドを買えば済んでしまうからだ。

だが、彼等の腰にあるのは、それらとは比較にならない程値段と性能の高い機種。明らかに、始めからバジリスクを持ったトーレントと戦うことを想定した装備だ。
「クソッ……メタられたのである」

非常に不利な戦況だが、彼に作戦を練る時間は残されていない。

レンはそんな彼等の迫力に圧倒されて半ば放心していたが、土煙が晴れないうちに、車両の残骸から乱暴に拾い上げられたので、意識を取り戻した。

その瞬間、全身鎧の男に向けられたライフルの掃射に巻き込まれたので、レンはひたすら、ただひたすらに私が撃たれませんように、と祈り続けた。いくら撃たれても平気そうにしているこの男とは違つて、彼女の装甲はペラつペラの紙なのだから、当然の思考だろう。

岩場に逃げ込む間、幸いにしてレンに弾丸がジャストミートすることはなく、帽子を掠めた程度で済んだ。

「むんーー！　むーー！」

トーレントの腕から開放され、レンは何とか自力で脱出しよごろごろ転がつていたが、そんなことでそんなことで外れるようなら拘束の意味は無い。

トーレントが猿轡と繩を外してやると、深呼吸して束の間の自由を喜んだが、彼の姿を見て現実に引き戻され、体が石のようになってしまった。

「トツ……トーレントさん!?　今度は私をどうするおつもりですか!?」

「いや、正直ここまで大事になるとは思つてなかつたのであるよ。いや、ホントトーレントの大きな手で体から土を払われる度に、心なしか大きな手から優しさを感じ、怯えと震えが段々と落ち着いていくのが、レンには分かつた。

「あ、いつまでも兔さんでは不便であるな。お名前は？」

「あ、えと、レンです。レンって言います」

考えてみれば、レンのことを小さい可愛いと褒めちぎつてくれたマスケという女性とも、目の前のトーレントとも、一言も言葉を交わしていないという事実に気付いて、彼女は、改めて名乗つた。

「よーしレン殿。今から我輩と、君と、マスケ……君を猫可愛がりしてた奴であるな。その三人で、アイツらを皆殺しにするであるよ」

「皆殺しつて……状況が分かつて言つてるんですか!? 向こうには六人もいるし……」

「そのうち増援で十二は増えるであろうなあ」

「合計十八人!? ちょっと！ トーレントさん、私丸腰なんですよ！ どうしろつて言うんですかあ！」

止まない銃弾の雨に狼狽えるレンに、やつぱり全く動じていない彼は一丁の銃とマガジンを数本、それと、真っ黒で小さなカーボンナイフを手渡した。

『PP-2000』サブマシンガン。これはさつき説明した、アーマーを貫通する為の弾を使うサブマシンガンなのである。スコープオンと重さは変わらず、装甲貫徹力は高く。……お値段も高く。今ならナイフもつけるであるよ

「えつ、これ高いんですか？ いいんですか？」

「我輩、他にも色々持つてるのである。それだけが取り柄であるからして」「じゃあ……お言葉に甘えます」

それは、アサルトライフルの前半分をちよん切つて、ピストルみたいな形にしたように見える奇妙な形の銃だつた。

本当にこんな変な銃が頼りになるのだろうか。そんな不安がたちどころにレンの胸中で膨れ上がつたが、素手よりはマシである。

彼女にとつて見慣れない、光学銃と言われても納得してしまいそうなPP—20000をあちこち触つて、なんとか射撃とりロードする方法を理解しようとしていたその時、トレントは、岩陰からMP5Kで応戦しながら、もう一人の仲間に無線を飛ばしていた。

「へイ、マスケ！ 聞こえるであるか!?」

『感度良好！ オーダーをどうぞ、メトル？』

「こつちに目を引き付けるから、遊撃で数を減らして欲しいのである！ 得意であろう！?』

『そりやもう、一番！』

レンにとつて聞き覚えのある声が無線の先から聞こえたが、あつという間に切れてしまつた。

GGOの熟練プレイヤーとは皆が皆こうも決断力に優れているのか。レンはそれにプレイヤーを倒し慣れたつもりだったが、本物を見ると、自分が物凄くちっぽけに感じた。

「レン殿」

「あ、はい！」

彼の咳払い現実に引き戻され、背筋をピンとする。

「敵はレン殿が、最初の乱痴気騒ぎで廃車の下敷きになつて死んだと思っている確率が非常に高いのである。ましてや、武装して潜伏しているなんて考えてもいない。なんならレン殿の高いステルス能力のからくりにも気付いていない」

「そんな都合良いくくな……」

「都合良いいさせるのが、我輩の仕事であるからして。そこは任せてほしいのである」
 ドンと胸を叩くトレント。どうしたつて彼に頼るしかレンに選択肢はなく、異論を唱えようもない。

「我輩が砂埃を徹底的に舞い上がらせながら戦いつつ、敵陣を崩す。そこでレン殿が行けそうだな、と思つたところからさつき渡した銃とナイフで始末する。当然敵は大わらわ、並行してマスケが処理して勝ちである。何か質問は？」

「はい！」

「はいレン殿、時間切れ。ほら、行くであるよ～」

「お、横暴だー!?」

レンとしては色んな不安と疑問が山程あつたのだが、それを聞くことなく彼は彼女を背負うようにして、射線の雨の中に躍り出た。

「おい、亀がやつと出てきたぞ！」

「撃て、撃て！」

「わわわわわ……！　これ本当に大丈夫なんですか!?」

「小雨であるな」

レンは自分の耳を疑つた。こんな量の弾に晒されたら、自分なら1秒足らずで死んでしまう！

「よし、敵陣を自陣にひっくり返す、である」

結局彼は全身で弾丸を受け止めながらもピンを抜き、敵陣ではなく、砂の積もつた場所に手榴弾を纏めて数個放つた。

「おいおいトレント、あんまりメットがデカいもんだからグレネードも投げられねえのか？」

「なあにお前等の弾よりや良く当たるであるよ」

「死ね！」

「はつはつは」

発破した途端言葉の応酬は遮られ、この辺りに吹き続ける風が宙に舞う砂を空に連れて行く。

そしてこの辺りで常に吹いている風、つむじ風というには少し大袈裟だが、それに巻き上げられ、一帯を砂で視界を遮るようにしてしまった。

「よし、レン殿。出番であるよ」

「ええい、ままよー！」

レンは背中から飛び出して、砂塵の中に飛び込んだ。慣れ親しんだ、身を隠してくれる心強い風だ。

これなら、いける。

彼女は一番近い敵の背中目掛けて引き金を引いた。すると、想像していたよりもずっと早く、それこそ相手がやつと撃たれた事に気付くかどうか、という速度で、ポリゴンの体が消し飛んでしまった。

「うわあ……この子、強いんだ。トーレントさんが高いつて言うだけはあるなあ……私はとても買えないんだろうけど」

彼女の小さい片手でも扱えてしまうのに、固そうなボディアーマーを物ともしないのだから、徹甲弾の実用性たるや大したものだ。燃費については、考えない事にした。

加えて、他の敵に気付かれそうになつた時には、その敵の頭が吹つ飛んでしまう。きつとあの長い銃を持った、何故かビキニを着ている人の仕業だ。トーレントさんは確かに、マスケと呼んでいたか。

周りを見ると、倒した覚えのない敵の倒れた痕跡が既にいくつかある。

「うん、決めた。あの一人の敵にはならないようにしてやる。そうしよう」

レンはそう誓いつつ、次の獲物に忍び寄る。

そういうえば、自分はどうにかなりそうだけれども、トーレントさんの方はどうなのだろうか。

心配するだけ無駄と思いつつ、彼女はつい目線を寄越した。

見えたのは、二人の男が目にも留まらぬ格闘戦をしている光景。片方は勿論全身鎧、もう片方は、さつき恐ろしげな事を言つていたリーダー格の男だ。

軽装を生かした機動力での突進。その勢いを生かして、トーレントは男の服を引っ掴んで弧を描きながら地面に叩きつけていた。

「どつせい！」

「うおっ……！」

「だめだ、まだ早い！」

マウントポジションを取るトーレントを見て、レンは、そう叫びそうになる声をなん

とか殺した。

「いやあ、流石ですね……私程度では到底叶いそうにない。ですが、これなら?」

さつきまでなら、下手に横槍を入れればどつちに攻撃が当たるか分からなかつた。しかし、馬乗りになつてゐる今なら別だ。

合図も無しに、丁度増援に來た数人がトーレントに向かつて撃ち始める。

一刻も早く止める為、レンはまず目の前の敵を仕留めて、増援の処理に向かつた。実際の増援は十人もおらず、あれはあくまで最悪を想定した数だったということを、安堵しつつ理解した。

一人、また一人と、銃を使つたり、時に飛び掛かつてナイフで首を掻き斬つたりして、確実に数を減らしていく。

「おい！ 誰かいるぞ！」

「狙撃手以外にか!?」

「構うな！ トーレントを殺さねえとどうにもならねえぞ！」

ここまでしてやつと注意を逸らせたが、それでもトーレントを狙う敵がいるという事実に、レンは寒気が走つた。一体何がそこまで駆り立てるのか。

しかし、こちらを警戒している敵がいるのも事実。それを気にしてレンが攻めあぐねているうちに、あつという間の三連続の狙撃で、遂に増援が残らず消えてしまつた。

「ふう、やつと静かになつたであるな」

トーレントは損耗激しい鎧をインベントリにしまい、銀の髪を風に靡かせ、熟れた葡萄を思わせる深い深い紫の瞳を爛々と輝かせた。

「さて、これで我輩の餌としての仕事は終わりなのであるが……貴方がまだ生きている」「いやあ、ここまでされでは私もどうしようもありませんよ。文字通り、手も足も出ませんからね」

「指先だけでも自由にしたら、メールでもなんでも飛ばしてまた増援を呼ぶであろう?」「いやはや、違いない」

打つて変わつて風の音だけが響く場所で、二人の声が良く通る。

殺し合いの最中にニコニコしながら話し出す二人の心境が、レンには理解できなかつた。敵を倒す楽しみなら、共感出来る。彼女だつて、卑怯ともとれる待ち伏せで何人も屠つってきたのだから。

しかし、笑えるほどの余裕を持つての戦いは、レンにとつて想像の埒外だつた。

「さて、私が死ぬ前に一つ教えて頂けますか？　なぜ貴方があれほどの銃弾を受けても、反射的にすら怯まないのか」

それはレンにとつての疑問でもあつた。

この問答の最中にマスケさんが狙撃をしませんように、と祈る。先程の神業を見てし

まつたら、今にもそれが再演されそうでならなかつたのだ。幸いにして今は、その様子はない。

「所詮偽の体力が削られるだけ、と言えば、簡単に聞こえる。しかし誰だつて実際に敵意がぶつけられるのを目で見て体で感じれば、本能が警鐘を鳴らすのです。私だつてそう。なのに貴方はそうじやない」

「なんだ、頭では理解しているではないか」

「などと？」

「所詮偽の体力が削られるだけ」

ここで初めて、男の微笑みが消えた。言うは易し行うは難しを地で行く目の前の存在に、心底驚いている様子だつた。

数瞬で仮面を取り戻した男は、また舌を回す。

「なるほど、私も大概だと思っていたが、貴方の方が一回りイカれているらしい。負けるのも当然か」

話は済んだと言わんばかりに、天を見上げて脱力する男に向かつて、バジリスクがもう一度唸りを上げた。

「一通り片付けたであるな」

わざと最後まで生かしていた男にトドメを刺して、辺りを見回す。索敵スキルには何も検知されていない。光学迷彩でも使われていない限り、この辺りに敵はいないということだ。

「おーい、レン殿！ 無事であるかー？」

「あっ、はーい。こっちですー、無事です！」

「マスケ、そつちは？」

『良くなかった、二、三発外しちやつたから』

『随分元気そうであるな』

砂嵐で姿は見えないが、大事は無さそうなレンと、姿は見えないが随分余裕そうなマスケの声を聞き取った。

『そういうメトルが、一番撃たれてるでしょ？ どうせケロツとしてるんだろうけど、分かつても不安なんだから』

そうは言うが、VIT極振りの恩恵で、体力には相当の余裕がある。装甲服も歩く戦車と揶揄される程の堅牢さだと、彼女は知っているはずだ。

それを口にすると、そうじやなくて、と彼女は返した。

『メトル、本当にあれだけ撃たれて怖くないの？』

確かにGGOはこと射撃に関しては異様に拘つているが、撃たれる衝撃や音が完璧に再現されたりはしない。そんなことをすれば、PTSD患者続出で即発売禁止だろう。

それでも爆竹に体ごと突っ込むようなものではあるけれど、リアルのそれには程遠い。

本当に、本当に程遠い、左手も疼きすらしない紛い物。

もちろんそんな事を説明する訳にもいかないから、いつものように曖昧に笑った。そうする以外の選択肢を、俺は選んだことが無かつた。

圧倒的人数不利の戦場で勝つたにも関わらず、儲けとしては結局、消耗が少ない分素直にモブを狩っていた方がマシという、まさに骨折り損のくたびれ儲けの有様だつた。レンに貸したPP2000は返して貰つたし、見かねたマスケから投げ銭までされたが、莫大な最新式装甲服の代金には届かない。

「どうしたらいいんだろうなあ、パツチイ」
 「ワタシ様に聞くなよな……」

行きつけだったバーにはもう顔が売れてしまつてるので行く気にならず、パツチイの店にいつものラムネより一等上等な奴を仕入れてもらって、その辺の椅子とテーブルで一杯やる、というのが、すっかり習慣になつてしまつた。

銃砲店で酒飲んでダラダラしている俺にパツチイはいつも怪訝な目を向けるが、俺がほぼ唯一のお得意様であるという事実や俺の知名度、その他諸々を鑑みて、仕方無しに咎める事をやめたらしい。

ゼクは目立ったがり屋なので相変わらず俺と合う場所を変えようとしないのだが、ゼクのいないあの酒場に行く事はもう無いだろう、否、絶対に行かない、そういう決意を固めていた。

「しかし、あと三日であるか」

第二回B・Bの開催も間近だというのに、正直なところ、ゼクシードに勝てるビジョンが全く見えない。

俺が持つているレアで強力な銃はバジリスクぐらいしかないので、プロ同士の戦闘は光学銃だけで勝ち抜けるほど甘くはない。

かと言つて俺の実弾式銃の中で最高クラスのレアリティを持つ銃であるM P 5 K カ

スタムでは、流石に押し負けてしまう。

最新式のアーマーを纏うからこそ生きる被弾を前提とした武器達が、アーマーが買えないせいで腐っている。

どうしようもない状況に二人でため息をついた、丁度その時。

「装甲服を脱いで戦えばいいんじゃないの？」

店の戸が開き、日光と風が飛び込んだ。眩さに目をやると、夕日を背にマフラーを磨かせる影が一人。

「あら二人共、いつものニコニコ顔が台無しじやない」

パツチイの店の数少ない顧客、シノンだ。

「ああシノンか、いらつしやい！ カスタムでも新調でもワタシ様に任せな！」

「いや、今日はそういうのじやないのよね」

「なんでえ、やあつと銃目当ての客かと思つたのによー……まあ、分かつてたけど」

彼女は床に転がった丸椅子の埃をパタパタと払つて、パツチイから投げ渡されたラムネの封を開けつつ、俺の隣にそつと座つた。

「ん、こここのラムネ、結構いい味してるわね。居住区のプレイヤーメイド品みたい」

「であろう？」

「うちは飲食店じやねえんだけどな！」

こちらにすかずか向かってくるのを見て、遂にあの偏屈が今日の営業を諦めたかと思つたが、同卓してラムネを飲み始め、一気に飲み干し、地面に投げ捨てる。そして豪快にも、机の上の空き瓶だと小物だとかを全部薙ぎ倒し、机の上を更地にして、その上に膨大な量の銃とスキルのデータの並んだ巨大なホロスクロールを広げた。

「さあて、ちと真面目にシノンのプランを検討してみようぜ。どうしたってそれしかな
いって、お前も薄々分かつてたろ」

「分かつてたけど、やっぱりゼクの土俵で戦うのは……」

「いい加減腹くくな」

それは一人共思い浮かべてはいたけれど、思考の外に追いやつっていた作戦。

背を押した彼女の名を関したそのプランを、三人であーだこーだと夜が更けるまで語り合つた。

「シノンになれる」まで、会わないんじやなかつたつけ？」

リアルならば朝焼けの見える時間帯でも、GGOの空は黄昏色だ。それを見ていると、なんだかセンチメンタルな気分にさせられてしまう、と思うのは俺だけだろうか。

俺の問いにシノンは意外にも元気そうに、すらすらと言葉を綴つた。

「あら。今は完璧にシノンなんだから、何も問題はないんじやない？」

それは詭弁だ、と切つて捨てるべきなのだろうが、本来は未だ会えるはずのない好きな女と会えるという都合の良い状況を目の前にすると、それを受け入れるのに全く抵抗が無かつた。

「まあ、私も本来はち……トーレントに会うつもりは無かつたんだけど。我慢するつもりだつたんだけど。約束だつたから」

気のせいだろうか。段々言葉が棘を帶びて圧を増している気がする。

「それが分かつているなら……」

「銃士Xつて、誰？」

振り向いた彼女の顔は微笑んでいる。そのはずだ。だつてあんなに愛らしい。それなのに、本能が危険を叫ぶのは何故だろう。

「な、なぜそれを……あ、あいつはただの知り合いで……」

「へへ。警戒心の塊みたいな貴方が、背中を任せる、女の、スナイパーの、知り合い？」

まずい。具体的に何がまずいのか全く分からぬが、シノンの瞳が深く深く光を吸い込む闇を堪えつつあるこの状況は、かなり危険だ。

それなのに、口が凍りついたように動かない。

「確かに私、まだ恋人じゃないけど。まだ。でも、予約済みみたいなものよね？」

「は、はい」

「それなのに貴方は嬉々として別の女と狩りに行つたのね。いいゞ身分ですこと

「い、いや、あれはシノンの代打を頼んだだけだから！」

絞り出すように叫ぶと、暫くの沈黙の後、彼女の表情から隙が取れ、代わりにため息を吐いた。

「……分かつてたのよ、会わないつて約束を破らない為だつて。でも、我慢出来なくて今にも泣きそうな彼女を、壊れてしまわないよう抱きしめた。

仮初の肌。体温。それすらも愛おしいと思つてしまふ。
俺にとつてシノンとは、既にそういう存在だつた。

「また今日みたいに屁理屈こねて会いに来てくれよ。俺、待つてゐるから。俺も、会えたら嬉しいから」

シノンは何も言わず、ただ、抱き返す力を強めた。